



图42 C·D区掘立柱建物跡配置図

表1 据立柱建物跡柱穴観察表

図面号	遺構	備考	番号	SP番号	深さ(mm)	図面号	遺構	備考	番号	SP番号	深さ(mm)									
図41	SB1	位置：CP-E-31・32 母屋：三間×三間 三倉庇 用途：仏堂	a2	SP128	569	図41	SB5	位置：CP-G-31 母屋：二間×五間 和柱 用途：倉庫	a1	SP254	269	図41	SB9	位置：CP-Q-29 母屋：二間×六間 相違：不明	a1	SP171	179			
			a3	SP144	617				a2	SP300	179				a2	SP184	854			
			a4	SP330	363				a4	SP306	344				a4	SP173	393			
			a5	SP309	626				a5	SP307	363				a5	SP183	181			
			b1	SP117	436				b2	SP250	639				c3	SP1334	113			
			b2	SP127	698				b3	SP287	313				b1	SP1421	397			
			b3	SP133	731				b4	SP284	617				c2	SP1420	216			
			b4	SP177	720				b5	SP404	538				d1	SP1438	212			
			b5	SP396	549				b6	SP478	255				f1	SP1611	254			
			c1	SP115	323				c2	SP253	609				g1	SP1878	385			
			c3	SP167	233				c3	SP257	394				g2	SP1136	126			
			c4	SP178	473				c4	SP271	441				g5	SP1921	696			
			e1	SP229	668				e5	SP278	316				図41	SB10	位置：CP-29 母屋：二間×三間 相違：不明	a1	SP1176	559
			e5	SP469	383				e6	SP485	84							a2	SP1180	858
			g7	SP121	377				g2	SP213	601							g3	SP1160	853
g5	SP264	497	g3	SP317	535	b1	SP1347	325												
h4	SP119	510	h6	SP467	152	b4	SP1231	136												
h5	SP408	283	i1	SP211	171	c1	SP1310	228												
i2	SP161	551	i2	SP226	419	c5	SP1236	169												
i6	SP262	553	b3	SP223	443	d1	SP1256	248												
i5	SP251	293	b4	SP219	226	g3	SP1426	343												
f1	SP232	251	b5	SP314	287	図41	SB11	位置：CP-29・30 母屋：一間×三間 相違：倉庫守	a1	SP971	119									
f2	SP225	263	b6	SP410	119				g2	SP947	109									
f4	SP213	383	d1	SP140	376				g3	SP1628	316									
f5	SP210	367	e2	SP217	696				b1	SP960	239									
f5	SP412	444	c3	SP293	384				b2	SP928	188									
図41	SB2	位置：CP-31 母屋：二間×四間 一面庇 用途：住宅？	a2	SP108	673				図41	SB12	位置：DA-30 母屋：一間×三間 相違：倉庫守	a1	SP904	194				b2	SP1633	401
			a3	SP142	657							c5	SP448	723	b4	SP917	667			
			a4	SP398	283							e6	SP474	664	a1	SP935	203			
			b1	SP227	310							g2	SP251	381	g2	SP983	234			
			b4	SP174	421							g2	SP463	319	g2	SP950	226			
			b4	SP403	383							h1	SP293	340	c1	SP938	322			
			c1	SP121	273							h2	SP272	637	b2	SP987	242			
			e3	SP174	530							h6	SP781	314	g2	SP936	203			
			e4	SP428	469							a1	SP442	648	b4	SP853	230			
			g1	SP106	467							a2	SP468	146	図41	SB3	位置：CP-G-30 母屋：一間×四間 用途：倉庫	a1	SP441	837
			g5	SP192	459	b1	SP441	837				b1	SP441	837						
			h4	SP424	463	b2	SP471	284				b2	SP471	284						
			h4	SP255	145	c1	SP493	292				c1	SP476	803						
			h2	SP215	231	c2	SP476	803				d1	SP282	225						
			h2	SP184	387	d1	SP282	225				e1	SP513	148						
h2	SP419	323	a3	SP1291	110	図41	SB4	位置：CP-E-31 母屋：三間×三間 用途：倉庫	a1	SP132	720									
図41	SB3	位置：CP-31 母屋：二間×三間 用途：倉庫	a1	SP132	720				図41	SB8	位置：CP-E-33 母屋：四間×七間 一面庇 用途：住宅	a1	SP1239	523						
			a2	SP147	557							b1	SP1328	636						
			a3	SP276	693							b2	SP1328	636						
			a4	SP309	725							b3	SP1253	516						
			b1	SP139	411							c1	SP1323	546						
			b4	SP465	347							c2	SP1329	366						
			c1	SP166	360							c3	SP1384	674						
			c4	SP444	499							c4	SP1375	609						
			d1	SP394	325							c5	SP1411	136						
			d2	SP291	368							d1	SP1483	266						
			d5	SP239	326							e1	SP1674	170						
			h4	SP347	231							e2	SP1632	399						
			図41	SB4	位置：CP-E-31 母屋：三間×四間 裏側二面庇 用途：住宅							a5	SP141	363	e3	SP1476	373	e3	SP1459	274
												a4	SP362	649	f1	SP1496	520	f2	SP1645	596
						a5	SP434	253				f1	SP1633	669	f1	SP1633	669			
b1	SP124	633				f2	SP1633	669	f2	SP1633	669									
b2	SP138	541				f3	SP1633	669	f3	SP1633	669									
b2	SP165	566				g1	SP1633	669	f4	SP1633	669									
b4	SP278	588				g2	SP1632	399	g1	SP1602	646									
b5	SP388	800				g3	SP1476	373	g2	SP1816	844									
c1	SP127	667				g5	SP1700	316	g3	SP1700	316									
c2	SP134	910				g5	SP1514	723	g5	SP1514	723									
c4	SP214	823				h1	SP1641	216	h1	SP1641	216									
c5	SP467	468				h2	SP1755	646	h2	SP1755	646									
d1	SP113	373				h3	SP1765	654	h3	SP1765	654									
d2	SP122	656				h5	SP1688	329	h5	SP1688	329									
d5	SP188	210				i1	SP1508	530	i1	SP1508	530									
d4	SP224	343	i2	SP1731	237	i2	SP1731	237												
d5	SP244	361	i3	SP1770	364	i3	SP1770	364												
e2	SP139	386	i4	SP1732	189	i4	SP1732	189												
e5	SP415	373																		
f1	SP98	526																		
f2	SP160	570																		
f3	SP138	541																		
f4	SP216	480																		
f5	SP232	349																		

* 母屋規模は調査区内で確認できた範囲のものである。



図43 B区ビット集中区

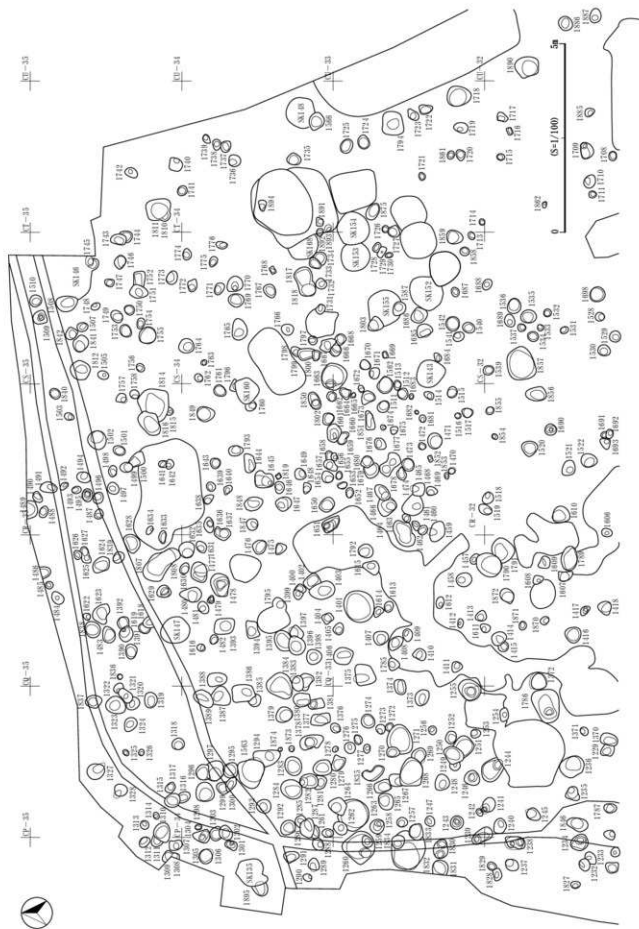


図44 C区ビット集中区(1)

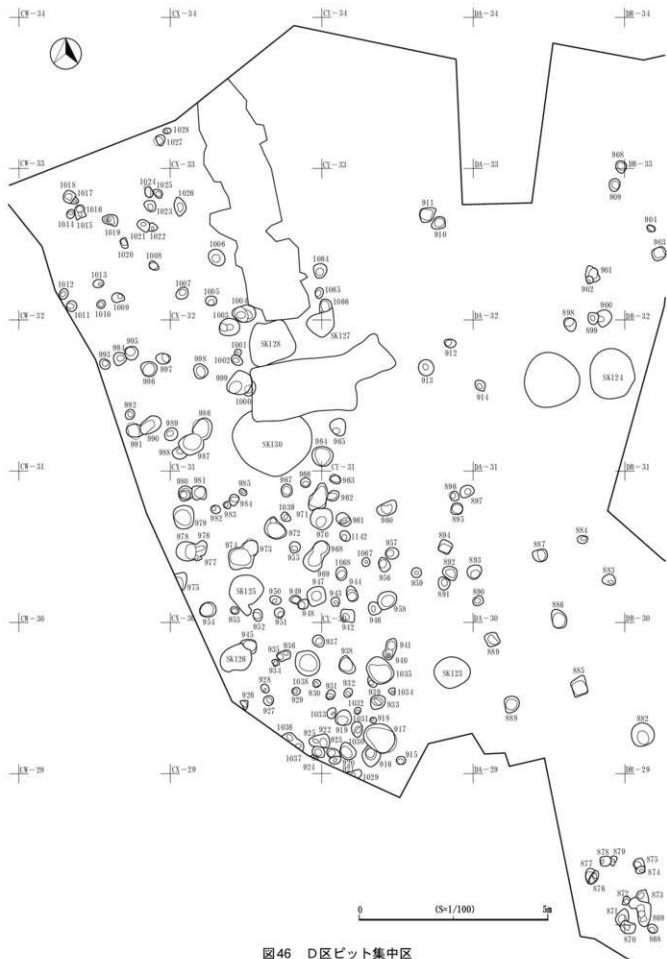


図46 D区ビット集中区

第2節 土坑

第138号土坑 (図47)

〔位置と確認〕 CQ-30グリッドに位置する。第IX層上面で暗褐色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕 第1357号ピットと重複し、本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕 長軸118cm、短軸97cmの楕円形を呈し、深さは42cmである。

〔堆積土〕 3層に分層した。2層は暗褐色土と黄褐色ロームとの混合土であり、人為堆積と考えられる。

〔壁・底面〕 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は中央がやや窪んでいる。

〔出土遺物〕 堆積土中から大塚相馬産の土瓶が出土した。

〔小結〕 出土遺物から、19世紀中葉のものと考えられる。

第145号土坑 (図47)

〔位置と確認〕 DF-24グリッドを中心に位置する。第III層で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

〔平面形・規模〕 残存長軸135cm、残存短軸126cmの円形を呈すると考えられる。深さは113cmである。

〔堆積土〕 8層に分層した。1～7層は堆積土中にロームブロックを含み、人為堆積と考えられる。

〔壁・底面〕 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がるが、途中で屈曲部を持ち、そこから開口部にかけてはやや外反しながら立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 堆積土中及び底面から古銭、煙管の雁首が出土した。古銭は銭種の判明したものはいずれも新寛永である。図48-6は煙管の雁首である。肩が付かず、脂返しはほとんど湾曲しない。火皿は小型化しておらず、補強帯も見られない。図48-7も煙管の雁首であるが、火皿を欠損している。また、3層からはガラス片が出土した。

〔小結〕 人骨は出土しなかったが、近世以降の墓と考えられる。しかし、1～7層の状況及びガラス片の出土から、後世に改葬されている可能性も考えられる。

第160号土坑 (図47)

〔位置と確認〕 CR-30グリッドに位置する。第IX層を精査中に確認した。

〔重複〕 第1760・1796号ピットと重複し、本遺構が新しい。

〔平面形・規模〕 長軸60cm、短軸58cmの円形を呈する。深さは61cmである。

〔堆積土〕 断面図を作成しなかったため不明である。

〔壁・底面〕 壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 堆積土中から肥前系と考えられる中椀が出土した。

〔小結〕 出土遺物から19世紀代のものと考えられる。

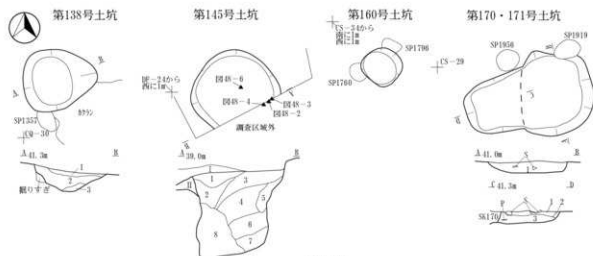
第170号土坑 (図47)

〔位置と確認〕 CS-28・29グリッドに位置する。第X層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕 第171号土坑、第1919号ピットと重複し、前者より新しく、後者より古い。

〔平面形・規模〕 長軸128m、残存短軸114mの方形を呈すると考えられる。深さは22cmである。

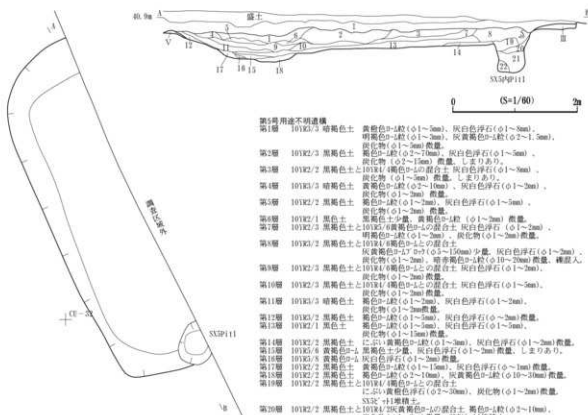
〔堆積土〕 黒褐色土を主体とする。層中には礫が含まれ、人為堆積と考えられる。



- 第138号土坑**
- 第1層 101K3/3 暗褐色土、灰白色浮石(φ1~20mm)、明黄褐色砂-土粒(φ1~10mm)、炭化物(φ1~2mm)少量。
- 第2層 101K2/2 暗褐色土と101K3/3に、赤い黄褐色砂-土との混合土、灰白色浮石(φ1~10mm)少量、小破器入。
- 第3層 101K5/4 黄褐色砂-土、暗褐色土少量、小破器入。
- 第170号土坑**
- 第1層 101K2/2 黒褐色土、明黄褐色砂-土粒(φ1~10mm)少量、浅黄褐色砂-土粒(φ1~2mm)少量、粘性あり。
- 第171号土坑**
- 第1層 101K2/3 黒褐色土に、赤い黄褐色砂-土粒(φ1~2mm)、褐色土-土粒(φ1~10mm)、炭化物(φ1~5mm)少量、破器入。
- 第2層 2.517/4 浅黄褐色土、黄褐色砂-土粒(φ1~2mm)少量。
- 第3層 101K2/2 黒褐色土に、赤い黄褐色砂-土粒(φ1~2mm)少量、黄褐色砂-土粒(φ1~5mm)、炭化物(φ2~5mm)少量、陶器破器入、しまり骨。

- 第145号土坑**
- 第1層 101K2/2 黒褐色土、灰白色浮石(φ~5mm)少量、暗褐色土少量。
- 第2層 101K2/2 黒褐色土と101K3/3暗褐色土の混合土、黄褐色砂-土粒(φ2~7)(φ~3mm)少量、灰白色浮石(φ~3mm)少量、明黄褐色砂-土粒(φ~3mm)少量。
- 第3層 101K2/2 黒褐色土、黄褐色砂-土粒(φ2~7)(φ~3mm)少量、3片片器入。
- 第4層 101K3/2 黒褐色土、褐色砂-土粒(φ~100mm)少量、明黄褐色浮石(φ~20mm)、黒色土少量。
- 第5層 101K2/2 黒褐色土、褐色砂-土粒(φ~20mm)少量、黒色土少量。
- 第6層 101K4/4 褐色砂-土、赤い黄褐色砂-土粒(φ2~7)(φ~25mm)少量、灰白色浮石(φ~3mm)少量。
- 第7層 101K2/2 黒褐色土と101K3/3暗褐色土の混合土、黄褐色砂-土粒(φ2~7)(φ~3mm)少量、黄褐色土少量、黄褐色土-土粒(φ~25mm)少量。
- 第8層 101K2/1 黒褐色土、黄褐色土少量、黄褐色土-土粒(φ~25mm)少量。

第5号用途不明遺構



- 第5号用途不明遺構**
- 第1層 101K3/3 暗褐色土、黄褐色砂-土粒(φ1~5mm)、灰白色浮石(φ1~5mm)、明褐色砂-土粒(φ1~3mm)、炭化物(φ1~2~1.5mm)少量、炭化物(φ1~2mm)少量。
- 第2層 101K2/3 黒褐色土、褐色砂-土粒(φ2~7)(φ~2~1.5mm)少量、灰白色浮石(φ1~5mm)、炭化物(φ2~15mm)少量、しまり骨。
- 第3層 101K2/2 黒褐色土と101K4/4褐色土との混合土、灰白色浮石(φ1~5mm)、炭化物(φ1~5mm)少量、しまり骨。
- 第4層 101K3/3 暗褐色土、黄褐色砂-土粒(φ2~10mm)、灰白色浮石(φ1~2mm)、炭化物(φ1~2mm)少量。
- 第5層 101K2/2 黒褐色土、炭化物(φ1~2mm)少量、灰白色浮石(φ1~5mm)、炭化物(φ1~2mm)少量。
- 第6層 101K2/1 黒色土、黒褐色土少量、黄褐色砂-土粒(φ1~2mm)少量。
- 第7層 101K2/3 黒褐色土と101K3/3黄褐色砂-土との混合土、灰白色浮石(φ1~2mm)少量、明褐色砂-土粒(φ1~2mm)、炭化物(φ1~2mm)少量。
- 第8層 101K3/2 黒褐色土と101K4/4褐色土との混合土、灰白色浮石(φ1~2mm)、炭化物(φ1~2mm)少量。
- 第9層 101K2/2 黒褐色土と101K4/4褐色土との混合土、灰白色浮石(φ1~2mm)、炭化物(φ1~2mm)少量、しまり骨。
- 第10層 101K2/2 黒褐色土と101K4/4褐色土との混合土、灰白色浮石(φ1~5mm)、炭化物(φ1~2mm)少量、しまり骨。
- 第11層 101K3/3 暗褐色土、褐色砂-土粒(φ1~2mm)、灰白色浮石(φ1~2mm)、炭化物(φ1~2mm)少量。
- 第12層 101K3/2 黒褐色土、褐色砂-土粒(φ1~5mm)、灰白色浮石(φ~3mm)少量、褐色土少量。
- 第13層 101K2/1 黒色土、褐色砂-土粒(φ1~5mm)、灰白色浮石(φ1~5mm)、炭化物(φ1~15mm)少量。
- 第14層 101K3/2 黒褐色土に、赤い黄褐色砂-土粒(φ1~3mm)、灰白色浮石(φ1~2mm)少量。
- 第15層 101K3/4 黄褐色砂-土、黒褐色土少量、灰白色浮石(φ1~2mm)少量、しまり骨あり。
- 第16層 101K3/4 黄褐色砂-土、灰白色浮石(φ1~2mm)少量。
- 第17層 101K2/2 黒褐色土、黄褐色砂-土粒(φ1~15mm)、灰白色浮石(φ~3mm)少量。
- 第18層 101K2/2 黒褐色土、褐色砂-土粒(φ2~10mm)、灰黄褐色砂-土粒(φ10~30mm)少量。
- 第19層 101K2/2 黒褐色土と101K4/4褐色土との混合土に、赤い黄褐色浮石(φ2~30mm)、炭化物(φ1~2mm)少量、SX3C+1片器入。
- 第20層 101K2/2 黒褐色土と101K4/4黄褐色砂-土との混合土、褐色砂-土粒(φ2~10mm)、炭化物(φ1~2mm)少量、SX3C+1片器入。
- 第21層 101K2/1 黒色土、明黄褐色砂-土粒(φ1~15mm)、灰黄褐色砂-土粒(φ~30mm)、炭化物(φ1~2mm)少量、しまり骨、SX3C+1片器入。
- 第22層 101K4/4 褐色土、黒褐色土少量、炭化物(φ1~2mm)少量、SX3C+1片器入。

図47 中・近世の土坑・用途不明遺構

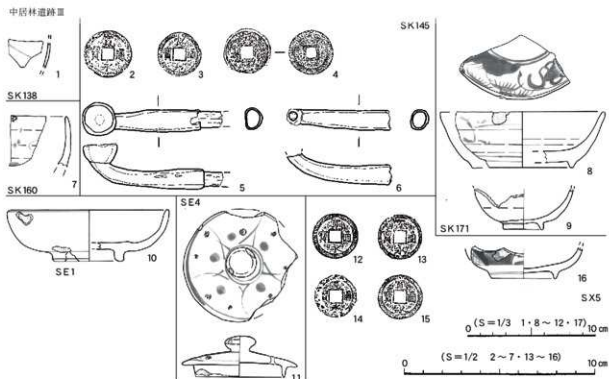


図48 中・近世の土坑・井戸跡・用途不明遺構出土遺物

〔壁・底面〕 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦である。

〔小結〕 遺物は出土しなかったが、第171号土坑との重複関係より近世以降のものと考えられる。

第171号土坑 (図47)

〔位置と確認〕 CS-28・29グリッドに位置する。第X層上面で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕 第170号土坑と重複し、本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 残存長軸128cm、短軸88cmの長方形を呈すると考えられる。深さは23cmである。

〔堆積土〕 3層に分層した。黒褐色土を主体とする。層中には礫やロームブロックが含まれ、人為堆積と考えられる。

〔壁・底面〕 残存する壁は緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

〔出土遺物〕 3層から肥前産の皿、大堀相馬産の小椀が出土した。

〔小結〕 出土遺物から18世紀代のものと考えられる。

第3節 用途不明遺構

第5号用途不明遺構 (図47)

〔位置と確認〕 CU-32グリッドを中心に位置し、第VI層で暗褐色土の落ち込みとして確認した。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形もしくは長方形を呈すると考えられるが、東側が調査区域外に延びるため不明である。規模は、長軸561cm、残存短軸145cm、深さ56cmである。

〔堆積土〕 堆積土は22層に分層した。層中にローム粒、灰白色浮石及び炭化物を含み、人為堆積と考えられる。また、2・3・15層はかたく締まっている。19~22層はビット1の堆積土である。

〔壁・底面〕 残存する壁は緩やかに立ち上がる。底面は北側の壁際が緩やかにくぼんでいる。

〔出土遺物〕 堆積土中から古銭、瀬戸産の大椀が出土した。古銭はいずれも新寛永である。

〔小結〕 平面形、壁の立ち上がり、堆積土の状況など他の遺構との相違点が見られることから用途不明遺構とした。また年代は、出土遺物から19世紀代のものと考えられる。

(葛城)

第4節 沢・溝跡

沢1、沢2はA・B区から検出された。はじめにB区で検出された沢はその平面形から、下流側は調査区域外へ、上流側は調査区西側のBK-29グリッド付近へ向かって延びると予想された。その後の調査で、BE-31グリッドから沢頭が、BK-29グリッド付近から沢の上流部が、またBS-31グリッド付近から沢の一部と考えられる落ち込みがそれぞれ確認された。沢とその上流部は、区域が離れていたため、下流を沢、上流部を沢2と呼称して調査を行ったが、整理作業時に沢を沢1に変更した。これ以外の区域については調査対象区域から外れていたため全体形を明らかにすることはできなかった。しかし、その検出状況から、沢頭から沢2そして沢1へと続く1条の沢であったと考えられる。

第16号溝跡は、沢1と一部重複して検出された。遺物の出土状況、堆積土の状況、そして第1号木組遺構の年代測定結果などから、沢1の埋没後に構築されたものであると考えられる。

沢1、沢2は、出土遺物から縄文時代～近世以降まで断続的に利用されたと考えられる。第16号溝跡は、出土遺物などから中世末～近世初頭には機能していたと考えられる。以下、沢1、沢2、第16号溝跡について述べる。なお、沢1から検出された第3号木組遺構は縄文時代の遺構であるため第3章第4節で記載した。

沢1（図49～52）

〔位置・確認〕CB～L-26～30グリッドに位置する。黒色土及び黒褐色土の落ち込みとして確認した。検出面は主に第IX層である。また、CC-29グリッド及びCI-27グリッド付近からは、現代のものと考えられる用途不明の掘り込みが検出された。

〔重複〕時期不明の第15・18号溝跡及び後述する中・近世の第16号溝跡と重複し、沢1が古い。

〔平面形・規模〕平面形は、上流側のCE-29グリッド付近でやや屈曲するが、北西～南東方向にほぼ直線的に延びる。規模は、長さ37.4m、幅4～7.7m、最大深114cmである。なお、沢頭から沢1東端までの高低差は約17mである。

〔堆積土〕堆積土は、ABラインは56層、CDラインは15層、EFラインは32層にそれぞれ分層した。ABラインの46～56層が沢1の堆積土と考えられる。1～5層は近世以降の堆積土、11～13・14層は平面では確認できなかったが近世以降の溝跡と考えられる。6～10・15～45層は後述する第16号溝跡の堆積土と考えられる。CDラインの2・9～13・15層は別遺構の堆積土と考えられる。しかし平面的な広がりを確認できなかったため、ここでは付近の第18号溝跡との関連を指摘するに留める。また、沢の最下層であるABラインの53層、CDラインの8層、EFラインの24層は、いずれも礫層である。この礫層からは、縄文時代中期後葉から後期初頭にかけての土器が出土し、これ以外の時期の遺物は出土しなかった。また、堆積土中には砂及び砂質土層がレンズ状に堆積している箇所が複数見られる。これらは総じて自然堆積であり、埋没過程において小規模な水の流れが数時期にわたって存在したと考えられる。

〔壁・底面〕壁は屈曲部までは緩やかに外傾しながら立ち上がり、屈曲部から開口部まではさらに大きく外傾し、テラス状の平場を有する箇所も見られる。しかし水流の影響や、その後の第16号溝跡などの構築によって壁の形状は一様ではない。底面は下流である南東側に向かって緩やかに傾斜しており、高低差は1.2mである。

〔出土遺物〕底面及び堆積土中から、縄文土器、石器、土師器、鉄製品、木製品、古銭、煙管、陶磁器が出土した。これらの詳細については後述するが、CC～F-29・30グリッドの範囲で、縄文時代に堆積し

たとえられる礫層を除く底面及び堆積土中から出土したものの大半は、沢1を掘り込んで構築された第16号溝跡に伴うものと考えられる。

【小結】沢1は出土遺物及び木組遺構の年代から、縄文時代中期後葉にはすでに利用されており、後期前葉までには最下層である礫層が堆積したと考えられる。その後、第16号溝跡との重複関係から、中世末～近世初頭までにはほぼ埋没したと考えられる。ただし、第16号溝跡と重複しない下流側の堆積土上層及び検出面からは近世・近代の陶磁器が出土しており、完全に埋没したのは近代以降と考えられる。また、砂層がレンズ状に複数堆積することから、埋没過程において小規模な水の流れが数時期にわたって存在していたと考えられる。近世以降は第16号溝跡の他にも小規模な溝跡などが沢1を掘り込んで構築されたようであるが、土層断面のみでの確認であり平面形など詳細は不明である。

沢2 (図54)

【位置と確認】BH-M-29～31グリッドに位置する。第VI層で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】第1号溝跡と重複するが、新旧関係は不明である。

【平面形・規模】天満宮跡地の基礎及び地下水のくみ上げ施設の影響で全体形は不明である。確認できた規模は、長さ22.1m、幅2.2～4.7m、最大深224cmである。さらに上流側のBE-31グリッド付近からは沢頭が検出された。沢頭は直径7.8mの半円状を呈し、確認できた深さは128cmである。下流側は削平によって失われている。また、BS-31グリッド付近からも長さ4.9m、幅3.9mにわたって沢の一部と考えられる落ち込みが検出された。

【堆積土】9層に分層した。黒色土及び黒褐色土を主体とする。壁際に堆積する3・4層を除き自然堆積と考えられる。9層は礫層である。最下層に礫層が堆積する状況は沢1と類似する。

【壁・底面】壁は外傾しながら立ち上がる。しかし、壁面は水流などの影響によって一様ではない。底面は下流である東側に向かって傾斜し、その高低差は2.9mである。

【出土遺物】底面及び堆積土中から縄文土器、石器、弥生土器、土師器、木製品が出土した。また、沢頭からは縄文土器が出土している。詳細については後述する。

【小結】沢2の全体形は不明であるが、沢1との連続性が伺えることから、両者は同一の沢と考えられる。また、堆積土上層から近代の陶磁器片が出土していることから、沢2が完全に埋没したのは近代以降と考えられる。

第16号溝跡 (図49～53)

【位置と確認】CB-J-26～30グリッドに位置し、第IX層で黒褐色土の落ち込みとして確認した。

【重複】沢1と重複し、本遺構が新しい。

【平面形・規模】調査段階では、重複関係が確認できた第2号木組遺構から東側を第16号溝跡として調査を行った。しかし整理段階で、遺物の出土状況、沢1の堆積土の状況、第1号木組遺構の検出状況とその年代測定結果などを検討した結果、第1号木組遺構の検出されたCC-30グリッドからB区東端のCK-26グリッドまでを本遺構の範囲とした。平面形は、北西～南東方向に緩やかなS字状を呈する。確認できた規模は、長さ34m、幅1.1～5.4m、最大深76cmである。また、幅は上流側で広く、下流側では極端に狭くなる。

【堆積土】ABラインでは、6～10・15～45層が本遺構の堆積土と考えられる。黒色土及び黒褐色土を主体とし、総じて自然堆積と考えられる。また、ABラインの9・10・16～19・24・27・29～34・36・38・40～43・45層、CDラインの6a・9・10・12・14・16・17層は砂及び砂質土層であり、埋没過程で小規模な水の流れが数時期にわたつ

て存在したと考えられる。CDラインの19～21層中には杭列に伴う木材が多量に含まれる。

〔壁・底面〕下流側の幅の狭い部分の壁は緩やかに外傾しながら立ち上がるが、上流側では様でなく、一部にテラス状の平場を持つ。底面は全体的に下流である南東側に向かって傾斜しているが、第2号木組遺構から杭列周辺で大きく窪み、そこから下流にかけては浅くなる。またCH-26グリッド付近の底面からは、自然礫がまとまって出土した。

〔その他の施設〕底面から第1・2号木組遺構と杭列が検出された。

第1号木組遺構はC C-30グリッドを中心に位置する。調査時は沢1に伴うものと考えたが、整理時の検討の結果、本遺構に伴うものとした。本遺構は直径5 cm程度の杭を列状に複数打ち込み、そこに横木を長さ約280 cmにわたって配置しており、周辺からは自然礫も出土している。なお、本遺構出土木製品を用いた放射性炭素年代測定の結果、 $170 \pm 20 \text{ yr BP}$ との値が得られている。また同試料を用いて樹種同定も行っており、マツ属との結果が得られている。詳細は第8章を参照されたい。

第2号木組遺構はC F-29グリッドを中心に位置する。第16号溝跡を精査中に、杭と横木と考えられる木材を確認した。直径5 cm程度の杭が、北東-南西方向に約290 cmにわたって打ち込まれている。これに横木が渡されるが、釘や紐などで固定した痕跡は確認できなかった。また、打ち込まれた杭は下流側の南東方向に傾いているものが多い。この他に本遺構の周辺からは、木製品、板材などの加工木、自然木、自然礫などがまとまって出土した。

杭列は、C F・G-28・29グリッドに位置する。第2号木組遺構から連続するように延びる杭列と横木と考えられる木材を確認した。杭は直径5 cm程度で、南東-北西方向に12.1 mにわたって打ち込まれている。杭列は、比較的遺存状態が良く南西側に大きく傾くもの(杭列A)と、根元付近のみ残存し傾きが不明なもの(杭列B)とに分けられる。調査時にはこれらを単に遺存状態の差と考え、同一時期のものとした。しかし杭列Aは溝跡に対して内側、杭列Bは外側に分布している。また、杭列Aの杭の傾きは土圧によるものと考えられる。これらのことから、はじめに杭列Bが構築され、その後内側に杭列Aが構築された可能性が考えられる。しかし、このことを証明する十分な調査ができなかったため、ここでは可能性の指摘に留めておく。また、杭列Aの杭を用いた放射性炭素年代測定の結果、 $330 \pm 30 \text{ yr BP}$ との値が得られている。また同試料を用いて樹種同定も行っており、マツ属との結果が得られている。詳細は第8章を参照されたい。

〔出土遺物〕底面及び堆積土中から縄文土器、石器、石製品、木製品、古銭、陶磁器が出土した。詳細については後述する。

〔小結〕本遺構は、すでに埋没していた沢1を、何らかの理由で再度開削する必要が生じて構築されたものと考えられる。第1号木組遺構及び杭列は、その検出位置と構造から沢1の堆積土の崩落を防ぐための土留めの可能性が考えられる。杭列と直行するように分布する第2号木組遺構は構造が杭列と類似する。しかしその位置関係から、沢1の堆積土の崩落を防ぐためのものとは考えにくく、水流の調節及び漂流物の遮断という一種の水利施設の可能性が考えられる。本遺構が構築された年代は、出土遺物及び杭列の杭を用いた年代測定結果から16世紀末葉から17世紀前葉と考えられる。また、第1号木組遺構の年代測定結果から、18世紀後半から19世紀に至るまで継続して機能していた可能性が高い。(葛城)

出土遺物 (図55～65)

沢1、沢2、第16号溝跡からは多量の遺物が出土した。調査時には、第16号溝跡を第2号木組遺構か

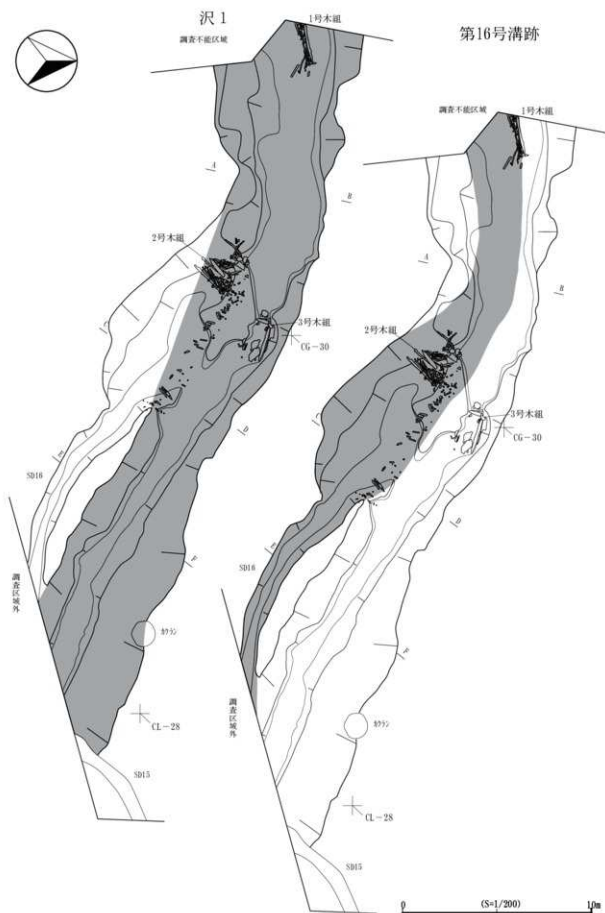
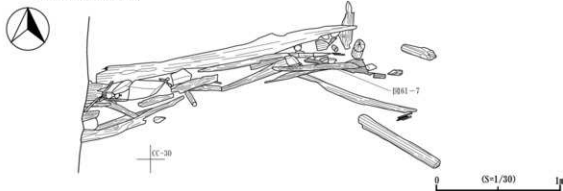


図50 沢・溝跡(2)

第1区-F34)							
第1層	101K2/1	黒色土	灰白色浮石(φ1~2mm)散見。しまり強。	第29層	101K2/7	黒褐色砂	繊維混入。
第2層	101K2/1	黒褐色土	褐色P-2粒(φ~2mm)散見。小練混入。	第31層	101K2/3	黒褐色砂	繊維混入。
第3層	101K2/2	黒褐色土	黄褐色P-1粒(φ~1mm)、灰白色浮石(φ~2mm)散見。やや砂質。	第32層	101K2/2	黒褐色砂	繊維混入。
第4層	101K2/1	黒色土と101K2/2黒褐色砂との混合土		第33層	101K2/1	黒色土と101K2/2黒褐色砂との混合土	、練土体積、繊維混入。
第5層	101K1/7/1	黒色土	明黄色P-2粒(φ~5mm)散見。小練混入。	第34層	101K2/2	黒褐色粘り土	しまり強。
第6層	101K2/2	黒褐色土	黄褐色P-2粒(φ~2mm)、灰白色浮石(φ~2mm)散見。砂の70%程度以上を埋む。小練混入。	第35層	101K2/2	黒褐色粘り土	しまり強。
第7層	101K2/2	黒褐色砂	灰白色浮石(φ~2mm)散見。1層と2層間に粘土板が層状に堆積。小練混入。	第36層	101K2/2	黒褐色土	φ10~5 散見する。
第8層	101K2/1	黒色土	灰白色浮石(φ~1mm)散見。小練混入。	第37層	101K2/2	黒褐色土	こまごま黄褐色P-1粒(φ1~10mm)散見。小練混入。
第9層	101K2/2	黒褐色土		第38層	101K2/3	黒褐色土	小練混入。やや砂質。
第10層	101K2/1	黒色土と101K2/2黒褐色砂との混合土		第39層	101K2/1	黒褐色土	小練混入。しまりやや強。
第11層	101K2/2	黒褐色砂		第40層	101K2/2	黒褐色土	練。
第12層	101K2/1	黒色土と101K2/2黒褐色砂との混合土		第16号溝跡区-F34)			
第13層	101K2/1	黒色土と101K2/2黒褐色砂との混合土		第1層	101K2/2	黒褐色土	灰白色浮石(φ1~2mm)、明黄色P-2粒(φ~10mm)散見。
第14層	101K2/1	黒色砂質土		第2層	101K2/7	黒褐色土	明黄色P-1粒(φ1~15mm)少量。灰白色浮石(φ1~2mm)散見。
第15層	101K2/3	黒褐色砂	繊維混入。	第3層	101K2/2	黒褐色土	灰白色浮石(φ2~2mm)、灰黄色粘り土(φ10~15mm)散見。しまり強。
第16層	101K2/1	黒色土と101K2/2黒褐色砂との混合土	繊維混入。	第4層	101K2/2	黒褐色土	灰白色浮石(φ1~5mm)、黄褐色P-1粒(φ~2mm)散見。
第17層	101K2/3	黒褐色土	灰白色浮石(φ~1mm)少量。しまり強。	第5層	101K2/1	黒色土	黄褐色P-1粒(φ~5mm)散見。練混入。
第18層	101K2/2	黒褐色土	黄褐色P-1粒(φ~2mm)散見。練混入。				
第19層	101K2/1	黒色土	小練・繊維混入。				

第1号木組遺構



第2号木組遺構

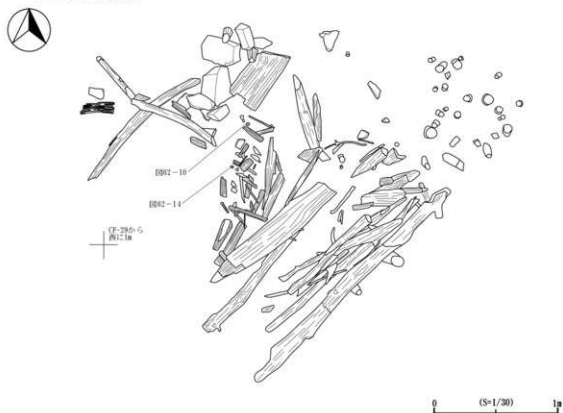


図52 第1・2号木組遺構

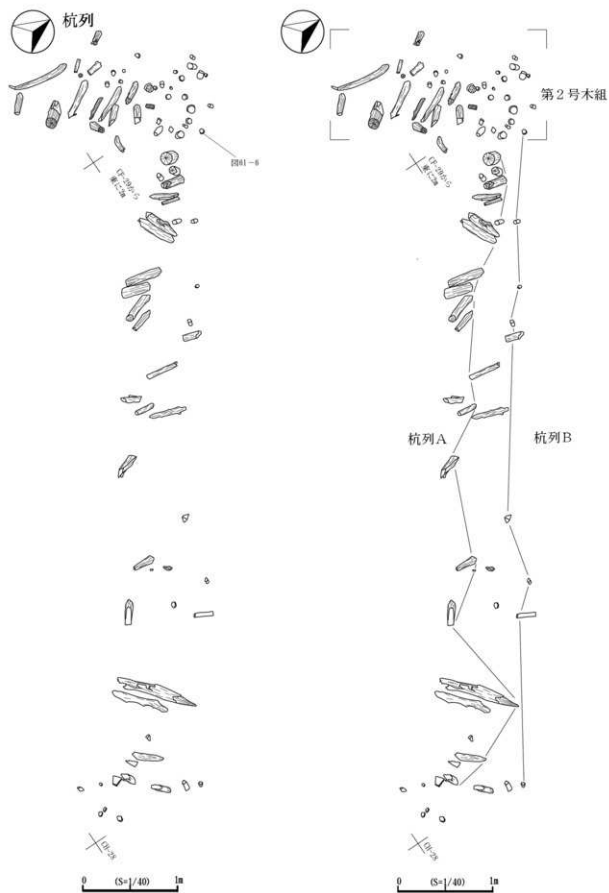
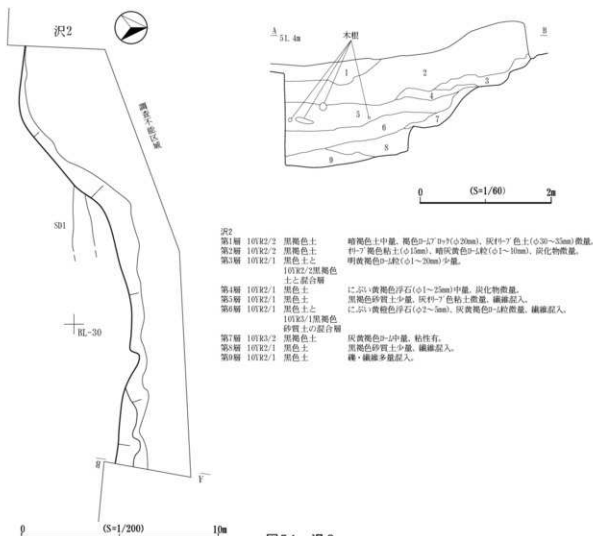


图53 杭列



ら東側と判断したため、本来第16号溝跡出土遺物として取り上げるべき遺物を、沢1出土遺物としたものが相当数存在する。ここでは、沢1、第16号溝跡出土遺物を一括して掲載し、出土位置及び層位から第16号溝跡に帰属する可能性のあるものはその旨記載する。

縄文土器（図55～57-1～32・図64・図65-1～8）

沢1・沢2・沢頭からは約47kgの縄文土器が出土し、内134点を掲載した。その大半は小破片で、磨滅しているものが多い。

縄文土器は、後述する陶磁器などとともに沢の堆積土のほぼ全層から出土した。縄文時代の堆積土と考えられる沢最下層の礫層からは、縄文時代中期後葉から後期初頭に相当する土器が出土している。その分布をみると、第1号木組遺構周辺のC C-30グリッドや第2号木組遺構の西側であるC E-29グリッド、第3号木組遺構の東側のC G-29グリッド付近からまとまって出土していることがわかる（図49）。沢全体から出土した縄文土器は、中期初頭～中葉のものもわずかにみられるが、中期後葉～後期初頭のものが主体となっている。次いで後期前葉のものが多い。礫層から出土した土器の時期から、縄文時代中期後葉にはすでに沢として機能していたと考えられる。また、少量だが後期前葉以降のものも出土している。沢1が検出されたB区では、後世の削平によって縄文時代の遺構がほとんど検出されなかったが、沢の出土遺物から考えると、調査区東側であるB～D区も縄文時代の生活域であっ

た可能性が高い。なお、第16号溝跡からもわずかに土器の小破片が出土しているが、溝跡の構築年代から、これらは後世の流れ込みであると考えられるため、ここでは記載しない。土器は、文様や形態から縄文時代中期のものと後期のものに分類した。上記以外で時期の判断が困難なものは縄文時代中期～後期のものとして一括して記述する。

・縄文時代中期の土器

中期初頭～中葉のものがわずかにみられるが、大半は中期後葉～末葉のものである。器種は、そのほとんどが深鉢の破片である。図55-1～5は初頭～中葉の破片である。口縁が波状を呈すると考えられ、貼り付けによる隆帯が施される。図55-1は突起部がやや肥厚する。図55-4・5は口縁部・胴部破片である。貼り付けによる隆帯が施され、半截竹管などの棒状工具で刺突文が施される。地文は、図55-1～3・5には隆帯上及び隆帯・刺突文間に無節Lまたは単節LRの側圧が施される。土器の胎土には繊維が混入している。時期は図55-1～3が円筒上層a式、図55-4・5が円筒上層c式に相当すると考えられる。

図55-6・7・11、図56-2、図64-2・6・7・9は中期後葉～末葉の破片である。図55-7や図64-9のように口縁部が無地文となり、内反しながら立ち上がると考えられるものや、図55-6・11や図64-2のように隆帯や彫り込みによって楕円状・渦巻状の文様が施されるもの、図64-6・7のように磨消縄文によって文様が施されるものがある。図64-6には縄文部に沿うように磨消部に円形の刺突文が施される。地文は単節LR・RLが縦方向に回転押圧され斜走縄文となるものが多い。時期は最花式～大木10式並行に相当すると考えられる。

・縄文時代後期の土器

後期初頭～前葉のものが大半を占める。多くが深鉢の口縁部及び胴部の破片である。縄文時代後期初頭のものについては一括して取り扱った。図55-8～10・13・14、図64-3・8・10～12・17のように刺突文・隆帯文・ボタン状突起が施されるものや、図55-15～24・38、図64-18・21のように磨消縄文によってコ字状・クランク状などの方形文が施されるもの、図55-25～33・34・37、図56-1・3、図64-19のように微隆帯と沈線で装飾が施される波状口縁を持ち、磨消縄文によって入組文が施されるものがある。地文は単節LRが主体となり、縦・横方向の回転によって斜走縄文となる。中には図56-26のように隆帯と沈線によって文様が施され、頸部に橋状突起をもつ壺の破片もある。

前葉のものは深鉢・鉢・壺の破片がみられる。図56-14～24、図64-16のように、口縁部が波状口縁または平縁となり、口縁部～胴部にかけて微隆帯と沈線によって入組波状文が施される。地文は、ナデやミガキによって無地文となる。図64-14のように無地文となり幅が狭い長楕円文が連続して施される深鉢や、図56-27～29のように、ヒゴ切断痕がみられる切断壺と考えられるものもある。時期は十腰内I式に相当すると考えられる。

・縄文時代中期～後期の土器

無地文または縄文地で時期の判断が困難なものを一括した。深鉢の口縁部・胴部・底部破片が多数を占める。口縁部の形態をみると、図57-1・2などのように胴部付近から口縁部にかけて内反しながら立ち上がるものや、図64-15などのように緩やかに外傾するもの、図56-8・11などのように口縁部付近で外側に屈曲するものみられる。緩やかに外傾するものの中には図56-6・7のように口縁部が折り返され、断面形が段状に張り出すものもある。地文は単節LRや無節Lが縦方向の回転によ

て斜走縄文となるもの、無節Rの短軸絡条体第1類や単節LRや無節Rの短軸絡条体第5類が縦方向に施文されるのがみられる。口縁部付近で外側に屈曲するものにはその屈曲部に単節LRの側面押圧が施される。図57-28のように底部に網代痕がみられるものもある。胎土は輪積痕や破損面の状況から外縁接合となるものが多い。時期は縄文時代中期後葉～後期に相当すると考えられる。図56-30は壺の口縁部～胴部の破片である。無地文となりナデ調整が施される。時期は縄文時代後期のものと考えられる。(澤田)

石器 (図57-33~37、図58-1・2、図65-11・12・14)

図57-33~36は沢1から、37は沢2から出土した。33は平基、34は凸基の石鏃である。35~37はスクレイパー類である。図58-1は大型の石皿、2は敲石である。図65-11は2面に敲打痕を持つ敲石である。12は磨石で先端部に機能面を持つ。14は3面を砥面とする砥石である。

土製品 (図58-3・4、図65-13)

3点出土した。図58-3・4は円盤状土製品である。いずれも土器の底部を再加工している。図65-13は外底面に3条の沈線文が同心円状に施される。スタンプ形土製品としたが、ミニチュア土器の可能性も考えられる。

石製品 (図58-5~8)

4点出土した。図58-5~7は第16号溝跡、8は沢1から出土した。いずれも両面の縁辺を打ち欠いている。(葛城)

弥生土器 (図65-9・10)

沢2中流部であるBK・J-31グリッドの底面及び堆積土から少量出土した。時期の判断が可能な破片2点を掲載した。図65-9・10は丸みを帯びて外傾する甕の破片であると考えられる。裝飾・文様をみると、口唇部に縄文による回転押圧が施され、内外面には交互に刻み目列が巡る。口縁部外面には、単節RLによって縦走縄文が施され、並行沈線や連弧状文が施される。これらは同一個体の可能性が高く、同様の特徴をもつものが遺構外からも出土している(図33-14)。時期は弥生時代中期後葉～後期前葉である念仏間式以降に相当すると考えられる。(澤田)

土師器 (図58-9~17)

111点、2938.1g出土した。大半が破片資料である。これらのほとんどが沢1のCH-28より東側から出土していることから、沢1の埋没過程で廃棄されたものと考えられる。9・10・13は堆積土層から出土した、口縁部が内湾する土師器坏である。いずれも内面には黒色処理が施される。9は内外面に段差を有する。調整は内外面ミガキであるが、外面にはミガキの前にハケメが施される。10・13は同一個体である。外面には二段の段差を有し、内面にも段差を有する。また、底面から胴部下半にかけて赤色顔料が帯状に付着している。11・12は口縁部が内湾する土師器鉢である。11は胴部下半に段を有し、内面には黒色処理が施される。12は口縁部にナデ、胴部下半にはヘラケズリが施されるが、胴部は磨滅している。15も外面が磨滅しているが、鉢と考えられる。14・16・17は土師器甕である。14は口縁部が外反し、歪んでいる。外面は口縁部にナデ、胴部にミガキが施され、頭部には弱い段を有する。内面にはハケメの後ミガキが施される。16・17は甕の底部破片である。17の外底面には木葉痕が見られる。9~11・13・14はその特徴から宇部則保氏の言う第2段階に相当し(宇部2002)、7世紀中葉のものと考えられる。その他については詳細な年代は不明であるが、器形及び調整からおおよそ8~9世紀代のものと考えられる。

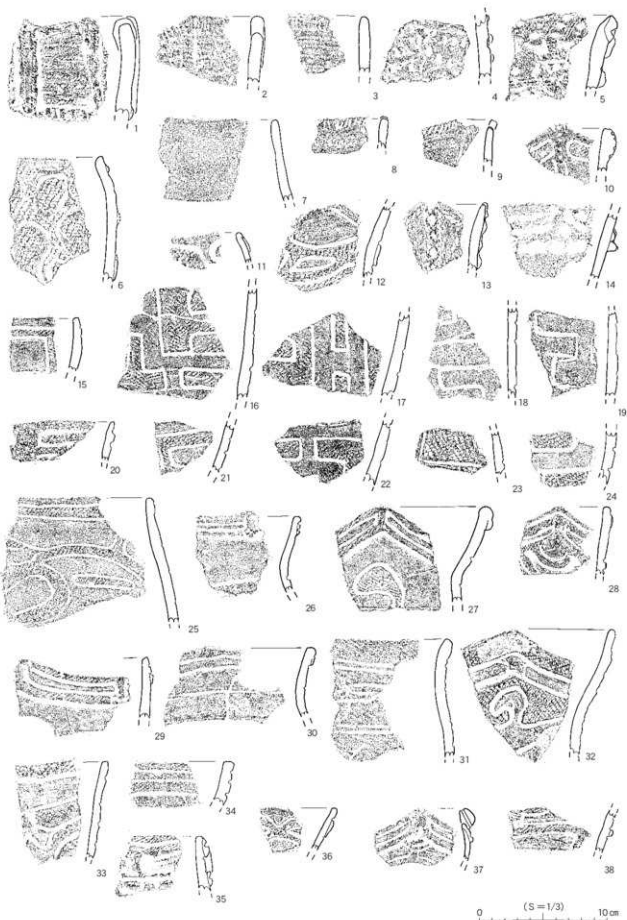


図55 第16号溝跡・沢1出土遺物(1)

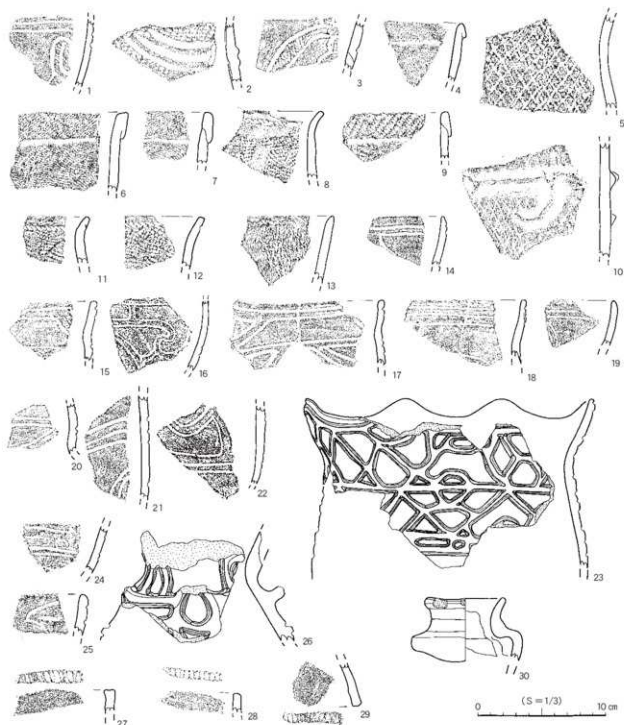


図56 第16号溝跡・沢1出土遺物(2)

鉄製品(図58-18・19)

2点図示した。図58-18は刀子である。19は胴部が棒状を呈し、先端部が強く屈曲する。いずれも沢1の礎層上面から出土した。出土位置から第16号溝跡に伴う可能性も考えられる。

木製品(図59~61)

木製品は、CF・G-28・29グリッドからまとまって出土した。沢1出土としたものもあるが、その出土状況から第16号溝跡に伴う可能性が高い。大半が堆積土中からの出土であることから、第16号溝跡の埋没過程で廃棄されたと考えられる。これらの詳細な年代は不明であるが、沢1出土陶磁器の

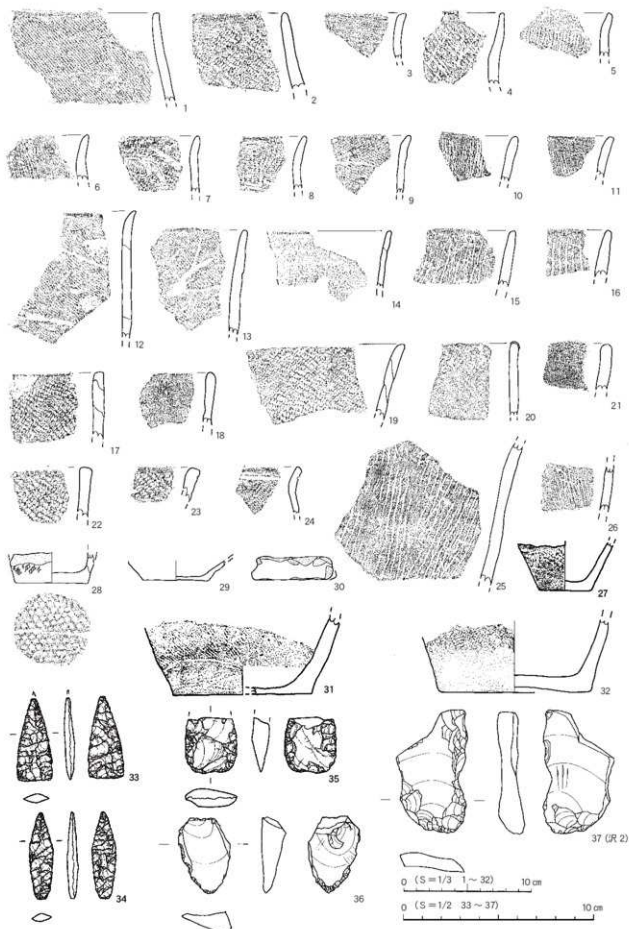


图57 第16号满跡・沢1出土遺物(3)

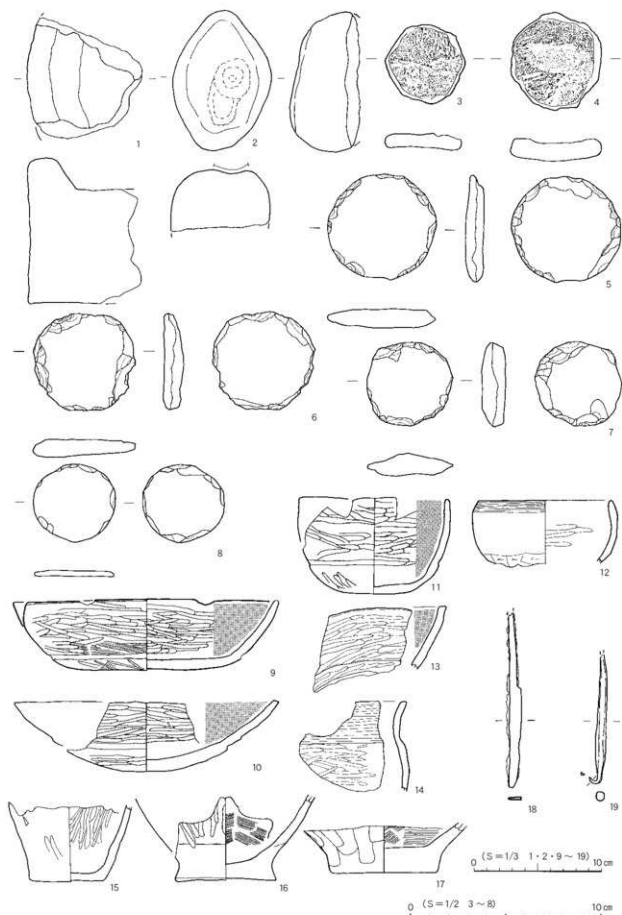


図58 第16号溝跡・沢1出土遺物(4)

年代から17世紀後葉から19世紀前葉にかけてのものと考えられる。以下、器種ごとに述べる。

挽物(図59-1~9)全て漆器碗であるが、7~9は蓋の可能性も考えられる。器形では、高台が高いもの(2~6)、低いもの(8・9)、高台のないもの(1・7)がある。また、6・7には外面に文様が施され、7~9には底面にも文様が施される。2は下地に漆が用いられている。樹種は全てブナ属である。なお、2・3・6・8・9は炭膜分析を行った。詳細は第8章を参照されたい。

底板(図59-10~12)3点出土した。直径が10cm程度のもの(10・11)と20cm程度のもの(12)がある。樹種はいずれもアスナロ属である。

曲物(図59-13~15)3点出土した。13は中央に木釘穴と考えられる穿孔が施される。樹種はいずれもアスナロ属である。

下駄(図60-1~4)4点出土した。1・2は連歯下駄、3・4は露卯の差歯下駄である。全て後緒穴が後歯の内側に施される。1は台の後歯付近に段差が見られる。後緒穴は台側縁から斜位に穿たれる。3は台後部が欠損するものの、後歯が伴っている。4は台前部が欠損する。樹種は1と3の歯がクリ、2がマツ属、4がケヤキである。

下駄歯(図60-5・6)2点出土した。差歯下駄歯と考えられる。樹種はいずれもクリである。

把手(図60-7)1点出土した。両端が一部欠損する。樹種はアスナロ属である。

鎌(図60-8)1点出土した。鎌の頭部と考えられる。頭部先端を扁平に整形している。

櫛(図60-9)1点出土した。材質はイスノキである。イスノキは関東以西に分布し、東北地方には存在しないことから、他地域からの搬入品と考えられる。

箸(図60-10)1点出土した。両端を細く整形し、棒状を呈することから箸とした。樹種はアスナロ属である。

刀形(図60-11)1点出土した。刀身部分は17.4cmで断面は三角形に整形されるが、刃部はそれほど鋭利ではない。柄は柄頭から刀身に向けて細く整形されている。形状から刀形としたが、玩具の可能性も考えられる。樹種はコナラ属である。

木槌(図61-1)1点出土した。長さ64cmの大型のものである。樹種は頭部がミズキ属、柄がカエデ属である。

杭(図61-6・7)第1・2号木組遺構及び第16号溝跡に伴う杭列からは多数の杭が出土した。この内2点を樹種同定及び年代測定用のサンプルとして取り上げ図示した。6は第16号溝跡の杭列のものである。直径4.8cm、長さ43.1cmで、先端を削り出している。樹種はマツ属である。7は第1号木組遺構出土の杭である。直径4.7cm、長さ44.6cmである。樹種はマツ属である。6・7は年代測定も実施した。詳細は第8章を参照されたい。

用途不明(図61-2~5・8・9)用途不明なものを一括した。2・3・9は有孔のものである。2は2ヶ所に穿孔が施される。曲物の可能性も考えられる。3は3ヶ所に穿孔が施されるが、この内上下2ヶ所は盲孔である。5は沢2から出土した。板状を呈し頭部付近には袈が見られる。先端部は尖るが磨滅している。9は楕円形で裏表とも波状を呈する。中央には穿孔が施され木釘が残存する。

(葛城)

古銭(図62-1~19)

第16号溝跡・沢1・沢2から近・現代のものも含めて25点出土した。銭種は、洪武通寶、永楽通寶、

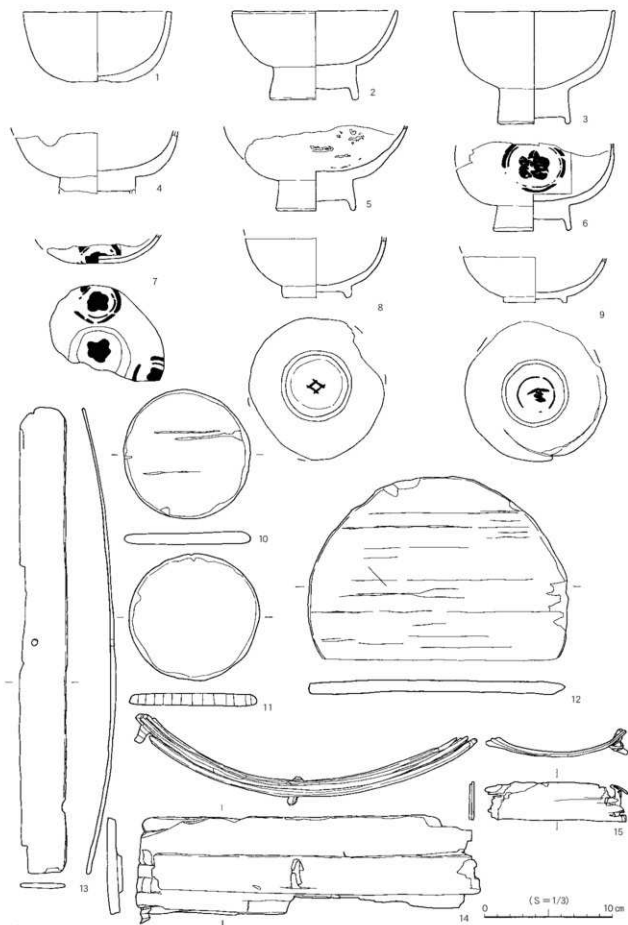


図59 第16号溝跡・沢1出土遺物(5)

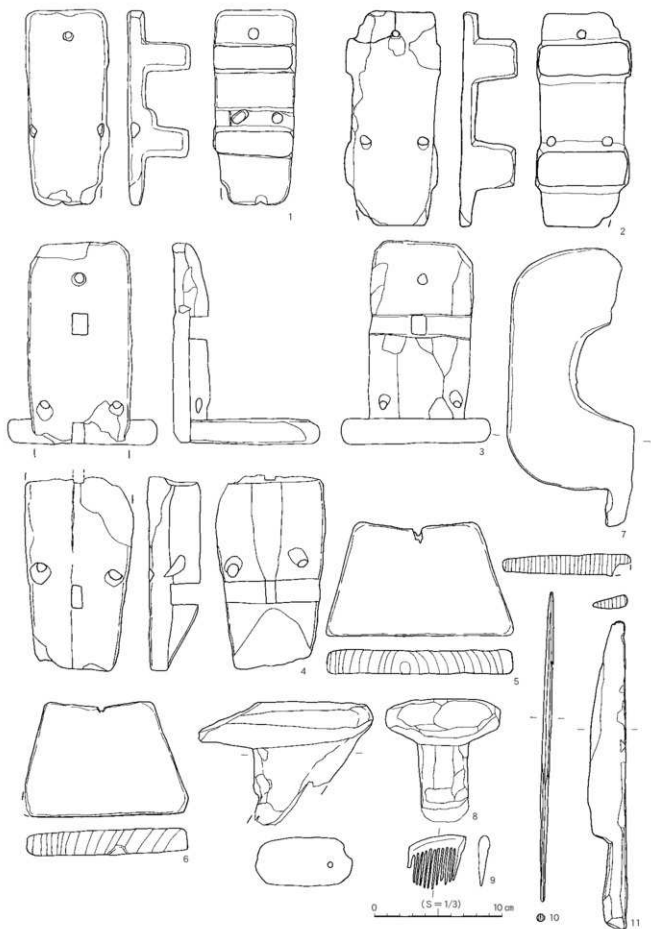


图60 第16号满跡・沢1 出土遺物(6)

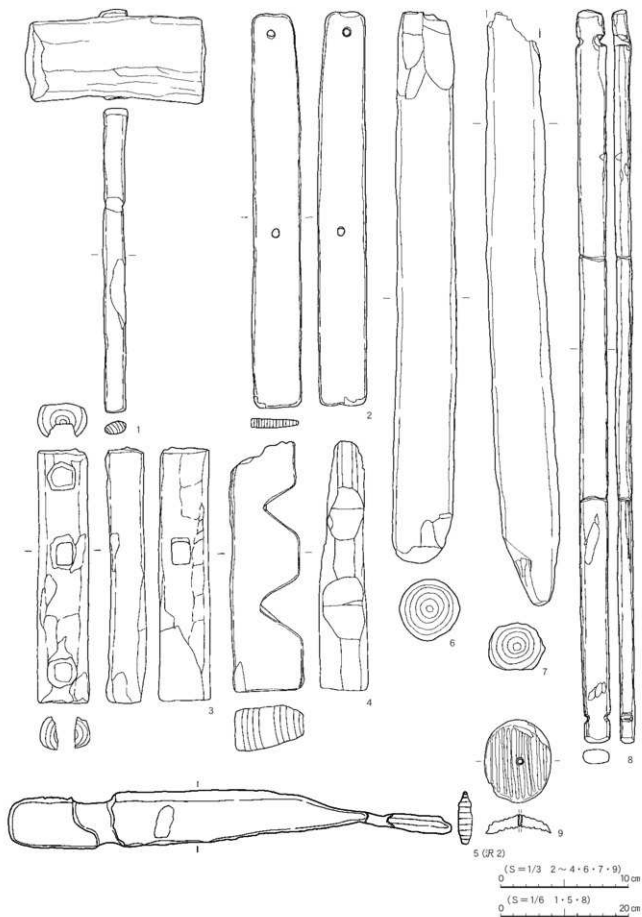


図61 第16号溝跡・沢1出土遺物(7)

古寛永通寶、新寛永通寶、大正以降のもの、銭種不明のものである。内19点を掲載した。第16号溝跡や共伴する第2号木組遺構からは、底面及び底面直上より洪武通寶・永楽通寶・古寛永通寶が出土している。図62-5は歪んでおり、廃棄銭の可能性はある。出土状況は、溝幅が広く膨らむCG-27グリッド付近にまとまってみられる。沢1の堆積土からは、古寛永通寶が主体となって出土している。洪武通寶や新寛永通寶もみられるが、それらは検出面・攪乱層から出土しているため、後世の流れ込みである可能性が高い。分布が沢1の上流部にのみみられ、推定される第16号溝跡の流路と概ね重なることから、調査時に沢1出土銭貨としたものは、第16号溝跡に伴う可能性が高い。また、掲載はしないが、沢2BJ-31グリッド付近の堆積土より大正時代以降の一銭及び十銭が4点出土した。

煙管 (図62-20~22)

沢1に伴う第1号木組遺構付近の底面・底面直上及び第2号木組遺構付近堆積土から3点出土した。すべて真鍮製で20・21は雁首、22は吸い口である。形態から21は17世紀、20は18世紀のものと考えられる。22は潰れており、詳細な時期は不明である。

陶磁器 (図62-23~35・図63-1~8・図66-21~29・図67)

近・現代も含め約120点出土した。本遺跡における陶磁器の鑑定は、弘前大学の関根達人氏の協力を得た。近代以降のものと考えられる陶磁器については年代や産地等の分類は行わず、掲載しない。中・近世のものは84点で、内22点を掲載した。第16号溝跡と沢1出土陶磁器を併せて掲載する。沢1及び第16号溝跡では16世紀~近代まで時期幅がみられる。沢2出土陶磁器については19世紀中葉の瀬戸産の磁器の小破片がわずかにみられるが、そのほとんどが近代以降のものであった。以下時期ごとに概要を述べる。

16世紀~17世紀前葉のものは、沢出土陶磁器の中でもその出土量は少ない。産地ごとにみると、中国産磁器や国産の肥前産陶磁器、瀬戸・美濃産、信楽焼、越前産陶器が出土している。中国産の磁器には図62-23のように見込みに溝字文が描かれるものや、図62-24・陶2・4・7のように竜文が描かれる染付小皿がみられる。図62-24と陶4、陶2と7はそれぞれ同一個体である可能性が高く、図62-24・陶4には高台に漆継がみられる。国産のものは図63-8のような瀬戸・美濃産の肩衝茶入、図62-28のような大窯1期に相当する天目碗や図62-25のような大窯IV期に相当する折縁小皿が見られる。中には図63-4・5のような信楽焼の茶壺と考えられるものも出土している。その他図63-1のような越前産、図63-2のような肥前産の播鉢の破片も出土している。16世紀~17世紀前葉の陶磁器には、小皿・中碗などの食膳具や播鉢といった調理具、茶入や天目碗、茶壺といった茶の湯との関連が伺えるものが出土している。

近世の陶磁器は、沢出土陶磁器の中で最も多く出土している。17世紀後葉~18世紀前葉と18世紀後葉~19世紀前葉にややまとまりをもって出土している。産地を見ると、瀬戸産の陶磁器がわずかにみられるものの、肥前産の染付がその大半を占める。図62-27は口紅が施される肥前産の中皿である。牡丹唐草文が描かれ、高台内には「大明年製」の銘が描かれ、4カ所のハリ支え痕が見られる。その他肥前産染付には、図62-31のように草花文が描かれるものや図62-33の様に網目文が描かれるもの、陶9の様にコンヤク印判によって井桁文・蕨の葉文を描き、高台内に「満福」銘がみられるものなどがある。その他、図62-30のような呉器手と呼ばれる肥前産陶器の大碗や、図62-35や陶14のように鉄絵が描かれる瀬戸・美濃産陶器の大鉢、図63-3のように泉州堺で作られたと考え

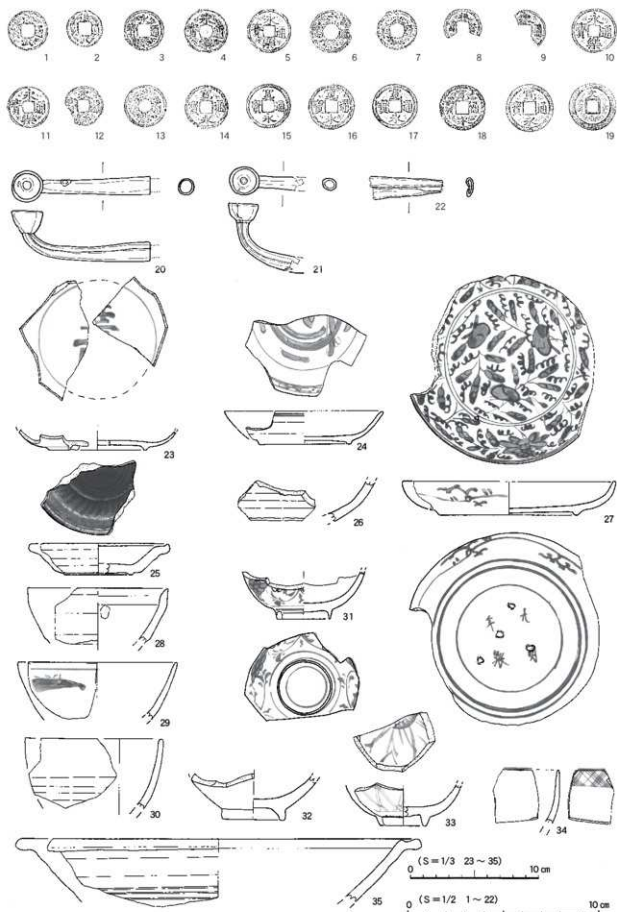


図62 第16号溝跡・沢1出土遺物(8)

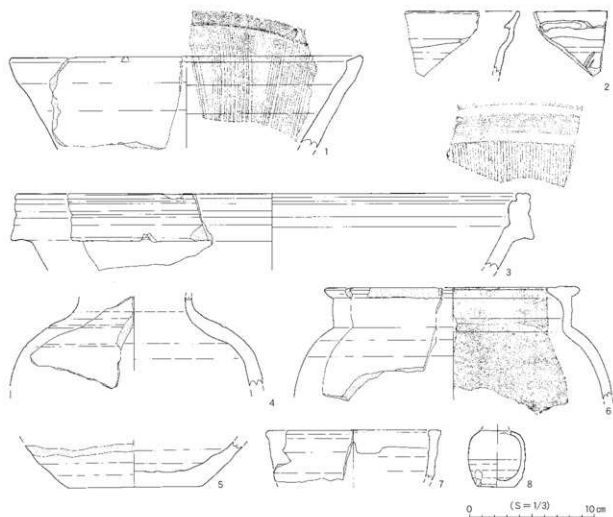


図63 第16号溝跡・沢1出土遺物(9)

られる播鉢、内面に叩き痕がみられる肥前産陶器の壺・甕も出土している。19世紀中葉のものは、出土した近世陶磁器の中でもその出土量は少ない。産地をみると、瀬戸産磁器の小破片がわずかに出土するが、そのほとんどが産地不明の陶磁器である。器種は、小皿・中碗・小碗・鉢・土瓶などである。近世の陶磁器は、中皿・小皿・中碗などの食膳具の他に壺・甕などの貯蔵具や播鉢といった調理具が目立つ。また、食膳具の中にも大鉢といった盛り皿としての用途が高いもの、火入・香炉なども出土している。

先述したように沢及び第16号溝跡からは中世末～近代に至るまで幅広く出土している。出土分布についても、第16号溝跡と沢1の合流部であるCG-27・28グリッド付近からまとまって出土する他、ほぼ全域から出土する。しかし、第16号溝跡及び沢1の底面及び底面直上の出土陶磁器をみると、第16号溝跡の推定流路に沿うような出土状況となり、時期も16世紀～17世紀前葉のものにほぼ限定される。このことから縄文時代に形成された沢がある程度埋没した後、流路を変えるように第16号溝跡が構築されたと考えることができる。また、近代以降の陶磁器が沢のほぼ全域から出土していることから、近・現代に至るまで完全に埋没していなかったと考えられる。(澤田)

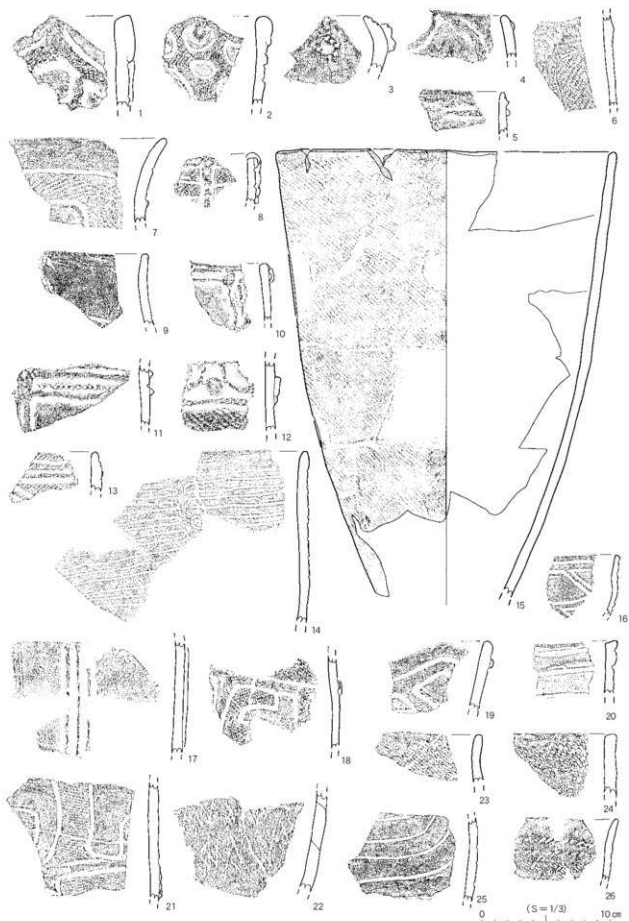


図64 沢2・沢頭出土遺物(1)



图65 沢2・沢頭出土遺物(2)

第5節 遺構外出土遺物

砥石・古銭・煙管・陶磁器等が出土した。ここでは時期不明の溝跡や中・近世のピット内出土遺物についても併せて記載する。また、図示しなかったが第371・487・507・509・629号ピットからは、柱の一部が出土した。

砥石 (図66-1・2)

砥石が2点出土した。ともに端部が欠損している。図66-1は頁岩製で胴部がやや括れる棒状となる。使用面は側面4面である。図66-2は凝灰岩製で胴部が大きく括れる楕形となる。側面4面に加え、破損面も砥面として使用されたと考えられる。それぞれ第1615・120号ピット内から出土した。

古銭 (図66-3～16)

A～C区から、近・現代のものも含めて34点出土した。第6号溝跡や第1384・1805号ピットから出土するものもあるが、その大半は第I層や攪乱層、盛土から出土している。

銭種は、天聖元寶、永樂通寶、古寛永通寶、新寛永通寶、常平通寶、明治以降のもの、銭種不明のものである。内14点を掲載した。古銭は、江戸時代中頃の寛永通寶が約半数を占め、中でも新寛永通寶の出土が目立つ。また寛永通寶とほぼ同時期に朝鮮で製造された常平通寶も出土している(図66-12)。銭種不明のものについては、その大半が明治以降のものと考えられるが、中には寛永鉄銭が錆着したと考えられるものもある。

煙管 (図66-17～20)

沢1及び沢2付近から4点出土した。すべて攪乱層より出土している。真鍮製で図66-17～19は雁首、20は吸い口である。時期は18世紀～19世紀のものと考えられる。

陶磁器 (図66-21～29、図67)

調査区A～C区から散発的に出土した。出土点数は約300点である。B～D区のピット内や一部A区斜面上方の第II層にもみられるが、そのほとんどが表土である第I層から出土している。近代以降のものと考えられる陶磁器も相当数出土したが、年代や産地等の分類は行わず、掲載しない。中・近世の陶磁器は約150点で、内30点を掲載した。時期は16世紀から19世紀中葉まで幅広く出土している。

16世紀～17世紀初頭のもの是中国産の磁器、国産の肥前、瀬戸・美濃の陶磁器が少量出土している。器種は小皿・皿・碗といった食膳具で、図66-21のような中国産青磁や、22のように白釉下に菖蒲文と考えられる鉄絵を描いた絵唐津の皿もみられる。中には図67-3のように茶道具である瀬戸・美濃焼大窯IV期に相当する天目碗もある。17世紀前葉のものは、瀬戸・美濃焼登窯I期に相当するもので、中には図66-25のように雑器である志野織部の小皿も出土している。調理具である肥前産の播鉢もみられる。

近世の陶磁器は、その出土量が17世紀後葉～18世紀前葉と18世紀後葉～19世紀前葉にややまとまっている。瀬戸・美濃焼などがわずかにみられるが、肥前産の染付がその大半を占める。17世紀後葉～18世紀前葉には肥前産陶器であるいわゆる京焼風陶器が目立ち、内野山窯のものや、18世紀後葉～19世紀前葉の大堀相馬産陶器がわずかにみられる。肥前産染付には、図66-26の見込に蛇ノ目輪割しがみられるもの、図66-29のたご唐草文が描かれるもの、図67-8の波濤文が描かれる青磁染付、陶17の矢羽根文が描かれるもの、陶18のコンニャク印判によって蕨の葉文が描かれるものなど多彩である。図66-27は重ね焼痕がみられ、牡丹唐草文が描かれる中皿で、焼継がみられる。器種は食膳具で

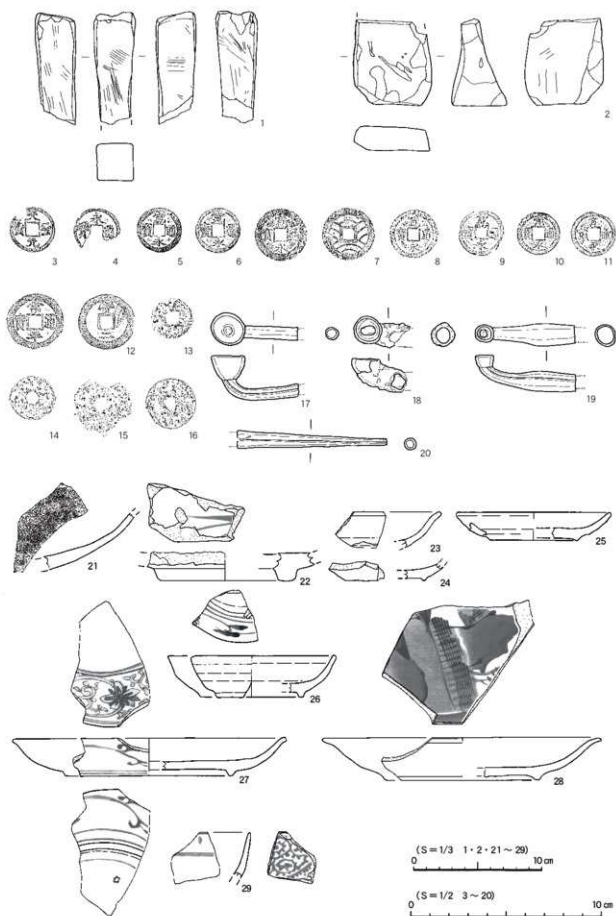


図66 中・近世の遺構外出土遺物(1)

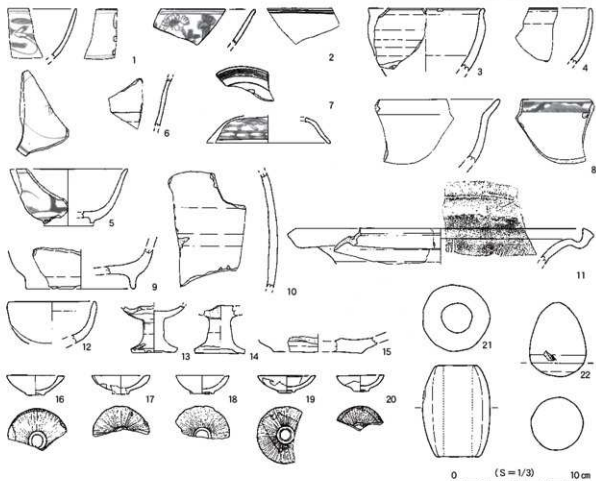


図67 中・近世の遺構外出土遺物(2)

ある中皿・小皿・小坏・小碗・中碗・鉢などがほとんどである。中には陶16のように焼継がみられる肥前産染付の大皿の小破片も出土している。18世紀後葉～19世紀前葉になると、食膳具の中にも、蓋・德利、湯飲み碗がわずかにみられるようになる。中には図67-12～14の仏飯器のように信仰との関連も伺えるものも出土している。18世紀末葉～19世紀中葉にかけては、肥前・肥前系のものに比べ瀬戸焼の陶磁器が多くなり、小久慈・大塚相馬・東北産のものがわずかに混じる。器種は近世以降にみられた食膳具に加え、瓦質の焔炉・火鉢といった暖房具や火入・香炉がみられるようになる。また、この時期には図67-16～20のように化粧具である紅皿の出土が目立つ。

出土遺物は、17世紀後葉以降のものが大半を占める。時期ごとに分布をみると、16世紀～17世紀前葉の陶磁器はA区西側急斜面とB区の沢1周辺及びビット集中区からわずかに出土する。それ以降の陶磁器は、A・B区のほぼ全域にみられるが、調査区東側であるC・D区の遺構外からはほとんど出土していない。ビット内出土陶磁器をみると、B区内ビットから16世紀～17世紀前葉のものや19世紀中葉のものがわずかに出土し、C区内ビットからは19世紀中葉～近代のものが多く出土している。遺構外とビット内の陶磁器の出土状況から、C・D区では近代以降に、宅地等の造成にともなって削平を受けたと考えられる。

その他、陶鍾1点と用途不明磁器製品が1点出土している。21は俵形となり全体に釉掛けされる。重量は227.2gで、時期は不明だが、近世以降のものであると考えられる。22は卵形を呈し、胴下部～下端にかけて調整痕がみられる。重量は151.5gである。全体的に灰色となり、表面に焼成前に付着したと考えられる砂がみられたため、磁器製品として扱ったが、時期・用途等の詳細は不明である。(澤田)

[小結] 建替えの可能性も示唆したが、堆積土や平面形から2軒とした。遺物が出土せず、帰属年代は不明であるが、堆積土やピットの検出状況から少なくとも近世以降であると考えられる。(澤田)

第2節 土坑

中居林遺跡の土坑は、ビニール片が出土するなど帰属時期が現代と判明したものを除き全てを調査した。しかしその後の整理作業の段階で、遺物の出土状況、堆積土及び重複関係から近現代以降と判断したものは欠番とした。本節で報告する時期不明の土坑は、共存する遺物が出土しなかったなどの理由で帰属時期を明確にできなかったものである。以下、個別の記載は行わず概要のみを述べる。個々の計測値などは遺構一覧表を参照されたい。

今回の調査で検出された時期不明の土坑は69基である。これらは調査区全域に分布するが、調査区西側の斜面部(A区)にややまとまりが見られる。検出層位は基本層序の堆積状況によって第Ⅲ層から第ⅩⅠ層まで多岐にわたる。全体の傾向として、A区では第Ⅲ・Ⅳ層で検出されるものが多く、後世に削平を受けたと考えられる調査区東側(B~D区)では第Ⅵ層以下で検出されるものが多い。

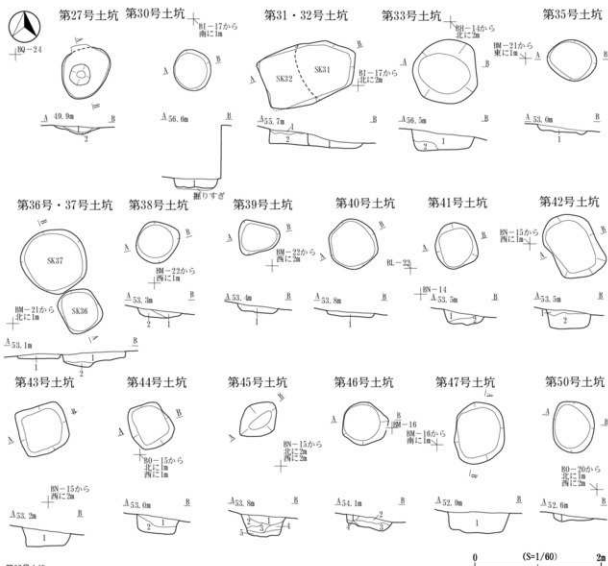
平面形は第3章第2節に準じて分類すると、円形基調のもの45基、方形基調のもの17基、不整形6基、不明1基となる。円形基調のもの内、円形は37基(第30・33・35~38・40・41・46・51A・57・62・71・77・79・87・88・94・99・101・106・109・118・121・123~125・127・130・143・146~148・152・155・164・167号土坑)、楕円形は8基(第27・39・42・47・50・61・90・115号土坑)である。また方形基調のもの内、方形は14基(第32・43・44・51B・56・58・76・89・107・117・128・135・137・172号土坑)、長方形は3基(第110・120・136号土坑)である。この他に不整形が6基(第31・45・85・126・140・141号土坑)、検出範囲がわずかであるため不明のものが1基(第78号土坑)である。

規模は、円形基調のもので長軸43~195cmで平均87cm、短軸41~176cmで平均77cm、深さ12~78cmで平均27cm、方形基調のもので、長軸59~180cmで平均98cm、短軸44~143cmで平均81cm、深さ13~66cmで平均32cmである。

断面形は大半が緩やかに外傾しながら立ち上がるが、第126・135・141・143・147号土坑のようにほぼ垂直に立ち上がるものもある。

底面は平坦なものが多いが、第107・109号土坑のように凹凸がみられるものもある。また、第27号土坑は底面がややくぼみ、第124号土坑の底面からは、直径6~10cm、深さ40~43cmの小ピットが3基検出された。第136号土坑は壁の周囲から直径12~25cm、深さ6~50cmの小ピットが7基検出された。また、第146号土坑の底面直上からは焼土範囲が検出され、その直上からは自然礫がまともに出土した。

堆積土は、黒色土及び黒褐色土を主体とするもの32基(第30・31~33・35~37・39~41・45・51A・51B・62・71・76~78・85・87~90・94・99・115・117・120・121・124・130・164号土坑)、黒色土及び黒褐色土とロームブロックが混合土の状態を呈するもの26基(第38・42~44・46・47・50・56~58・61・79・101・106・107・109・110・123・125~127・140・143・146・147・167号土坑)、堆積土中に八戸火山灰起源と考えられる白色浮石をブロック状に含むもの10基(第118・128・135~137・141・148・152・155・172号土坑)に大きく分けられる。第27号土坑は土層図を作成できなかった。なお、平面形と堆積土に明確な相関関係は見出せなかった。



- 第27号土坑
第1層 101K3/3 暗褐色土 浮石粒(φ1~2mm)散見。
第2層 101K2/6 黄褐色土 暗褐色土中量。磁性赤り。
- 第30号土坑
第1層 101K2/1 黒色土 中層浮石散見。
- 第31号土坑
第1層 101K1.7/1 黒色土 黒褐色砂質土少量。
- 第32号土坑
第1層 101K2/1 黒色土 中層浮石、黒褐色砂質土散見。
第2層 101K1.7/1 黒色土 黒褐色砂質土少量、中層浮石散見。
- 第33号土坑
第1層 101K1.7/1 黒色土 中層浮石少量、黄褐色土(φ1~5mm)、白色浮石(φ1~2mm)散見。
第2層 101K2/1 黒色土 黄褐色土(φ1~7mm)、中層浮石少量、白色浮石(φ~1mm)、黒褐色土散見。
- 第35号土坑
第1層 101K2/1 黒色土 黒褐色土中量、南部浮石(φ1~5mm)、中層浮石散見。
- 第36号土坑
第1層 101K2/1 黒色土 中層浮石、南部浮石(φ1~3mm)散見。
- 第37号土坑
第1層 101K2/1 黒色土 黒褐色砂質土少量、中層浮石、南部浮石(φ1~5mm)散見。
第2層 101K2/2 黒褐色土 黄褐色土少量、中層浮石散見。
第3層 101K2/2 黒褐色土 南部浮石(φ1~10mm)少量、中層浮石散見。
- 第38号土坑
第1層 101K2/1 黒色土 黒褐色土中量、中層浮石散見。
第2層 101K2/2 黒褐色土 黄褐色土中量、中層浮石散見。
第3層 101K2/2 黒褐色土 黄褐色土中量、中層浮石散見。
- 第39号土坑
第1層 101K2/1 黒色土 黒褐色土少量、中層浮石、南部浮石(φ1~5mm)散見。
- 第40号土坑
第1層 101K2/1 黒色土 黒褐色土、中層浮石、南部浮石(φ1~2mm)散見。
- 第41号土坑
第1層 101K2/3 暗褐色土 浅黄褐色浮石(φ1~2mm)、中層浮石散見。
第2層 101K2/3 黒褐色土と101K3/3暗褐色土との混合土 浅黄褐色浮石(φ1~2mm)、中層浮石散見。
- 第42号土坑
第1層 101K2/3 黒褐色土と101K3/3暗褐色土との混合土 灰白色浮石(φ1~5mm)、明黄褐色浮石(φ1~2mm)、中層浮石散見。
- 第43号土坑
第1層 101K2/3 暗褐色土と101K3/3暗褐色土との混合土 浅黄褐色浮石(φ1~2mm)、中層浮石散見。
第2層 101K2/3 暗褐色土と101K3/3暗褐色土との混合土 浅黄褐色浮石(φ1~3mm)、中層浮石散見。
- 第44号土坑
第1層 101K2/3 暗褐色土 南部浮石(φ2~5mm)、中層浮石散見。
第2層 101K2/3 暗褐色土 南部浮石(φ2~7mm)、中層浮石散見。
第3層 101K2/2 暗褐色土 南部浮石(φ2~5mm)、中層浮石散見。
第4層 101K2/3 暗褐色土中量、南部浮石(φ2~5mm)、中層浮石、黄褐色土(φ1~2mm)散見。
第5層 101K2/3 暗褐色土 黒褐色土少量、南部浮石(φ2~5mm)、中層浮石、黄褐色土(φ1~2mm)散見。
- 第45号土坑
第1層 101K2/3 暗褐色土 中層浮石散見。
第2層 101K2/3 暗褐色土と101K3/3暗褐色土との混合土 黄褐色土(φ1~2mm)、南部浮石(φ2~5mm)、中層浮石散見。
第3層 101K2/3 暗褐色土 黄褐色土少量、黄褐色土(φ1~2mm)、中層浮石散見。
第4層 101K2/3 暗褐色土 黄褐色土少量、黄褐色土(φ1~2mm)、中層浮石散見。
- 第46号土坑
第1層 101K2/2 暗褐色土と101K3/3暗褐色土との混合土 南部浮石(φ3~10mm)、中層浮石散見。
- 第47号土坑
第1層 101K2/2 暗褐色土と101K3/3暗褐色土との混合土 中層浮石、南部浮石(φ3~10mm)、中層浮石散見。
- 第48号土坑
第1層 101K2/3 暗褐色土と101K3/3暗褐色土との混合土 中層浮石、南部浮石(φ1~3mm)散見。
- 第49号土坑
第1層 101K2/3 暗褐色土と101K3/3暗褐色土との混合土 中層浮石、南部浮石(φ1~3mm)散見。
- 第50号土坑
第1層 101K2/3 暗褐色土と101K3/3暗褐色土との混合土 中層浮石、南部浮石(φ1~3mm)散見。

図69 時期不明の土坑(1)

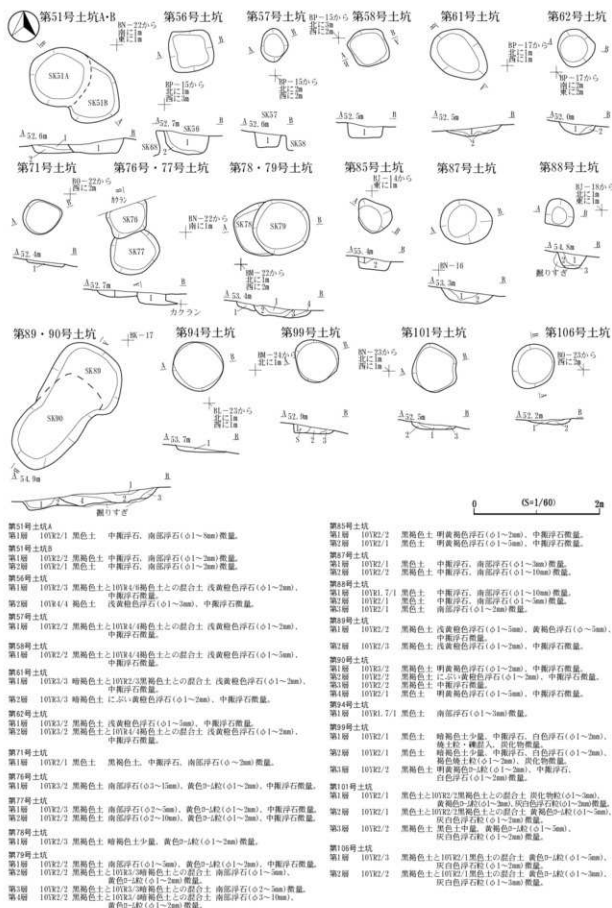
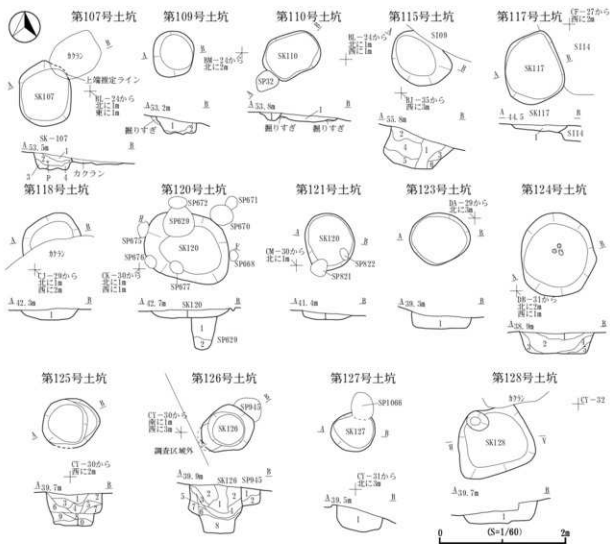


図70 時期不明の土坑(2)



- 第107号土坑**
 第1層 103K2/2 黒褐色土と103K3/3暗褐色土との混合土 黄褐色浮石粒(φ1~5mm)、中級浮石、灰化物・焼土粒(φ1~2mm)、白色浮石(φ1~3mm)少量。
 第2層 103K2/2 黒褐色土と103K2/3暗褐色土との混合土 黄褐色粒(φ1~7mm)、中級浮石、白色浮石(φ1~3mm)少量。
 第3層 103K2/2 黒褐色土と103K2/1黒色土との混合土 黄褐色浮石粒(φ1~2mm)、中級浮石、白色浮石(φ1~2mm)少量。
 第4層 103K2/2 黒褐色土 黄褐色浮石粒(φ1~3mm)少量。粘性や中あり。
第109号土坑
 第1層 103K2/2 黒褐色土と103K3/3暗褐色土との混合土 黄褐色浮石粒(φ1~3mm)、中級浮石、灰化物・焼土粒(φ1~2mm)、白色浮石(φ1~2mm)少量。
第110号土坑
 第1層 103K2/2 黒褐色土と103K2/3暗褐色土との混合土 黄褐色浮石粒(φ1~3mm)、中級浮石、灰化物・焼土粒(φ1~2mm)少量。
第115号土坑
 第1層 103K2/2 黒褐色土 黄褐色粒(φ1~10mm)少量。D+堆積土。
 第2層 103K2/2 黒褐色土 暗褐色土少量。明褐色粒D-粒(φ1~5mm)少量。
 第3層 103K2/3 暗褐色土 明褐色粒D-粒(φ1~5mm)少量。やしまり強。
 第4層 103K2/2 黒褐色土 黄褐色粒(φ1~10mm)少量。
 第5層 103K2/3 暗褐色土 明褐色粒D-粒(φ1~5mm)少量。
 第6層 103K3/3 黄褐色D-土。
第117号土坑
 第1層 103K2/2 黒褐色土 暗褐色土D+状に少量。灰白色浮石(φ~5mm)、灰化物粒(φ~10mm)少量。
第118号土坑
 第1層 103K2/1 黒色土 灰白色D-粒(φ1~2mm)少量。D+に黄褐色土D+層(φ~10mm)、酸化鉄混入。
第120号土坑
 第1層 103K2/1 黒色土 明褐色粒D-粒(φ1~10mm)、灰白色粒D-17'粒(φ1~20mm)、灰白色浮石(φ1~5mm)、灰化物粒少量。
第121号土坑
 第1層 103K2/2 黒褐色土 D+に黄褐色浮石(φ~5mm)、暗褐色粒D-粒(φ1~10mm)少量。
第123号土坑
 第1層 103K3/4 暗褐色土と103K2/1黒色土と103K5/5黄褐色D-土との混合土 灰白色浮石(φ1~5mm)少量。

- 第124号土坑**
 第1層 103K2/1 黒色土 明褐色粒D-粒(φ1~5mm)、灰白色D-粒(φ1~3mm)少量。
 第2層 103K2/1 黒色土と103K2/3暗褐色土との混合土 明褐色粒D-粒(φ1~10mm)少量。
 第3層 103K3/3 暗褐色土と103K3/4暗褐色土との混合土 明褐色粒D-粒(φ1~2mm)、灰化物φ~1mm少量。
 第4層 103K2/1 黒色土 黄褐色粒D-粒(φ1~3mm)、灰化物(φ~1mm)少量。
 第5層 103K4/4 褐色D-土 灰化物塊(φ~10mm)混入。
第125号土坑
 第1層 103K3/3 黒褐色土 褐色D-粒(φ1~10mm)、灰白色浮石(φ1~2mm)少量。
 第2層 103K2/2 黒褐色土 灰化物(φ~1mm)、灰白色浮石(φ1~2mm)少量。
 第3層 103K2/2 黒褐色土 灰白色D-土との混合土 明褐色粒D-粒(φ1~2mm)、灰化物(φ1~2mm)少量。
 第4層 103K3/2 黒褐色土 灰白色D-土との混合土 褐色D-粒(φ1~2mm)少量。
 第5層 103K3/2 黒褐色土 灰白色D-土との混合土 褐色D-粒(φ1~2mm)少量。
 第6層 103K2/2 黒褐色土 D+に黄褐色D-土(φ1~2mm)少量。
第126号土坑
 第1層 103K4/4 褐色D-土 灰白色D-粒(φ1~2mm)少量。
 第2層 103K5/5 暗褐色土と103K4/4褐色D-土との混合土 明褐色粒D-粒(φ1~2mm)、灰化物(φ1~2mm)、褐色D-粒(φ1~2mm)少量。
 第3層 103K5/2 黒褐色土 灰白色D-土との混合土 明褐色粒D-粒(φ1~2mm)、灰化物(φ1~2mm)、褐色D-粒(φ1~2mm)少量。
 第4層 103K5/2 黒褐色土 灰白色D-土との混合土 明褐色粒D-粒(φ1~2mm)、灰化物(φ1~2mm)、褐色D-粒(φ1~2mm)少量。
 第5層 103K5/2 黒褐色土 灰白色D-土との混合土 明褐色粒D-粒(φ1~2mm)、灰化物(φ1~2mm)、褐色D-粒(φ1~2mm)少量。
 第6層 103K5/2 黒褐色土 灰白色D-土との混合土 明褐色粒D-粒(φ1~2mm)、灰化物(φ1~2mm)、褐色D-粒(φ1~2mm)少量。
第127号土坑
 第1層 103K2/3 黒褐色土 黄褐色粒D-粒(φ1~20mm)多量。灰白色浮石(φ1~25mm)少量。
第128号土坑
 第1層 103K2/2 黒褐色土 灰白色浮石(φ1~10mm)、黄褐色粒D-粒(φ1~20mm)少量。

図71 時期不明の土坑 (3)



第130号土坑

- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色砂-17.9? (φ1-10mm), 灰白色浮石(φ1~2mm)少量, 炭化物(φ<5mm)散在。
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色砂-17.9? (φ1~20mm)少量, 灰白色浮石(φ1~2mm), 粘土(φ2~3mm), 炭化物(φ<1mm)散在。
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 明黄褐色砂-17.9? (φ1~20mm)中量, 黄褐色浮石(φ<5mm)散在。
 第135号土坑

- 第1層 10YR2/2 暗褐色土 黄褐色砂-12 (φ1~2mm), 炭化物(φ1~2mm), 灰白色浮石(φ1~10mm), 褐色砂-12 (φ1~2mm)散在。
 第2層 10YR2/4 暗褐色土 灰白色砂-12 (φ1~2mm)散在。
 第3層 10YR2/4 暗褐色土と10Y2.5/明黄褐色土との混合土 灰白色砂-12 (φ1~2mm)散在, 小礫層入。
 第3層 10YR2/2 黒褐色土と10Y2.5/灰白色砂-12 (φ1~20mm)少量。
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 灰白色砂-12 (φ1~20mm), 黄褐色砂-12 (φ1~20mm)少量。
 第136号土坑

- 第1層 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色砂-12 (φ1~20mm)少量, 炭化物(φ1~2mm), 灰白色浮石(φ1~2mm)散在。
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物(φ1~2mm)散在。
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色砂-12 (φ1~20mm)少量, 黄褐色砂-12 (φ1~20mm), 炭化物(φ1~2mm)散在。
 第4層 10YR2/2 黒褐色土と10Y2.5/灰白色砂-12 (φ1~20mm)の混合土 炭化物(φ1~2mm)散在。
 第140号土坑

- 第1層 10YR2/6 黄褐色土と10Y2.5/黒褐色土との混合土 炭化物(φ2~3mm), 灰白色浮石(φ1~2mm)散在。
 第143号土坑

- 第1層 10YR2/4 暗褐色土と10Y2.5/黄褐色土との混合土 炭化物(φ1~2mm)散在。
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 褐色砂-12 (φ1~20mm)少量, 炭化物(φ1~2mm)散在。
 第3層 10YR2/6 黄褐色土と黄褐色砂-12 (φ1~10mm)散在。
 第4層 10YR2/6 明黄褐色土と10Y2.5/黄褐色土との混合土 黒褐色土少量, 炭化物(φ1~2mm)散在。
 第5層 10YR2/4 に近い黄褐色土と黄褐色土塊(φ<5mm)散在。
 第6層 10YR2/6 明黄褐色土, 炭化物(φ<1mm), 黄褐色砂-12 (φ1~2mm)散在。
 第7層 10YR2/3 浅黄褐色砂, 炭化物(φ<1mm)散在。

第143号土坑

- 第1層 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色砂-17.9? (φ<30mm), に近い黄褐色土中量, に近い黄褐色砂-17.9? (φ<20mm)少量。
 第2層 10YR2/4 に近い黄褐色土 黄褐色砂-17.9? (φ<10mm)少量。
 第3層 10YR2/4 に近い黄褐色土 黒褐色土少量。
 第4層 10YR2/4 に近い黄褐色土 黄褐色砂-17.9? (φ<30mm)中量, 黒色土少量。
 第146号土坑

- 第1層 10YR2/4 暗褐色土 赤褐色土粒(φ2~70mm)少量, 灰白色浮石粒(φ2~10mm)散在。
 第2層 10YR2/4 暗褐色土と5YR2.5/赤褐色土との混合土 褐色粘土(φ10~20mm)少量, 灰白色浮石粒(φ2~5mm), 黒色土散在。
 第3層 10YR2/6 褐色土と10Y2.5/黄褐色土との混合土 赤褐色土粒(φ2~3mm), 炭化物(φ10~30mm)散在。
 第4層 10YR2/4 暗褐色土と10Y2.5/黒褐色土との混合土 赤褐色土塊(φ10~30mm)少量, 赤褐色土塊(φ1~5mm), 炭化物(φ10~20mm)散在。
 第5層 10YR2/4 褐色土と10Y2.5/黄褐色土との混合土 灰白色浮石粒(φ2~3mm), 赤褐色土粒(φ1~10mm)散在。
 第147号土坑

- 第1層 7.5YR2/8 明褐色土
 第147号土坑
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 黄褐色砂-12 (φ1~20mm), 灰白色浮石(φ1~2mm), 炭化物(φ1~2mm)散在。
 第2層 10YR2/4 暗褐色土と10Y2.5/褐色土との混合土 黄褐色砂-12 (φ1~20mm)少量, 黄褐色砂-12 (φ1~20mm), 炭化物(φ1~2mm)散在, 小礫層入。
 第3層 10YR2/6 明黄褐色土と黄褐色砂-12 (φ1~20mm)少量, 炭化物(φ1~2mm)散在。
 第4層 10YR2/2 暗褐色土と10Y2.5/明黄褐色土との混合土 灰白色砂-12 (φ1~2mm), 炭化物(φ1~2mm)散在。
 第5層 10YR2/2 黒褐色土と10Y2.5/黄褐色土との混合土 灰白色砂-12 (φ1~2mm), 炭化物(φ<1mm)散在。
 第6層 10YR2/8 明黄褐色土と灰白色砂-12 (φ1~2mm), 炭化物(φ<1mm)散在。
 第148号土坑

- 第1層 10YR2/4 暗褐色土と10Y2.5/黄褐色土との混合土 灰白色砂-12 (φ1~10mm), 炭化物(φ1~2mm)散在。

図72 時期不明の土坑(4)

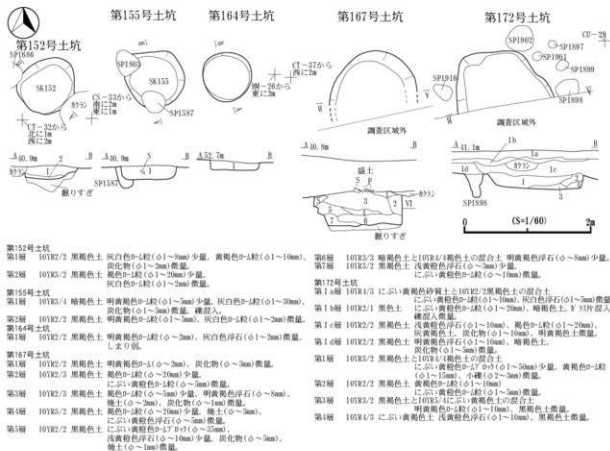


図73 時期不明の土坑(5)

堆積土が黒色土及び黒褐色土を主体とする一群は、自然堆積のものが多いと考えられる。これらはA区に多く分布するが、一部B・D区にも分布する。

堆積土が混合土の状態を呈する一群は、そのほとんどが人為堆積と考えられる。これらはB区を除き調査区全域に分布する。この内A区で列状に分布する第42~44・56~58号土坑は、ビニール片が出土した現代の土坑と分布、堆積土ともに類似することから、現代のもの可能性がある。

堆積土中に八戸火山灰起源と考えられる白色浮石をブロック状に含む一群も人為堆積の可能性が高い。これらは大規模な削平を受けているC・D区に分布する。C・D区の遺構検出面は、ほとんどが八戸火山灰層である。本遺構群はこれを掘り込んで構築されていることから、堆積土はその掘り上げ土などが再流入したものと考えられる。また、これらが構築された年代は、掘立柱建物跡及び削平との関係から中世以降である可能性が高い。

遺物は、第32・99・109・136・164号土坑から縄文土器片が出土した。また、第147号土坑から有孔石製品(図39-5)が、第152号土坑から土製紡錘車(図39-4)がそれぞれ出土した。ただし、これらは遺構に明確に伴うものではない。

本遺構群の用途については不明であるが、D区で検出された第124号土坑は、底面ほぼ中央から3基の小ピットが検出されており、縄文時代の落とし穴の可能性もある。

冒頭でも述べたように、本遺構群には明確に伴う遺物が出土しなかったため、詳細な時期は不明である。ここでは堆積土の状況及び分布範囲から、縄文時代、中・近世、現代の各時期にわたる可能性を指摘するに留める。

(葛城)

第3節 溝跡

時期不明の溝跡は20条検出された。本遺跡の溝跡は、明確に共存する遺物が出土しないうえ、他遺構との重複が少ない。また後世の削平を受け、検出層位の特定が困難な溝跡も多いことから、時期不明と分類したが、中には近代以降のものも含まれる。以下、各溝跡について述べる。

第1号溝跡（図74）

〔位置〕A区中央BJ-30～BK-30グリッドに位置する。〔重複〕沢2と重複するが、新旧関係は不明である。〔平面形・規模〕削平を受け、全容は不明だが確認長は長さ340×幅108cmの直線状を呈し、深さ79cmである。〔堆積土〕6層に分層される。黒褐色土を主体とする。層中に白色浮石及びロームを含み、人為堆積の様相を呈する。〔壁・底面〕残存断面はU字形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ちあがる。底面は丸底状である。〔出土遺物〕堆積土中から縄文土器が出土した。

第2号溝跡（図74）

〔位置〕A区南西端AW-12～13グリッドに位置する。〔平面形・規模〕遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ538×幅73cmの直線状を呈し、深さ35cmである。〔堆積土〕2層に分層される。黒色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。全層に中振浮石が混入する。〔壁・底面〕断面は緩やかな丸底状である。

第3号溝跡（図74）

〔位置〕A区東部BT-22～23グリッドに位置する。〔平面形・規模〕遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ472×幅41cmの直線状を呈し、深さ76cmである。〔堆積土〕2層に分層される。黒色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。〔壁・底面〕断面形は逆台形状で、底面はほぼ平坦である。〔出土遺物〕堆積土中から縄文土器・礫石器が出土した。

第4号溝跡（図74）

〔位置〕A区北部BJ-34～BK-35グリッドに位置する。〔平面形・規模〕遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ739×幅136cmの直線状を呈し、深さ16cmである。〔堆積土〕2層と6層に分層される。検出面上層は削平を受けている。黒褐色土を主体とし、自然堆積の様相を呈する。全層に中振浮石が混入する。〔壁・底面〕削平を受け、全容は不明だが、残存断面は緩やかな丸底状である。壁面には小段差がみられる。〔出土遺物〕堆積土中から縄文土器・土師器が出土した。

第5号溝跡（図74）

〔位置〕A区北西BE-35～37グリッドに位置する。〔平面形・規模〕遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ712×幅95cmの直線状を呈し、深さ88cmである。〔重複〕第1号溝状土坑と重複し、本遺構のほうが新しい。〔堆積土〕3層と4層に分層される。黒色土を主体とし、自然堆積の様相を呈する。〔壁・底面〕断面は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。〔出土遺物〕堆積土中から縄文土器・石鏃（図28-5）が出土した。

第6号溝跡（図75）

〔位置〕A区中央BE-26～BF-29グリッドに位置する。〔平面形・規模〕後世の攪乱によって、全容は不明だが確認長は長さ15.49×幅1.27mの直線状を呈し、深さ97cmである。〔堆積土〕3層に分層される。黒色土を主体とし、自然堆積の様相を呈する。全層に南部浮石が混入する。〔壁・底面〕斜面上方にあたる

西壁は大きく外傾して立ち上がる。底面は丸底状である。[出土遺物] 堆積土中から縄文土器（図27-7）・礫石器・寛永通宝（図66-8）・大正銭が出土した。[小結] 出土遺物から近・現代のものと考えられる。

第7号溝跡（図75）

[位置] A区東部BS-26～28グリッドに位置する。[平面形・規模] 削平を受け、全容は不明だが確認長は長さ610×幅57cmの直線状を呈し、深さ29cmである。[堆積土] 3層に分層される。黒褐色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。1・2層に炭化物・焼土粒が混入する。[壁・底面] 残存断面は箱形を呈し、底面はほぼ平坦である。

第8号溝跡（図76）

[位置] A区北東BS-35～BQ-36グリッドに位置する。[平面形・規模] 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ789×幅172cmの弧状を呈し、深さ112cmである。[重複] 第10号溝跡と重複し、本遺構が新しい。[堆積土] 5層と3層に分層される。黒色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。1～4層にはT₀-bが混入する。[壁・底面] 壁面は緩やかに外傾しながら立ち上がる。底面は平坦面と丸底面が共存する。[出土遺物] 堆積土中から縄文土器（図25-20・27-5）・土師器・石筥（図28-31）・礫石器が出土した。

第9号溝跡（図75）

[位置] A区北東BQ-32～33グリッドに位置する。[平面形・規模] 削平を受け、全容は不明だが、確認長は長さ692×幅84cmの直線状を呈し、深さ36cmである。[堆積土] 2層に分層され、人為堆積の様相を呈する。[壁・断面] 断面は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。[出土遺物] 堆積土中から縄文土器（図25-12）が出土した。

第10号溝跡（図76）

[位置] A区北東BS-32～BR-33グリッドに位置する。[平面形・規模] 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ726×幅64cmの直線状を呈し、深さ13cmである。[重複] 第8号溝跡と重複し、本遺構が古い。[堆積土] 堆積土は単層で、暗褐色土と黒褐色土の混合土を主体とする。中振浮石が混入する。[出土遺物] 堆積土中から縄文土器・礫石器が出土した。

第11号溝跡（図76）

[位置] A区北東BR-32～33グリッドに位置する。[平面形・規模] 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ412×幅60cmの直線状を呈し、深さ15cmである。[堆積土] 堆積土は単層で、暗褐色土を主体とする。中振浮石が混入する。[壁・断面] 断面は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。

第12号溝跡（図75）

[位置] A区北東BR-32・33グリッドに位置する。[平面形・規模] 削平を受け、全容は不明だが確認長は長さ467×幅43cmの直線状を呈し、深さ96cmである。

第13号溝跡（図75）

[位置] B区西部CC-27～28グリッドに位置する。[平面形・規模] 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ563×幅99cmの直線状を呈し、深さ55cmである。[堆積土] 8層に分層される。黒褐色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。盛土層および1～5層にはガラス片・ビニール片が混入する。[壁・断面] 断面は左右非対称な逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦である。[小結] 出土

遺物から現代のものと考えられる。

第14号溝跡 (図76)

[位置] B区西部C C-25~27グリッドに位置する。[平面形・規模] 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ13.76×幅0.54mの直線状を呈し、深さ43cmである。[堆積土] 4層に分層される。黒褐色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。1・2・4層には炭化物粒が混入する。[出土遺物] 堆積土中から縄文土器が出土した。[小結] 第1層を掘り込んで形成されており、近代以降の成立と考えられる。

第15号溝跡 (図76)

[位置] B区東南隅C K-26~C L-27グリッドに位置する。[平面形・規模] 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ449×幅85cmの弧状を呈し、深さ69cmである。[堆積土] 6層に分層される。黒色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。1層には焼土粒・炭化物粒が混入する。[壁・底面] 削平を受け全容は不明であるが、残存壁面は中層から上層にかけて大きく外傾し立ち上がる。底面はほぼ平坦である。[出土遺物] 堆積土中から縄文土器・土師器が出土した。[小結] 第1層を掘り込み形成されており、近代以降の成立と考えられる。

第17号溝跡 (図76)

[位置] B区東部C K-29グリッドに位置する。[平面形・規模] 削平を受け、全容は不明だが確認長は長さ358×幅45cmの直線状を呈し、深さ11cmである。[堆積土] 堆積土は単層で、黒色土と暗褐色土の混合土を主体とする。[壁・底面] 残存断面は箱形を呈し、底面はほぼ平坦である。

第18号溝跡 (図76)

[位置] B区東部C H-28~C L-28グリッドに位置する。[平面形・規模] 削平を受け、全容は不明だが確認長は長さ12.84×幅1.52mの直線状を呈し、深さ95cmである。

第19号溝跡 (図77)

[位置] B区中央C H-28~C G-34グリッドに位置する。[平面形・規模] 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ12.26×幅0.51mの直線状を呈し、深さ45cmである。[重複] 第20号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。

第20号溝跡 (図77)

[位置] B区中央C H-28~C G-34グリッドに位置する。[平面形・規模] 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ90.4×幅100cmの直線状を呈し、深さ16cmである。[重複] 第19号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。

第21号溝跡 (図77)

[位置] C区南西隅C O-27グリッドに位置する。[平面形・規模] 遺構が調査区外へ延びるため全体形は不明だが、確認長は長さ157×幅117cm、深さ75cmを計測する。[堆積土] 5層に分層される。黒色土を主体とし、人為堆積の様相を呈する。全層に灰白色浮石が混入する。[壁・底面] 残存断面は丸底状を呈し、壁面に小段差がみられる。[出土遺物] 縄文土器・獣歯が出土した。 (中村)

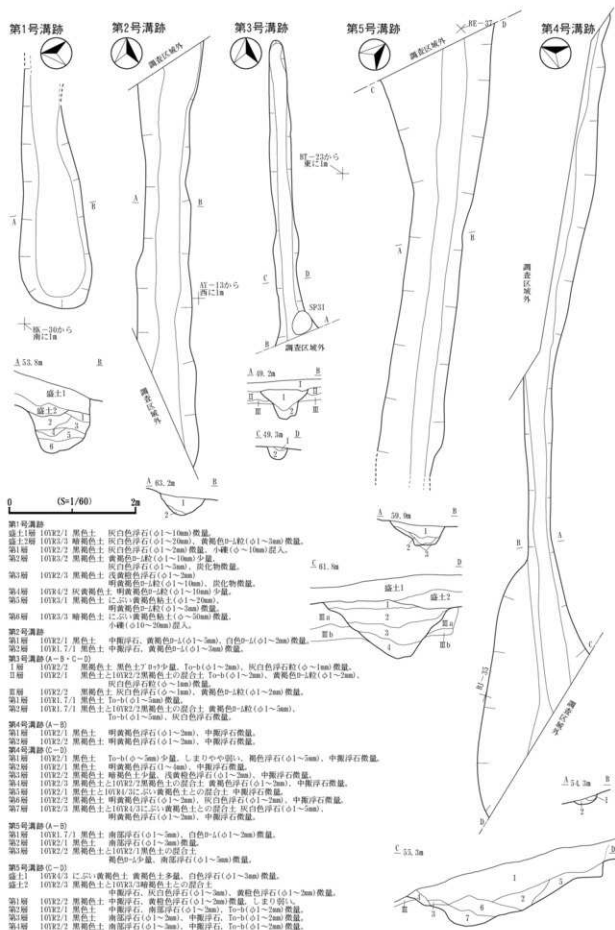
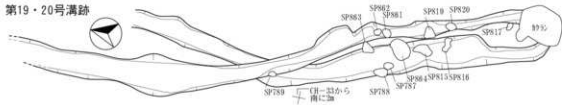


図74 時期不明の溝跡(1)

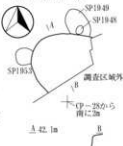
第19・20号溝跡



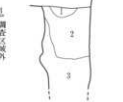
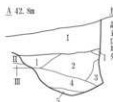
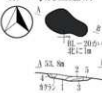
第21号溝跡



第11号井戸跡



第17号焼土遺構



- 第21号溝跡
 第1層 10YR1.7/1 黒色土 灰白色D-砂(φ<2mm)、灰白色礫粒(φ1~2mm)散在。
 第2層 10YR1.7/1 黒色土 灰白色D-砂(φ<2mm)、灰白色浮石(φ1~2mm)散在。
 第3層 10YR1.7/1 黒色土 灰白色D-塊(φ<15mm)、灰白色浮石粒(φ<2mm)散在。
 第4層 10YR1.7/1 黒色土 灰白色D-砂(φ<2mm)、灰白色浮石粒(φ1~2mm)散在。
 第5層 10YR2/1 黒色土 灰白色D-砂(φ<2mm)、灰白色浮石粒(φ1~2mm)散在。
- 第11号井戸跡
 第1層 10YR2/1 黒色土 黒褐色浮石(φ<3mm)、灰白色浮石(φ<1mm)、暗褐色D-砂(φ<2mm)散在。しまりあり。
 第2層 10YR1.7/1 黒色土 灰白色浮石(φ<1mm)、暗褐色D-砂(φ<2mm)、暗褐色D-塊(φ<2mm)、暗褐色D-粒(φ<2mm)散在。層片、しまりあり。
 第3層 10YR1.7/1 黒色土 暗褐色土、D-砂(φ<2mm)散在。暗褐色土、D-砂(φ<2mm)、灰白色浮石(φ<1mm)散在。層片あり。
- 第17号焼土遺構
 第1層 10YR2/2 黒褐色土 炭化物(φ1~5mm)、炭褐色土(φ1~2mm)散在。
 第2層 10YR2/3 暗褐色土と7.5YR/4暗褐色土の混合土 炭化物(φ1~5mm)散在。焼土層。
 第3層 10YR2/2 黒褐色土 中層浮石、褐色土(φ1~3mm)散在。
 第4層 10YR2/2 暗褐色土 炭化物(φ1~2mm)散在。
 第5層 10YR2/2 暗褐色土 炭化物(φ1~2mm)散在。

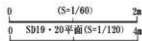


図77 時期不明の溝跡(4)・井戸跡・焼土遺構

第4節 井戸跡(図77)

井戸跡は11基検出され、すべてB区中央より東側の平坦部で確認された。堆積土中から明らかに近・現代と判断できる板ガラス片や陶磁器が出土したものについては、欠番として扱い、掲載しない。時期不明の井戸跡は3基であった。以下それらについて概要を述べる。

検出された位置は、B区中央付近CH-32・CG-30グリッドから各1基、C区南西側CO-27グリッドから1基である。第1・4号井戸跡は第X層上面から、第11号井戸跡は第V層からそれぞれ円形の落ち込みとして確認された。計測値については表掲の一覧を参照されたい。

出土遺物は、第1号井戸跡から小久慈焼の小皿が1点(図48-11)、第4号井戸跡から近世の土瓶蓋が1点出土した(図48-12)。図48-12の産地断定は困難だが大塚相馬焼の可能性がある。第1・4号井戸跡は、その出土遺物を近世の遺構内出土遺物として掲載したが(第6章図48参照)、調査の段階で堆積土などから現代までの年代幅があると考えられたため、ここでは時期不明の井戸跡とした。堆積土は黒色土を主体としていると考えられるが(第11号井戸跡)、湧水や壁面崩落の危険から完掘を断念し、第1・4号井戸跡については土層の分層・注記も行わなかった。出土遺物・堆積土から考えて少なくとも19世紀以降のものと考えられるが、詳細な年代については不明である。(澤田)

第5節 焼土遺構

第17号焼土遺構(図77)

[位置・確認] 調査区西側BL-20グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に褐色焼土の不整形の広がりと確認した。

[平面形・規模] 長軸69cm、短軸37cmの不整形円形を呈する。

[堆積土] 5層に分層した。1~3層には焼土粒が含まれる。

[出土遺物] 遺物は出土しなかった。

[小結] 第Ⅲ層で検出したため縄文時代のものである可能性が高いが、詳細な年代は不明である。

(葛城)

第8章 理化学的分析

第1節 中居林遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

中居林遺跡は、青森県八戸市大字中居林字中居林地内（北緯40°29'17"、東経141°29'50"）に所在する。測定対象試料は、3号木組遺構の杭（08NBN o.1:IAAA-81508）、第16号溝跡に伴う杭列を構成する杭（08NBN o.2:IAAA-81509）、第11号竪穴住居跡出土炭化物（08NBN o.3:IAAA-90489）、第12号竪穴住居跡出土炭化物（08NBN o.4:IAAA-90490）、3号木組出土木製品（08NBN o.5:IAAA-90491）、1号木組遺構から採取された木片（08NBN o.6:IAAA-90492）合計6点である。

2 測定の意義

各遺構の年代を推定すると同時に、3号木組遺構と隣接する第16号溝跡の年代を明らかにし、両者の年代比較を行う。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA: Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAAAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxII）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polash 1977）。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age: yr BP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0yr BP）として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。¹⁴C年代

と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差(‰)で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に(AMS)と注記する。
- (4) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma=68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma=95.4\%$)で表される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、Int Cal04データベース(Reimer et al 2004)を用い、OxCalv4.0較正プログラム(Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001)を使用した。

6 測定結果

^{14}C 年代は、08NBN α .1が $4300 \pm 30\text{yr BP}$ 、08NBN α .2が $330 \pm 30\text{yr BP}$ 、08NBN α .3が $2810 \pm 30\text{yr BP}$ 、08NBN α .4が $1170 \pm 20\text{yr BP}$ 、08NBN α .5が $4260 \pm 30\text{yr BP}$ 、08NBN α .6が $170 \pm 20\text{yr BP}$ である。08NBN α .2については、樹皮が残り、その内側の最外年輪を採取したことから、伐採年代を示すと考えられる。試料の炭素含有率は60%程であり、十分な値であった。化学処理および測定内容にも問題が無く、妥当な年代と判断される。

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態	処理 方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-81508	08NBN α .1	遺構:3号木組 層位:底面	木片	AAA	-28.76 \pm 0.35	4,300 \pm 30	58.58 \pm 0.23
IAAA-81509	08NBN α .2	遺構:SD16 層位:底面	木片	AAA	-27.23 \pm 0.40	330 \pm 30	95.99 \pm 0.32
IAAA-90489	08NBN α .3	遺構:SI11 層位:床面直上	炭化物	AAA	-25.44 \pm 0.22	2,810 \pm 30	70.48 \pm 0.24
IAAA-90490	08NBN α .4	遺構:SI12 層位:3層	炭化物	AAA	-31.52 \pm 0.27	1,170 \pm 20	86.47 \pm 0.25
IAAA-90491	08NBN α .5	遺構:3号木組 層位:底面	木片	AAA	-28.48 \pm 0.17	4,260 \pm 30	58.85 \pm 0.22
IAAA-90492	08NBN α .6	遺構:1号木組 層位:底面直上	木片	AAA	-28.87 \pm 0.26	170 \pm 20	97.90 \pm 0.30

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用(yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-81508	4,360 \pm 30	58.13 \pm 0.23	4,296 \pm 31	2918BC - 2890BC (68.2%)	3011BC - 2977BC (8.5%) 2972BC - 2966BC (0.9%) 2959BC - 2949BC (1.4%) 2943BC - 2878BC (84.6%)
IAAA-81509	370 \pm 30	95.55 \pm 0.31	328 \pm 26	1512AD - 1531AD (12.0%) 1537AD - 1601AD (43.4%) 1616AD - 1635AD (12.8%)	1481AD - 1643AD (95.4%)

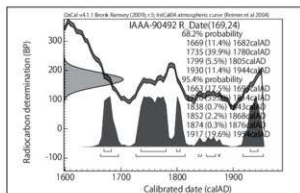
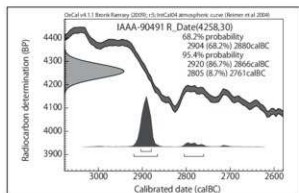
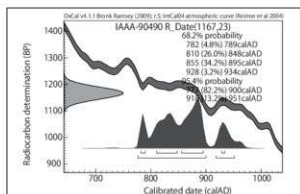
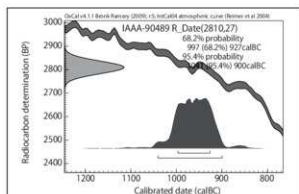
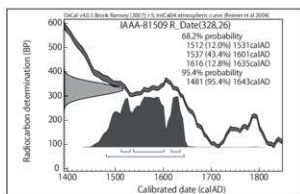
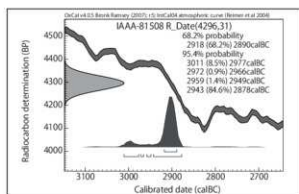
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年校正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-90489	2,820 ± 30	70.41 ± 0.24	2,810 ± 27	997BC - 927BC (68.2%)	1041BC - 900BC (95.4%)
IAAA-90490	1,280 ± 20	85.32 ± 0.25	1,167 ± 23	782AD - 789AD (4.8%) 810AD - 848AD (26.0%) 855AD - 895AD (34.2%) 928AD - 934AD (3.2%)	777AD - 900AD (82.2%) 918AD - 951AD (13.2%)
IAAA-90491	4,320 ± 30	58.43 ± 0.22	4,258 ± 30	2904BC - 2880BC (68.2%)	2920BC - 2866BC (86.7%) 2805BC - 2761BC (8.7%)
IAAA-90492	230 ± 20	97.12 ± 0.29	169 ± 24	1669AD - 1682AD (11.4%) 1735AD - 1780AD (39.9%) 1799AD - 1805AD (5.5%) 1930AD - 1944AD (11.4%)	1663AD - 1695AD (17.5%) 1726AD - 1814AD (55.0%) 1838AD - 1843AD (0.7%) 1852AD - 1868AD (2.2%) 1874AD - 1876AD (0.3%) 1917AD - 1954AD (19.6%)

[参考値]

試料名	測定機関番号	前処理方法	試料状態	処理前試料量(mg)	回収炭素量(mg)	燃焼量(mg)	精製炭素量(mg)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) [加減算]	Libby Age (yrBP)	(yrBP-丸め込みなし)	暦年校正1 σ (yrcaBP)	暦年校正2 σ (yrcaBP)
08NINc1	IAAA-81508	AAA	数珠	124.19	45.73	5.50	3.32	-28.76 ± 0.35	4,300 ± 30	4,296 ± 31	2918BC - 2898BC (68.2%)	3011BC - 2978BC (8.3%) 2972BC - 2868BC (0.9%) 2959BC - 2849BC (1.4%) 2943BC - 2878BC (64.6%)
08NINc2	IAAA-81509	AAA	数珠	32.19	20.02	5.45	3.36	-27.23 ± 0.4	330 ± 30	328 ± 28	1512AD - 1531AD (12.0%) 1517AD - 1601AD (42.4%) 1616AD - 1625AD (12.2%)	1481AD - 1643AD (95.4%)
08NINc3	IAAA-90489	AAA	数珠	31.66	23.28	4.58	3.32	-25.44 ± 0.22	2,810 ± 30	2,810 ± 27	997BC - 927BC (68.2%)	1041BC - 900BC (95.4%)
08NINc4	IAAA-90490	AAA	数珠	33.56	26.46	4.73	3.38	-31.52 ± 0.27	1,170 ± 20	1,167 ± 23	782AD - 789AD (4.8%) 810AD - 848AD (26.0%) 855AD - 895AD (34.2%) 928AD - 934AD (3.2%)	777AD - 900AD (82.2%) 918AD - 951AD (13.2%)
08NINc5	IAAA-90491	AAA	数珠	38.83	18.97	5.42	3.33	-28.48 ± 0.17	4,260 ± 30	4,258 ± 30	2904BC - 2880BC (68.2%)	2920BC - 2866BC (86.7%) 2805BC - 2761BC (8.7%)
08NINc6	IAAA-90492	AAA	数珠	26.70	14.83	5.66	3.37	-28.87 ± 0.26	170 ± 20	169 ± 24	1669AD - 1682AD (11.4%) 1735AD - 1780AD (39.9%) 1799AD - 1805AD (5.5%) 1930AD - 1944AD (11.4%)	1663AD - 1695AD (17.5%) 1726AD - 1814AD (55.0%) 1838AD - 1843AD (0.7%) 1852AD - 1868AD (2.2%) 1874AD - 1876AD (0.3%) 1917AD - 1954AD (19.6%)

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the Ox Cal Program, *Radiocarbon* 37 (2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43 (2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43 (2A), 3810-389
- Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal 04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



第2節 中居林遺跡出土の植物種子

札幌国際大学博物館 客員研究員 梶坂 恭代

1. 遺跡の所在と性格

遺跡の名称 : 中居林遺跡 (青森県遺跡番号203281)

遺跡の所在地 : 八戸市大字中居林中居林36-15外

発掘調査期間 : 平成20年4月23日~同年10月28日

調査面積 : 9,400㎡

調査の担当機関 : 青森県埋蔵文化財調査センター

発掘担当者 : 葛城和穂、澤田恭平

遺跡の地形と立地: 中居林遺跡は新井田川と松館川の合流点から西方に約2km離れた新井田川左岸の段丘崖上に立地し、標高は約40~65mである。

出土遺構と出土遺物の詳細については本文を参照されたい。

2. 扱った資料

分析資料として扱った炭化植物は、弥生時代の竪穴住居跡(SI3)の床面に50cmメッシュのグリッドを設定し、それらのグリッドから土壌を採取してフローテーション法で処理を行った。その後、第1次選別で炭化植物種子などを抽出し送付されてきたものである。これらの資料を実体顕微鏡で観察し撮影を行なった。検出された植物種子の出土表は表1に示しておく。

3. 竪穴住居跡(SI3)から検出された植物種子

イネ *Oryza sativa* L. (図版1-1: SI3-D6から出土)

床面のD6から1粒出土。果実は長楕円形で腹面の下部に胚があり、側面にやや隆起した縦の後縁がある。このような特徴からイネと判断される。計測値はL4.80×W2.70×T1.75 (mm)

アカザ属 *Chenopodium* L. (図版1-2: SI3-E1から出土)

床面 D7, E1から酸化した状態で出土。種子は扁平球形。側面には嚢状に突出したヘソがある (写真資料の左側)。このような特徴からアカザと判断される。これまで扱った各時期の遺跡から検出されたアカザ属種子には、炭化されないで検出される場合が非常に多い。このような状況は、アカザ属の種子構造上発達するクチクラ層の関係で残存することが考えられる。また、サンプリング時などに起こる混入の可能性もあったと考えられる。計測値はL1.30×W1.25×T0.65(mm)

エノキグサ属 *Acalypha* Linn. (図版1-3: SI3-E1から出土)

床面 D0, D1, D2, E2, F5, 6以外のグリッドから酸化した状態で出土。種子は卵形。頂端円形で下端が尖る。このような特徴からエノキグサ *Acalypha australis* L. と判断される。計測値はL1.65×W1.15(mm)

タデ科 POLYGONACEAE (図版1-4: S13-E1から出土)

床面 D7, E1, F5, 6から酸化した状態で出土。瘦果は扁平広卵形で先が尖る。黒褐色で全面に縞み模様がある。このような特徴からタニソバ *Polygonum nepalensis* と判断される。計測値はL2.10×WL.60×T0.85(mm)

ミズキ属 *Cornus* L. (図版1-5: S13-E6から出土)

床面 E6から出土。核は偏球形で浅い縦溝があり先に穴がある。出土種子は破片の一部であったが、核表面に縦溝が観察され、この特徴からミズキ *Cornus controversa* Hemsley と判断される。計測値は破片のため計測はしていない。

その他に資料のダメージが大きく分類できなかったものを不明として扱った。

4. 若干のコメント

中居林遺跡から得られた資料は、栽培植物のイネ1粒のほかにアカザ属、エノキグサ属、タデ科、ミズキ属が出土。その中でイネとミズキ属以外の種子はすべて酸化した状態で出土している。

今回、出土種子は極端に少なかった。通常であれば、堅果類の碎片などが散見されるがそれも確認できなかった。サンプリングを行った住居跡は焼失家屋でその床面の炭化遺物の採取を行っている。通常、床直あるいは床面は、堅穴住居新築時の層準を示す場合が多い。ある程度、時間が経過した後の炭化遺物の多く含まれる生活面が的確に捉えられていない場合は、炭化植物遺体の抽出が極端に少ない。焼失家屋の場合、通常の堅穴住居跡と異なった炭化遺物の堆積を示すので、サンプリングの際にはその詳細な観察が必要であろう。

ここで、酸化状態で出土する種子について触れてみたい。これまでに各時期の遺跡から炭化せず酸化(胚乳は分解されて種皮だけが残って出土する状態)を示すものが多数出土している。後世の混入である可能性を考慮して札幌市埋蔵文化財センターが同層準から出土した酸化状態のタラノキ属の年代測定を行ったことがある(吉崎・椿坂 1998)。得られた測定値は、炭化種子の測定結果とほぼ同一であった。したがって、種子の性質によって炭化の過程を得ないで残存するものもあることが確認されている。また、これまでのデータからは各時期の遺跡から出土する栽培植物は炭化を示すが、野生植物の草本類、木本類は酸化状態を示すものが多い。こうした現象は当該植物の利用方法の差に関係するのではないかと考えている。

引用文献

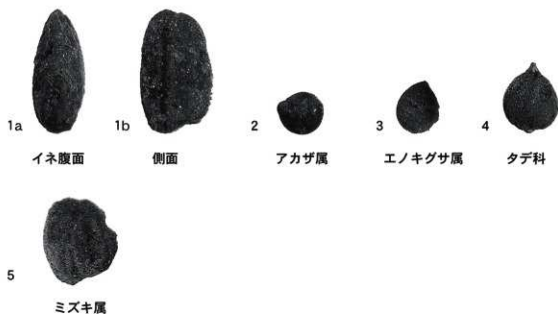
吉崎昌一・椿坂恭代

1998:「札幌市N30遺跡から出土した植物遺体」『N30遺跡』164-171, 225-22 札幌市文化財調査報告書58 札幌市教育委員会

表1 八戸市 中居林遺跡植物種子出土表

資料NO	遺構名	グリッド	層位	遺構の時期	イネ (粒)	アカザ属 (粒)	エノキグサ属 (粒)	タデ科 (粒)	ミズキ属 (片)	不明 (片)
5	S13	D0	床直	弥生時代中期						5
6	S13	D1	床直	"						2
8	S13	D2	床直	"						
18	S13	D5	床直	"			2			
21	S13	D6	床直	"	1		6			1
23	S13	D7	床直	"		1	4	1		1
25	S13	E1	床直	"		1	6	1		2
28	S13	E2	床直	"						4
31	S13	E4	床直	"			4			3
33	S13	E5	床直	"			1			
36	S13	E6	床直	"			2		1	
40	S13	E7	床直	"			1			1
42	S13	F1	床直	"			2			
43	S13	F2	床直	"			1			
47	S13	F4	床直	"			5			
49	S13	F5	床直	"				1		
52	S13	F6	床直	"				3		1
54	S13	F7	床直	"			2			
58	S13	G4	床直	"			6			2
60	S13	G5	床直	"			1			1
63	S13	G6	床直	"			6			

■ 酸化した状態の種子



図版 1

第3節 中居林遺跡出土木製品の樹種調査結果

(株) 吉田生物研究所

1. 試料

試料は青森県中居林遺跡から出土した工具1点、服飾具6点、食器具1点、容器21点、土木具9点、祭祀具1点、用途不明品7点の合計46点である。

2. 観察方法

剃刀で木口(横断面)、柾目(放射断面)、板目(接線断面)の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果(針葉樹2種、広葉樹8種)の表と樹種ごとの顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マツ科マツ属[二葉松類] (*Pinus* sp.)

(遺物N o. 18, 20, 23, 24, 32, 42)

(写真N o. 24)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で1~15細胞高のもの、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属[二葉松類]はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

2) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujaopsis* sp.)

(遺物N o. 1, 5, 12, 22, 25, 26, 28, 29, 31, 43, 44)

(写真N o. 28)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

3) ブナ科ブナ属 (*Fagus* sp.)

(遺物N o. 3, 4, 6, 7, 11, 13, 14, 16, 17, 19)

(写真N o. 6)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(~110 μ m)がほぼ平等に散在する。年輪の内側か

ら外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2～3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物(チロース)が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2～3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1～3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道(南部)、本州、四国、九州に分布する。

4) ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (Sect. *Prinus* Loudon syn. *Diversipilosae*, *Dentatae*)

(遺物N o. 27)

(写真N o. 27)

環孔材である。木口では大道管(～380 μ m)が年輪界にそって1～3列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小道管が単独あるいは2～3個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

5) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

(遺物N o. 8, 10, 15, 21B, 33～41, 45, 46)

(写真N o. 33)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管(～500 μ m)が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり(ストランド)、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道(西南部)、本州、四国、九州に分布する。

6) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)

(遺物N o. 9)

(写真N o. 9)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管(～270 μ m)が1列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している(イニシアル柔細胞)。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組

織は少数の1～3列のものと大部分を占める6～7細胞列のほぼ大きさの様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

7) モクレン科モクレン属 (*Magnolia* sp.)

(遺物N o. 21A)

(写真N o. 21A)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～110 μ m)が単独ないし2～4個複合して多数分布する。軸方向柔組織は1～2層の幅で年輪界に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～700 μ mとなっている。モクレン属はホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

8) マンサク科イスノキ属イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.)

(遺物N o. 2)

(写真N o. 2)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～50 μ m)がおおむね単独で、大きさ数とも年輪全体を通じて変化なく平等に分布する。軸方向柔細胞は黒く接線方向に並び、ほぼ一定の間隔で規則的に配列している。放射組織は1～2列のものが多数走っているのが見られる。柾目では道管は階段穿孔と内部に充填物(チロース)がある。軸方向には黒いすじの柔細胞ストランドが多数走っており、一部は提灯状の細胞になっている。放射組織は平伏と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～2細胞列、高さ～1mmで多数分布している。イスノキは本州(関東以西)、四国、九州、琉球に分布する。

9) カエデ科カエデ属 (*Acer* sp.)

(遺物N o. 30B)

(写真N o. 30B)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～100 μ m)が単独ないし数個複合して分布する。軸方向柔細胞は年輪界で顕著である。木繊維の壁に厚薄があり木口面で濃淡模様が出る。柾目では道管は単穿孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1～6細胞列、高さ～1mmからなる。カエデ属はウリカエデ、イタヤカエデ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

10) ミズキ科ミズキ属 (*Cornus* sp.)

(遺物N o. 30A)

(写真N o. 30A)

散孔材である。木口では中庸の道管(～130 μ m)が単独あるいは2～4個放射方向に複合して

分布する。道管の大きさは年輪中央部で大きくなる傾向がある。年輪界は波状である。柾目では道管は階段穿孔と側壁に多数の壁孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。板目では放射組織は1～4細胞列、高さ～1mmである。ミズキ属はミズキ、ヤマボウシ等があり北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

- 島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)
 島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社(1982)
 伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」京都大学木質科学研究所(1999)
 北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」保育社(1979)
 深澤和三「樹体の解剖」海青社(1997)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)
 奈良国立文化財研究所「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆ Nikon DS-F11

青森県中居林道跡出土木製品同定表

No.	番号	品名	樹種
1	1	曲物	ヒノキ科アスナロ属
2	2	櫛	マンサク科イスノキ属イスノキ
3	3	椀	ブナ科ブナ属
4	4	椀	ブナ科ブナ属
5	5	曲物	ヒノキ科アスナロ属
6	6	椀	ブナ科ブナ属
7	7	椀	ブナ科ブナ属
8	8	下駄	ブナ科クリ属クリ
9	9	下駄	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
10	10	丸木材	ブナ科クリ属クリ
11	11	椀	ブナ科ブナ属
12	12	底板	ヒノキ科アスナロ属
13	13	椀	ブナ科ブナ属
14	14	椀	ブナ科ブナ属
15	15	下駄歯	ブナ科クリ属クリ
16	17	椀	ブナ科ブナ属
17	18	曲物	ブナ科ブナ属
18	19	不明	マツ科マツ属〔二葉松類〕
19	20	椀	ブナ科ブナ属
20	21	下駄	マツ科マツ属〔二葉松類〕
21	23	A 下駄(台) B # (歯)	モクレン科モクレン属 ブナ科クリ属クリ
22	24	底板	ヒノキ科アスナロ属
23	25	不明	マツ科マツ属〔二葉松類〕

No.	番号	品名	樹種
24	26	不明	マツ科マツ属〔二葉松類〕
25	27	不明	ヒノキ科アスナロ属
26	28	曲物	ヒノキ科アスナロ属
27	29	刀形	ブナ科コナラ属コナラ亜属 コナラ節
28	30	把手	ヒノキ科アスナロ属
29	31	曲物	ヒノキ科アスナロ属
30	40	A 木槌(俣) B # (柄)	ミズキ科ミズキ属 カエデ科カエデ属
31	41	不明	ヒノキ科アスナロ属
32	52	杭	マツ科マツ属〔二葉松類〕
33	53	不明	ブナ科クリ属クリ
34	54	不明	ブナ科クリ属クリ
35	59	杭	ブナ科クリ属クリ
36	60	杭	ブナ科クリ属クリ
37	61	杭	ブナ科クリ属クリ
38	62	杭	ブナ科クリ属クリ
39	63	丸木材	ブナ科クリ属クリ
40	64	杭	ブナ科クリ属クリ
41	68	容器	ブナ科クリ属クリ
42	69	杭	マツ科マツ属〔二葉松類〕
43	70	曲物	ヒノキ科アスナロ属
44	71	箸	ヒノキ科アスナロ属
45	101	容器	ブナ科クリ属クリ
46	100	容器	ブナ科クリ属クリ



木口

No-24 マツ科マツ属 (二葉松類)



柁目



板目



木口

No-28 ヒノキ科アスナロ属



柁目



板目



木口

No-6 ブナ科ブナ属



柁目



板目



木口



柱目



板目

No-27 ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節



木口



柱目



板目

No-33 ブナ科クリ属クリ



木口



柱目



板目

No-9 ニレ科ケヤキ属ケヤキ



木口

No-21A モクレン科モクレン属



柁目



板目



木口

No-2 マンサク科イスノキ属イスノキ



柁目



板目



木口

No-30B カエデ科カエデ属



柁目



板目



木口

No-30A ミズキ科ミズキ属



柱目



板目

第4節 中居林遺跡の掘立柱建物跡

高島 成 侑

はじめに

ここでは、掘立柱建物跡の検出に当り、特に考慮したことを述べ、その掘立柱建物跡の平面構成や柱間寸法などの概要を記し、その建物跡の遺立年代の推定を行い、それらの用途について述べている。それほど広くない調査区域において、建物跡が割と詰まった形で検出されたことは驚きであった。

この稿をなすにあたり、八戸市教育委員会の故佐々木浩一氏には、現場と一緒に歩き、図面を見ながら、多大なご助力と協力を頂いた。感謝の言葉も無い。また、現場を担当された皆様には、図面提供のほか、遺物調査の結果報告など、細かなことまでご教示をいただいた。ここに感謝の意を申し上げたい。

1. 掘立柱建物跡の検出

現場を見て、SB01などはすぐに建物跡が検出できるほど、明瞭な遺構であった。しかし図面にしていただいてから、多少手間取ったところもあった。SB04では、周囲の底跡がどこまで続くのかとか、東側にもう一間伸びないのかなどを考えたが、ここまでの建物跡とした。SB07では、もう二間ほど東へ伸びたところに柱穴跡が確認されたが、途中の柱穴跡が定かではなくここまでとした。

SB08では梁間の寸法が、東側と西側では北側二間分を見ると異なっている。それは中央の柱筋で2.0尺のズレが生じせしめたためである。東側から伸びる桁がここまで来ており、西側の部屋の方は床の間などの関係から、奥を8.0尺と広くしたのであろう。また、東端一間の出が4.0尺であり、「きりよけ」などとよばれる下屋が下りていたことを考えた。

2. 主な掘立柱建物跡

ここでは梁間二間以上の規模の大きな建物跡を取上げて、その平面構成や柱間寸法などについての概要を述べる。

2-1. B区

SB01掘立柱建物跡は、桁行五間に梁間四間のもので、平面構成は南と東西に底跡が付き、中に三間四方の部屋があり、その中央に一間四方の部屋がある形の建物跡である。一見して五間堂にみえる仏堂形式を示している。しかし、南側の沢跡に極めて近いところにあり、入口や法要の際の使い方に問題がある。柱間寸法は、桁行では西側から6.5尺+6.5尺+6.5尺+6.5尺+6.5尺(=32.5尺=9.850m)と並び、梁間では北側から7.5尺+7.5尺+7.5尺+6.5尺(=29.0尺=8.790m)であり、6.5尺が多用された時期の遺立と考えられる。さらにまた、梁間二用いられている7.5尺に注目すると、北側から三間を身舎として南側に一間の底跡を付けた形も考えられるが、ここでは仏堂ということにしておく。

SB02掘立柱建物跡は、桁行四間に梁間三間のもので、身舎を北側に広く取り、南側に一間の庇が付く形である。寸法は桁行では西側から7.5尺+6.5尺+7.0尺+6.5尺(=27.5尺=8.330m)と取り、梁間では北側から7.0尺+7.0尺+6.5尺(20.5尺=6.210m)としている。やはり、6.5尺が用いられており、ほかに7.0尺がある。

SB03掘立柱建物跡は、三間四方の建物跡であり、寸法は東西方向では7.0+7.0+7.0尺(=21.0尺=6.360m)となり、南北方向では7.0+7.5+7.0尺(21.5尺=6.510m)となっており、南北が0.5尺だけ長くなっている。平面から見ると倉庫跡のようなものであるが、7.0尺と7.5尺だけが使われており、この遺跡のなかでは古

いものであろう。

SB04掘立柱建物跡は、桁行五間に梁間四間の建物跡である。北側一面に一間の庇跡があり、その南側に二間四方の部屋を置いて二方向に庇跡を付け、さらに、二間に三間の部屋を取っている。少し妙な平面形式を示している。柱間寸法は、桁行では西側から6.5尺+6.0尺+6.5尺+6.5尺(=32.0尺=9.700m)となり、梁間では北側から6.0尺+7.5尺+7.5尺+5.5尺(=26.5尺=8.030m)となっている。身舎の梁間二間は7.5尺をとり、桁行には6.5尺が多用されているが、ところどころに、6.0尺や5.5尺という寸法がみられる。

SB05掘立柱建物跡は桁行五間に梁間二間の倉庫跡などの建物跡である。寸法は桁行では北側から6.5尺+6.5尺+6.5尺+6.5尺+6.5尺(=32.5尺=9.850m)となり、梁間では西側から7.0尺+7.0尺(=14.0尺=4.240m)となっている。ともに寸法がそろった建物跡であり、年代の推定もできた。

SB06掘立柱建物跡は、桁行五間に梁間三間で、倉庫跡のようなものの西側に蔵前とか庇跡が付いた形であろう。寸法は桁行では北側から7.0尺+6.0尺+6.0尺+6.0尺+5.5尺(=30.5尺=9.240m)となり、梁間では西側から6.0尺+7.0尺+7.0尺(=20.0尺=6.060m)である。身舎梁間二間は7.0尺等間であり、桁行には6.0尺や5.5尺が混じっている。

2-2、C区

SB08掘立柱建物跡は、桁行七間に梁間四間のもので、東側に4.0尺のものが付いた形であり、近世末期の大きな住宅のような建物跡である。寸法は桁行では西側から7.0尺+7.5尺+6.0尺+6.0尺+6.0尺+6.0尺+8.0尺+4.0尺(=50.5尺=15.300m)であり、梁間は北側から西側で8.0尺+6.0尺+8.0尺+8.0尺となり、東側では6.0尺+8.0尺+8.0尺+8.0尺(=30.0尺=9.090m)となっている。

SB09掘立柱建物跡は、桁行六間に梁間二間のもので、なかに間仕切があつて二室に区切られている。寸法は桁行では西側から5.5尺+5.5尺+7.0尺+7.0尺+5.5尺+8.5尺(=39.0尺=11.820m)となり、梁間では北側から8.0尺+8.0尺(=16.0尺=4.850m)となる。この地域にある中世の建物としては、割と大きなものであった。

SB10掘立柱建物跡は、桁行三間に梁間二間のものである。柱間寸法は桁行では西側から7.0尺+5.5尺+6.0尺(=18.5尺=5.600m)と取り、梁間では北側から5.0尺+5.0尺(=10.0尺=3.030m)となっている。かなり小規模なものである。

2-4、D区

この地区では梁間二間以上のものは無かった。

3. その年代と用途

3-1、掘立柱建物跡の年代について

これまでに述べた掘立柱建物跡について、その建築年代を推定することを試みたい。建築史学の方面から、これらの遺構の建築年代を推定することについては、平面構成の考察と、そこに用いられている柱間寸法を調べて、その値の大小によって行われるのが普通である。この遺跡で検出された掘立柱建物跡は、そのほとんどが住宅系の建物跡と認められ、ここでは、住宅建築に関わる基準寸法によって推定してみたい。

表1は、各遺構に使用されている寸法から、その年代を考察したものである。

3-2、掘立柱建物跡の用途について

SB01は、先に述べたように、16世紀後半ころの「仏堂」の平面を示している。この時期の遺跡に宗教関係の施設があったということも不思議であるが、現在でも傍に天満宮が在るところから、なんらかの施

表一 柱間寸法から見た推定年代表

遺構名	使われている1間の寸法	使用尺度と推定年代
SB01 掘立柱建物跡	7.5、6.5尺	身舎梁間は7.5尺の等間をつかっているが、6.5尺が数多く使われているところから、16世紀後半とみる。
SB02 掘立柱建物跡	7.5、7.0、6.5尺	身舎梁間が7.0尺の等間であるが、これも6.5尺から、16世紀後半とする。
SB03 掘立柱建物跡	8.0、7.5、7.0、6.5尺	8.5尺や7.5尺もあるが、1ヵ所6.5尺があり、15世紀後半か。
SB04 掘立柱建物跡	7.5、6.5、6.0、5.5尺	身舎梁間が7.0尺の等間であるが、6.5、6.0、5.5尺があるところから、17世紀後半とした。
SB05 掘立柱建物跡	7.0、6.5尺	身舎は7.0尺の等間であるが、6.5尺があるところから、16世紀後半とした。
SB06 掘立柱建物跡	7.0、6.5、6.0尺	身舎は7.0尺の等間であるが、6.5、6.0尺があるところから、17世紀前半としてみた。
SB08 掘立柱建物跡	8.0、7.5、7.0、6.0尺	梁間に6.0尺が用いられるが8.0尺が多く用いられているところから、19世紀前半とした。
SB09 掘立柱建物跡	8.5、8.0、7.0、6.5、5.5尺	6.5、5.5尺があるところから、17世紀後半とする。
SB10 掘立柱建物跡	7.0、6.0、5.5、5.0尺	6.0、5.5、5.0尺があるところから、19世紀後半とする。

*6.5尺としたもののなかには、6.6尺も6.5尺も6.3尺も含まれている。その辺を区別するためには、現場で何度も測定を繰り返し、考察しなければならず、今回は省略してある。

設が在ったかもしれない。SB02は集落内の施設であるかもしれないし、SB03は倉庫跡と見られる。SB04は、「土間部分」があり「居住部分」があって、17世紀後半ころの富裕者の住宅であった可能性もある。SB05は倉庫跡であり、SB06も同様の倉庫跡に「蔵前」が取付いた平面であろう。SB08は19世紀前半ころのものであり、「土間部分」があり「居住部分」の部屋数も多くあって、かなり大規模な住宅跡と見ることができよう。SB10は住宅跡あるいは共同の作業所跡などが想定されるものである。

むすび

出土遺物の年代は、中世末から近世、19世紀ころまでのものと伺った。その頃の八戸市内にこのような集落跡が在ることは驚きであった。八戸に根城南部氏が居ったところからのものか、興味のある問題が含まれており、これからも検討を続けたいものである。

参考文献

浅川滋男・箱崎和久編『埋もれた中近世の住まい—奈良国立文化財研究所シンポジウム報告—』2001、同成社

茅野嘉雄他『米山(2)遺跡VI』2009、青森県教育委員会、青森県埋蔵文化財調査報告書第473集
高島成侑「米山(2)遺跡の掘立柱建物跡」2009、同上報告書所収

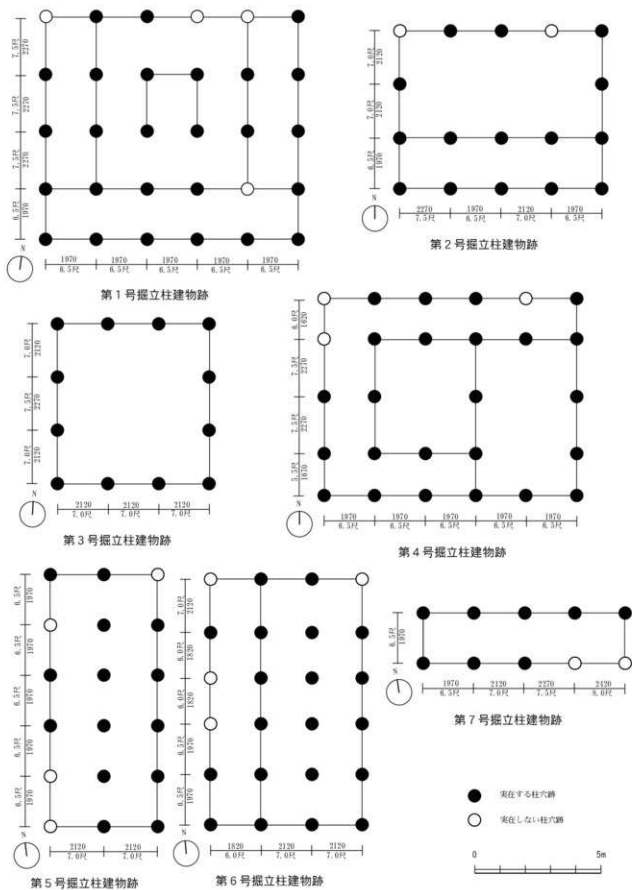
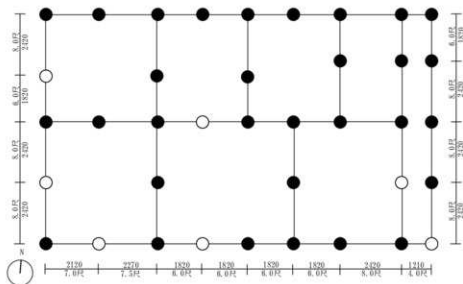
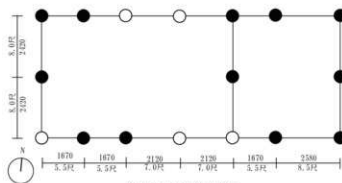


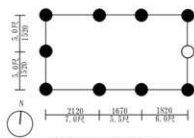
図1 B区検出掘立柱建物跡模式図



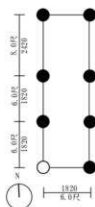
第8号掘立柱建物跡



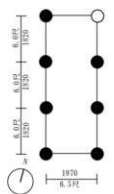
第9号掘立柱建物跡



第10号掘立柱建物跡



第11号掘立柱建物跡



第12号掘立柱建物跡

- 実在する柱穴跡
- 実在しない柱穴跡



図2 C・D区検出掘立柱建物跡模式図

第5節 中居林遺跡出土漆器の塗膜構造調査

藤吉田生物研究所

1. はじめに

青森県に所在する中居林遺跡から出土した漆器について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

2. 調査資料 調査した資料は、表1に示す中～近世の漆器5点である。

表1 調査資料

*：樹種については、別編の樹種同定報告書を参照のこと。

No.	保存処理 No.	品名	樹種*	出土遺構	概 要
1	3	漆器椀	ブナ属	SD16	内外両面とも黒色の無文椀。内面の口縁近くの一部に、黒色の漆膜の付着が見られる。
2	6	漆器椀	ブナ属	沢1	内外両面とも赤色で、高台内は黒色の漆が塗布され、その上に赤色漆で菱紋が描かれている椀。
3	11	漆器椀	ブナ属	SD16	内外両面とも赤色で、口縁部は黒色の椀。高台内は黒色の漆が塗られ、その上に赤色漆で紋様が描かれている。
4	14	漆器椀	ブナ属	SD16	内外両面とも赤色で、高台内には黒色地に赤色漆で紋様が描かれた椀。
5	20	漆器椀	ブナ属	沢1	内面は赤色で外面は黒色地に赤色と黄色の漆で紋様が描かれた椀。

3. 調査方法 表1の資料本体の内外面から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で鏡検した。

4. 断面観察結果 塗膜断面の観察結果を表2に示す。

表2 断面観察結果表

No.	器種	部位	写真 No.	塗 膜 構 造 (下 層 か ら)				
				下 地		漆 層 構 造	顔料	
				膠着剤	澱和材			
1	椀	内面	1, 2	漆	炭化物	補修：透明漆2層	オリジナル：透明漆1層/赤色漆1層	ベンガラ
		外面	3	漆	炭化物	補修：透明漆2層	オリジナル：透明漆2層	—
2	椀	内面	4	糊状	木炭粉		赤色漆1層	ベンガラ
		外面	5	糊状	木炭粉		赤色漆1層	ベンガラ
		高台内	6	糊状	木炭粉		透明漆1層	—
3	椀	内面	7	糊状	木炭粉		赤色漆1層/透明漆1層	ベンガラ
		外面	8	糊状	木炭粉		赤色漆1層/透明漆1層	ベンガラ
		口縁	9	糊状	木炭粉		赤色漆1層/透明漆1層	ベンガラ
		高台内	10	糊状	木炭粉		透明漆1層	—
4	椀	内面	11	糊状	木炭粉		赤色漆1層	ベンガラ
		外面	12	糊状	木炭粉		赤色漆1層	ベンガラ
		高台内	13	糊状	木炭粉		透明漆1層	—
5	椀	内面	14	糊状	木炭粉		赤色漆1層	ベンガラ
		外面(赤色部)	15	糊状	木炭粉		透明漆1層/赤色漆1層	ベンガラ
		外面(黄色部)	16	糊状	木炭粉		透明漆1層/黄色漆1層	石黄

塗膜構造：木胎の上に、下層から下地、漆層と重なる様子が観察された。1点（No. 1）には、オリジナルの塗装と後世の補修の塗装とが重なる様子が観察された。No. 1外面のオリジナル塗装の上部は黒褐色を呈している（写真3）。これは紫外線劣化によるもので、その面が長時間外気にさらされていたことが分かる。よってしばらくの使用期間が経ってから補修されたと判断される。他の4点には、オリジナルの塗装のみが観察された。

下地：黄褐色の漆に炭化物の粉末を混和した漆下地1点（No. 1）と、濃褐色の柿渋に木炭粉を混和した炭粉渋下地4点とが認められた。

漆層：装飾の文様部での漆層の塗り重ね以外で、地色の漆の塗り重ねは2点（No. 1, 3）に認められた。それ以外の3点の地色は単層であった。

No. 1内外両面ともに、さらにオリジナルと補修ともに2層ずつの塗り重ねが認められた。どの層も厚みがあり、上面も平滑である。塗膜構造で先述したが、内面の補修最上部、外面のオリジナル・補修最上部の透明漆層は、黒褐色に変色して断面V字形の溝すらも認められる。

No. 3には赤色漆層の上に、顔料を混和しない透明漆層が重ねられる、という塗り重ねがみられた。内外面の大部分では、この表面の透明漆の層厚は薄い（写真7, 8）が、口縁部には下層の赤色漆層と同程度の層厚の透明漆が重ねられているため、一見すると黒色に見える。

加飾：顔料を混和した漆で、地色の上に文様を施す、漆絵の技法が1点（No. 5）に認められた。

No. 5の外面には、赤色漆と黄色漆による漆絵が施されている。断面では、地色の透明漆層の上に赤色漆層と黄色漆層がそれぞれ観察された（写真15, 16）。

顔料：赤色漆（No. 1内面、No. 2内外面、No. 3内外面、No. 4内外面、No. 5内外面）と黄色漆（No. 5外面）には、顔料が観察された。赤色顔料は、その透明度合いや形状、夾雑物の混在などについて、資料による違いが認められたが、すべての赤色漆層にはベンガラが混和されていた。

No. 5外面の黄色漆層には、透明度の高い黄色い石黄粒子が観察された。

5. 摘要 中居林遺跡から出土した5点の漆桶について塗膜構造調査を行った。

1点には補修が認められた。内外両面ともに漆下地に2層の漆層が認められたオリジナルの塗装の上に、直に透明漆2層が塗り重ねられていた。現在では一見すると内外両面とも黒色の無文桶であるが、内面のオリジナルは赤色であったことが判明した。また、この桶の下地には、木炭粉ではなく何らかの炭化物が混和されていた。

4点の桶の下地は、炭粉渋下地であった。

地色の漆の塗り重ねが先述の1点とともにもう1点認められた。高台内以外の、体部内外面に赤色漆を塗布し、その上から透明漆を桶全体に塗布したものであろう。特に口縁周囲には透明漆を厚く塗り、一見すると黒色に見受けられる。

漆にベンガラを混和した赤色漆と、漆に石黄を混和した黄色漆による漆絵が認められた。

地色の赤色漆には、すべてにベンガラが混和されていた。

漆桶の素地も併せると、今回調査を行った漆桶はすべてブナ属であった。中近世の漆桶では、大量生産による普及品にブナ属を利用することが多い。塗膜構造調査の結果からは、漆下地が施され、さらに補修してまで使用されたものが1点、炭粉渋下地の上に赤色漆層と透明漆が塗り重ねられていたものが1点認められた。これら2点は、炭粉渋下地の上に地色の漆が単層のみ施された、他の資料よりも丁寧な製作工程を経ていたといえよう。

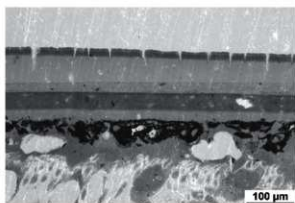


写真1 No. 1内面の断面写真

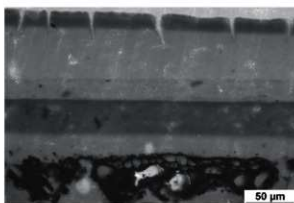


写真2 No. 1内面の断面写真



写真3 No. 1外面の断面写真

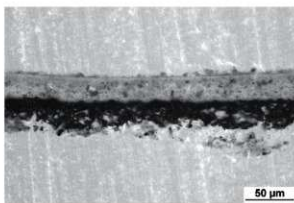


写真4 No. 2内面の断面写真

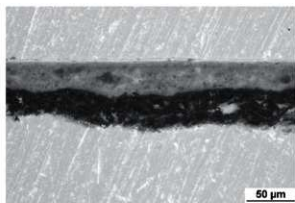


写真5 No. 2外面の断面写真

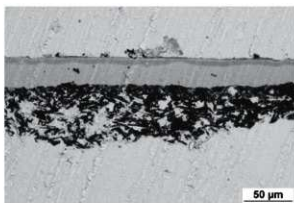


写真6 No. 2高台内の断面写真

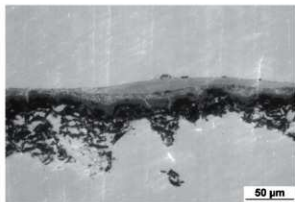


写真7 No. 3内面の断面写真

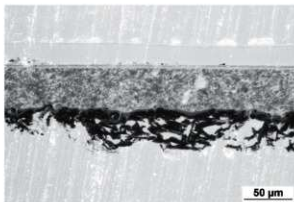


写真8 No. 3外面の断面写真

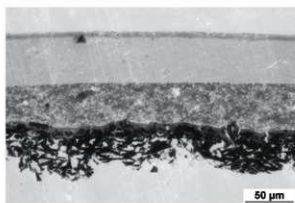


写真9 No. 3口縁の断面写真

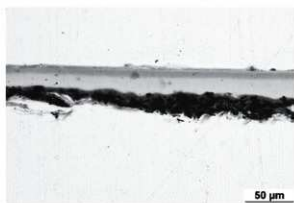


写真10 No. 3高台内の断面写真

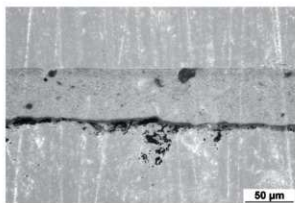


写真11 No. 4内面の断面写真

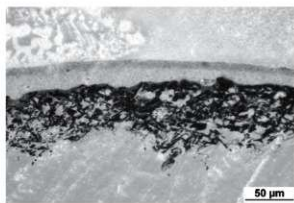


写真12 No. 4外面の断面写真

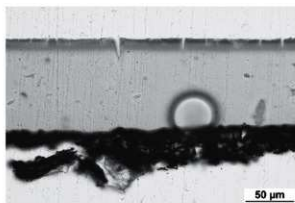


写真13 No. 4高台内の断面写真

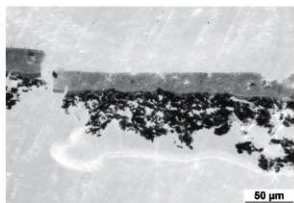


写真14 No. 5内面の断面写真

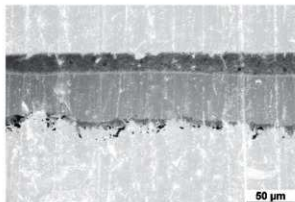


写真15 No. 5外面（赤色部）の断面写真



写真16 No. 5外面（黄色部）の断面写真

第6節 中居林遺跡の火山灰について

弘前大学理工学部地球環境学科 柴 正敏

八戸市中居林遺跡より採集された火山灰サンプル（S113フク土2試料及びB1-27基本層序14試料、計16試料）について、以下の観察を行った。

これら試料について、超音波洗浄器を用いて水洗し、粘土鉱物など数マイクロメートル以下の粒子を除去した後、偏光顕微鏡を用いて、火山ガラスの有無、火山ガラスが存在する場合にはその形態、構成鉱物の種類を観察・記載した。その結果を表1に示した。火山ガラスは、その形態、屈折率、化学組成、共存鉱物などにより給源火山を推定することができる（町田・新井、2003）。

ガラスの形態及び共存鉱物（表1）、ならびに軽石粒子の発泡度・色（特に褐色ガラスや苦鉄質ガラスの有無）粒径より、S113試料番号1は十和田aテフラ（To-a）及び試料番号2は白頭山苦小牧テフラ（B-Tm）に帰属される。前者は多量のオプシディアン及び石英斑晶の存在、後者はアルカリ長石及びエジリンオーゾジャイトの存在で特徴付けられる。

B1-27の14試料中13試料においてホルンブレンド（針状）及び発泡の良い軽石型ガラスが認められることより、十和田八戸テフラ（To-H）が混入・再堆積しているものと考えられる。試料番号3（III a層）には、淘汰の良い軽石粒（径～2mm）が認められることより、十和田中殿テフラ（To-Cu）を含むものと考えられる。試料番号5（I Va層）は、発泡度の異なるスポンジ状軽石ガラスが認められることより、十和田南部テフラ（To-Nb）を含んでいる可能性が高い。試料番号5（I Va層）、6（IVb層）及び7（V層）は、暗褐色のスコリアガラス（苦鉄質ガラス）が多く認められることより、十和田二の倉テフラ（To-Nk）を含んでいる。

参考文献

- 青木かおり・町田 洋 2006 日本に分布する第四紀後期広域テフラの主要組成一 K_2O - TiO_2 図によるテフラの識別。地質調査研究報告、第57巻、第7/8号、239-258。
- Hayakawa, Y. 1985 Pyroclastic geology of Towada Volcano. Bulletin of Earthquake Research Institute, vo 1.60, 507-592.
- Machida, H. 1999 Quaternary widespread tephra catalog in and around Japan: Recent progress. 第四紀研究、第38巻、194-201。
- 町田 洋・新井房夫 2003 新編火山灰アトラスー日本列島とその周辺一。東京大学出版会、pp. 336。
- 柴 正敏・重松直樹・佐々木 実 2000 青森県内に分布する広域テフラに含まれる火山ガラスの化学組成(1)。弘前大学理工学部研究報告、第1巻、第1号、11-19。
- 柴 正敏・中道哲郎・佐々木 実 2001 十和田火山、降下軽石の化学組成変化ー宇樽部の一露頭を例として一。弘前大学理工学部研究報告、第4巻、第1号、11-17。
- 柴 正敏・佐々木 実 2006 十和田火山噴出物のガラス組成変化。月刊地球、第28巻、第5号、322-325。

表1 第13号整穴住居跡火山灰

試料番号	出土地点	層位	火山ガラス及び構成鉱物	ガラスの帰属	特記事項
1	S113	覆土上層	火山ガラス (pm>bw)、褐色ガラス (多い)、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-a	軽石粒子 (径1~3mm) を含む
2	S113	覆土上層	火山ガラス (pm, bw)、アルカリ長石、エジリンオージャイト、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、鉄鉱	B-1m	

pm: 軽石型ガラス、bw: バブルウォール型ガラス、To-a: 十和田aテフラ、B-1m: 白頭山苦小牧テフラ

表2 基本層序火山灰

試料番号	出土地点	層位	火山ガラス及び構成鉱物	ガラスの帰属	特記事項
1	BI-27	I	火山ガラス (pm>b w)、斜長石、ホルンブレンド (針状)、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-H (再堆積)	
2	BI-27	II	火山ガラス (pm>b w)、斜長石、ホルンブレンド (針状)、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-H (再堆積)	
3	BI-27	IIIa	火山ガラス (pm>b w)、斜長石、ホルンブレンド (針状)、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-Cu、 To-H (再堆積)	淘汰の良い軽石粒子
4	BI-27	IIIb	火山ガラス (pm>b w)、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	十和田系	
5	BI-27	IVa	火山ガラス (pm)、スコリアガラス、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、ホルンブレンド (少量)、鉄鉱	To-Nb、To-Nk、 To-H (再堆積)	
6	BI-27	IVb	火山ガラス (pm)、スコリアガラス、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、ホルンブレンド (少量)、鉄鉱	To-Nk、 To-H (再堆積)	
7	BI-27	V	火山ガラス (pm)、スコリアガラス、斜長石、斜方輝石、単斜輝石、ホルンブレンド (少量)、鉄鉱	To-Nk、 To-H (再堆積)	
8	BI-27	VI	火山ガラス (pm>b w)、斜長石、ホルンブレンド (針状)、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-H (再堆積)	
9	BI-27	VII	火山ガラス (pm>b w)、斜長石、ホルンブレンド (針状)、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-H (再堆積)	
10	BI-27	VIII	火山ガラス (pm>b w)、斜長石、ホルンブレンド (針状)、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-H (再堆積)	軽石粒子を含む
11	BI-27	IX	火山ガラス (pm>b w)、斜長石、ホルンブレンド (針状)、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-H (再堆積)	
12	BI-27	X	火山ガラス (pm>b w)、斜長石、ホルンブレンド (針状)、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-H (再堆積)	
13	BI-27	XI	火山ガラス (pm>b w)、斜長石、ホルンブレンド (針状)、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-H (再堆積)	
14	BI-27	XII	火山ガラス (pm>b w)、斜長石、ホルンブレンド (針状)、斜方輝石、単斜輝石、石英、鉄鉱	To-H (再堆積)	

To-Cu: 十和田中振テフラ、To-Nb: 十和田南部テフラ、To-Nk: 十和田二の倉テフラ、To-H: 十和田八戸テフラ

第9章 まとめ

調査の結果、中居林遺跡は縄文時代から近世にかけての複合遺跡であることが明らかとなった。ここでは各時代の遺構・遺物を概観し、まとめにかえたい。

縄文時代の検出遺構は、竪穴住居跡6軒、土坑26基、溝状土坑1基、木組遺構1基である。これらは木組遺構を除き、調査区西側の標高53～60mの斜面上に位置する。

竪穴住居跡は、平面形が長軸3m前後の円形及び楕円形であるが、一部が失われているなどして不明なものもある。炉の形態は地床炉、土器埋設炉が見られるが、炉が検出されなかったものもある。これらの年代は、出土遺物などから縄文時代後期から晩期にかけてのものと考えられ、中でも後期初頭にまとまりがみられる。当該期の住居跡は平成19年度調査でも検出されているが、今回の調査の結果、集落の範囲がさらに東側に広がるということが明らかとなった。

土坑も竪穴住居跡と同様にBUIラインから西側の斜面部に分布する。これらの大半は用途不明であるが、第81・113・114・133号土坑のように、底面に小ピットを持つものは落とし穴と考えられる。遺物は出土しなかったが、これらは堆積土中に中振浮石を含まず、基本層序第Ⅲ層堆積以前に埋没したと考えられることから、縄文時代早期末から前期初頭にかけてのものと考えられる。同様の遺構は西側に隣接する糠塚小沢遺跡でも検出されており、当該期における土地利用の一端が明らかとなった。その他の土坑については出土遺物から縄文時代中期後葉～後期前葉と考えられる。遺物が出土しなかった土坑についてもおおよそ縄文時代中期から後期のものと考えられる。

沢1から検出された第3号木組遺構は、本県では検出例の少ない遺構として注目される。遺構は4本の杭とし字状に設置された木枠から成る。木枠は長方形の二辺のみの検出であったが、杭が4本検出されたことを考えると、本来は全周していた可能性が高い。また、本遺構から検出された杭、木枠及び本遺構に伴うと考えられる木材で樹種同定を実施したものは全てクリであった。木枠が全周せず用途を特定するのは困難であるが、本遺構に伴って出土した堅果類の果皮や木製容器の未製品から、水さらし場や貯蔵場といった用途が想定される。また、本遺構に明確に伴う土器は出土しなかったが、本遺構の杭及び木製容器を用いた年代測定では、それぞれ 4300 ± 30 yr B.P.、 4260 ± 30 yr B.P.との結果が得られている。このことから本遺構は縄文時代中期後葉のものと考えられる。今回の調査で当該期の竪穴住居跡は検出されなかったが、木組遺構が単独で存在したとは考えにくい。また、沢1の底面からは縄文時代中期後葉の土器片が出土していることから、中世以降に大規模な削平を受けたと考えられるB～D区も含め、周辺に当該期の集落の存在が想定される。沢1の礫層からは、縄文時代中期後葉～後期初頭までの土器片が出土した。このことと木組遺構の年代から、少なくとも縄文時代中期後葉には沢が形成されていたと考えられる。その後、中世末から近世初頭にかけて沢1が埋没し、後述する第16号溝跡が構築されたと考えられる。

出土遺物では、縄文時代前～晩期の土器、石器、土・石製品が調査区西側のA区を中心とした区域から出土した。沢1から出土したものを除けば、縄文時代の遺構の分布とほぼ重なり、B区以東からはほとんど出土しなかった。出土土器は縄文時代後期初頭から前葉のものが主体となる。石器では、大石平型石筥(図28-31)が出土した。これは、つまみ部を持ち先端部が丸みを帯びるもので、縄文時代後期前葉に出土例が多く、本遺跡出土の石筥も同様の時期のものである可能性が高い。

最後に縄文時代の各時期における遺構の変遷を、過去二度の調査成果も含めまとめると以下のようになる。

縄文時代早期末葉から前期初頃にかけて、底面に小ピットを持つ落とし穴と考えられる土坑が調査区西側の尾根を挟んで東西両斜面に構築され、狩猟場として利用された。沢の形成時期については不明であるが、礫層出土遺物及び木組遺構の年代から、少なくとも縄文時代中期後葉には沢として機能していた。この頃には木組遺構も構築され、水場を利用した生活が営まれていた。また縄文時代中期から後期にかけて、フラスコ状土坑を含む多数の土坑が東西両斜面に構築された。縄文時代後期初頃には東側斜面に竪穴住居跡、土坑などが構築され、集落として最も盛行した。縄文時代晩期の遺構は検出されなかったが、晩期中～後葉の土器片が遺構外から数点出土した。

以上のように、本遺跡では縄文時代早期末葉から晩期に至るまで断続的に集落及び狩猟場として利用されていたことが明らかとなった。

弥生時代の検出遺構は、弥生時代中期の第3号竪穴住居跡1軒である。本遺構の大半は平成19年度に調査されており、今回調査した範囲は前回調査時には未買収区域だった箇所である。また、遺構外からも弥生土器が出土したがその量はわずかである。

古代の検出遺構は、竪穴住居跡4軒である。これらは縄文時代の遺構と同様に、調査区西側の斜面を中心に分布する。第13号竪穴住居跡を除き、全体形が不明なものが多く、カマドや柱穴配置など住居構造を明らかにするには至らなかった。これらの年代は、出土遺物及び炭化物を用いた年代測定結果からおおよそ8～11世紀代と考えられる。住居跡の検出数と年代幅から、古代を通じて小規模な集落が断続的に営まれていたと考えられる。

古代の出土遺物は遺構内外を問わず出土しているが、その量は多くない。これらの年代は、その特徴から7世紀中葉～11世紀代までと年代幅がみられる。この内7世紀中葉のものと考えられる一群(図58-9～11・13・14)は、沢1の堆積土層からまとめて出土しており、周辺に当該期の集落が存在したと考えられる。

縄文時代から古代にかけての遺構と遺物の分布は、A区を中心とする調査区西側にまとまっており、B区以東にはほとんど見られない。これは、中・近世に行われたと考えられる大規模な削平に起因すると考えられる。従って、これまで述べた集落の様相が、本来のそれとは必ずしも一致しない可能性も考えられる。

中・近世の検出遺構は、掘立柱建物跡12棟、土坑5基、溝跡1条、用途不明遺構1基である。また、1850基検出されたピット群の大半も中・近世のものと考えられる。これらの分布は、斜面が緩斜化するB区北部からD区北部の範囲に集中する。このことから、当該期の居住域は、B区以東を主体としていたと考えられる。また、B区北部、南西の一部を除くC区全域、D区北部では、基本層序第II層以下の欠落が確認された。この範囲では、東西20～25m幅の平場が複数存在し、掘立柱建物跡はこの平場範囲に収まるように検出された。基本層序の欠落は、本区域に掘立柱建物を建設する際に行われた大規模な削平に起因すると考えられる。またこの削平が行われた時期は、掘立柱建物跡と出土遺物の年代から、15世紀後半以降と考えられる。

中・近世の掘立柱建物跡の検出地点は、B区北半の平場とC～D区北部の平場の二ヶ所に集中する。B区北半に位置する一群(第1～7号掘立柱建物跡)の主要柱間寸法は7.0～6.0尺であり、成立年

代は15世紀後半から17世紀前半と推定される。C～D区北部に位置する一群（第8～12号掘立柱建物跡）の主要柱間寸法は6.5～6.0尺であり、成立年代は17世紀後半以降と推定される。従って、居住域の主体はB区北半の平場からC～D区北部の平場へと東進したと考えられる。

B区に位置する第1号掘立柱建物跡の間取りは、一重宝形造三間堂の様相を呈する。三間堂は中世前期に成立した寺院本堂の平面形式であり、後世に至っても普遍的に用いられた。なお、寺院ないしその関連施設に限定した出土が予想される僧具（袈裟や横被等）や梵音具（鬻口や魚鼓等）は出土しなかった。

本遺跡検出の建物は、規模や造作において突出した存在ではない。新井田古館跡や田向遺跡など、同時代の周辺集落の建物群と比して、建面積も小さく、間取りも単純である。前述した第1号掘立柱建物跡の内部構成も、当時の本堂建築の中では簡易なものに属する。本遺跡から2km南に位置する八戸市是川中居には1581（天正9）年造立の市重要文化財清水寺観音堂が現存する。県内最古の木造建築である同観音堂も、第1号掘立柱建物跡同様の一重宝形造三間堂である。同観音堂は外陣が半間後退する複雑な内部構成と架構を持つが、第1号掘立柱建物跡に同等以上の架構を窺わせる痕跡はない。それ以外の建物も含め、本遺跡内の建物の造作は総じて簡便であったようだ。

前述した一段ごとの平場範囲に収まるように建物が計画されるという事実は、建物の設計者が平場を一種の区画単位（屋敷割？）と認識していた可能性を示すものでもある。B区で検出された沢1の北岸には、CHライン付近を境界とし、50cm程度の高低差を持つ二段の平場が存在する。平場縁辺部には検出位置から区画溝としての用途が想定される浅い溝跡（第19・20号溝跡）が検出されたほか、調査前段階にはこれと並行する植栽列が確認されるなど、造成以降複数の区画施設が存在し、境界概念を意識的に視覚化させていたようだ。平場間の段階は調査前段階でも目視できた。現行の宅地区画もまたこの中世末由来の平場範囲を一単位として形成されるなど、区画意識は現在においても踏襲されている。

今回の調査範囲は現在の中居林集落の西端部にあたる。中世末に調査区中央B区で成立した居住域の主体が、近世末には調査区東端D区にまで東進していたことと合わせると、今回の調査で明らかにされた中世由来の居住域が、現在の中居林集落の原集落であった可能性も考えられる。

沢1は、出土遺物などから少なくとも縄文時代中期後葉から利用されているが、中世末から近世初頭の段階で埋没したと考えられる。埋没後、何らかの理由で沢1は再開削され、第16号溝跡として近世を通じて利用された。なお、第16号溝跡から検出された杭列と第1・2号木組遺構の用途は、水流調節や土留めなどを目的とする水利施設であった可能性が高い。

今回の調査で出土した木製品は自然木を含め101点である。これらは、縄文時代中期後葉のものであると考えられる第3号木組遺構から出土した22点を除き、沢1・2、第16号溝跡、及び沢1に隣接するピットから出土した。この内沢1から出土したものは、本来第16号溝跡に伴うものであった可能性が高い。またこれらの年代は、共存する陶磁器の年代から中世末から近世にかけてのものと考えられる。器種は、挽物、底板、曲物、下駄、下駄歯、把手、鋸、櫛、箸、刀形、木槌、杭である。この他に器種不明のものも出土した。

挽物の樹種は全てブナ属であったが、塗膜分析の結果、図59-2は下地に漆が用いられ、補修のために塗り直されていることが判明した。また、図59-9も下地の上に赤色漆と透明漆が重ね塗り

されており、両者とも他に比べて丁寧な製作工程を経ている。また、櫛には関東以西に分布するイスノキが用いられており、この櫛が搬入品であることを示す。

今回の調査で出土した陶磁器の総破片数は461点である。同一個体及びその可能性が高いものや、近・現代と考えられる224点を除き、その個体数を計上した。計上した個体数237点について、数量的な分析を行うことで中・近世における陶磁器の様相を提示したい。なお、出土した陶磁器の大半は個体同定が困難な小破片である。そのため、本来の個体数は今回算出したものより変動する可能性がある。各器種を形態から用途別に分類した。それぞれ杯・皿・鉢・碗類は食膳具、搦鉢は調理具、壺・甕類は貯蔵具、焔炉・火鉢は暖房具、紅皿は化粧道具、仏飯器は仏具として扱った。茶入の他、碗、壺・甕類の中でも天目碗や茶壺といった茶の湯と関連が伺えるものは茶道具として扱った。火入・香炉はその他に分類し、小破片で器種・用途の判断が困難なものは不明とした。

おおまかな時期ごとみにみると15世紀末葉～17世紀前葉のものが36点(15.2%)、17世紀中葉～18世紀前葉のものが43点(18.1%)、18世紀中葉～19世紀前葉のものが48点(20.3%)、19世紀中葉～近代のものが63点(26.6%)、時期不明のものが47点(19.8%)であった。なお、破片によって時期区分が困難なものは、各世紀一括とした。そのため便宜上、各世紀の中葉以降としたものの中にも前葉に含まれる可能性があるものもみられる。

15世紀末葉～17世紀前葉では、産地ごとの出土破片点数は、中国産14点、瀬戸・美濃産10点、肥前産6点、信楽焼4点、越前焼2点となる。磁器は中国産の小皿、中碗で国産のものはみられない。陶器は瀬戸・美濃産の小皿、厨衝茶入、天目碗や肥前産・越前焼の搦鉢、信楽焼の壺といった国産のもので占められる。用途別では、食膳具が22点、茶道具が7点、調理具が7点となる。

17世紀中葉～18世紀前葉では、産地ごとの出土破片点数は、肥前産39点、瀬戸・美濃産4点となる。国産の中でも肥前産のものが大半を占める。磁器は肥前産の小杯・小皿である。陶器は肥前産の大皿、中皿、小皿、大碗、中碗、壺・甕、火入・香炉、搦鉢や、瀬戸・美濃産の大皿、大鉢である。磁器・陶器の比率をみると、陶器の比率が高く、瀬戸・美濃陶器に加え、京焼風や呉器手とよばれる肥前産陶器が目立つようになる。用途別では、食膳具が31点、貯蔵具が6点、調理具が2点、その他が2点、不明のものが2点である。

18世紀中葉～19世紀前葉では、産地ごとの出土破片点数は、肥前産34点、瀬戸・美濃産9点、堺産1点、大堀相馬焼4点となる。肥前産が大半を占め、瀬戸・美濃産に加え泉州堺でつくられた関西系のもや大堀相馬焼が混じる。磁器は、肥前産の大皿、中皿、小皿、なます皿、鉢、蓋物、碗、湯飲み碗、仏飯器や、瀬戸・美濃産の小杯、小碗である。陶器は肥前産の小皿、鉢、徳利、搦鉢や、瀬戸・美濃産の小碗、碗・徳利のほか、堺産の搦鉢、大堀相馬焼の小碗、湯飲み碗である。肥前産の磁器の出土量が大半を占め、全体的に磁器の比率が増加する。瀬戸・美濃産にも磁器が混じりはじめる。用途別では、食膳具が43点、調理具が2点、仏具が3点である。湯飲み碗など喫茶との関連が伺えるものもみられるが、用途の分類が困難なためここでは食膳具として扱った。

19世紀中葉～近代では、産地ごとの出土破片点数は、瀬戸産25点、肥前系12点、肥前産5点、大堀相馬焼2点、小久慈焼2点、東北産2点、不明のもの15点である。磁器は瀬戸・美濃産の大碗、中碗、小碗や肥前産の中皿、鉢、碗蓋、肥前系の小杯、小皿、紅皿、小碗、碗、中碗、東北産の中碗、産地不明の小皿である。陶器は瀬戸・美濃産の搦鉢、徳利、肥前産の徳利、大堀相馬焼の土瓶、小碗、小

久慈焼の小皿、小碗、産地不明の土瓶、土瓶蓋、火入・香炉である。また、瓦質の焜炉・火鉢もみられる。用途別にみると、食膳具が49点、調理具が3点、暖房具が2点、化粧道具が6点、その他が1点、不明のものが2点である。

本遺跡から出土した陶磁器は、肥前産、瀬戸・美濃産のものが多数を占める。それぞれの陶磁器について年代別にみると以下の傾向がみられる。唐津焼や伊万里焼といった肥前産陶磁器は、17世紀中葉から19世紀前葉には出土陶磁器の大半を占める。染付磁器が多い中、17世紀中葉～18世紀前葉には京焼風陶器などがみられるようになる。その後、19世紀中葉になると、出土量は減少し、肥前産の製作技法の流れを汲む肥前系陶磁器が目立つようになる。瀬戸・美濃産陶器は、肥前産陶磁器ほど出土傾向に変化はみられないものの、17世紀中葉以降、年代が下るにつれ増加する傾向にある。18世紀後葉以降、瀬戸・美濃産陶器は次第に減少し、19世紀以降本格的に生産されるようになった瀬戸産磁器が目立ち始める。

用途別にみると、中・近世では一貫して食膳具の占める比率が多く、全体の61.2%を占める。生活雑器がその大半を占める食膳具の中には、17世紀前葉のものと考えられる中国産の皿や17世紀の瀬戸・美濃産の大鉢、18世紀の肥前産大皿などがみられる。中国産の皿については、接合関係や文様から少なくとも複数個体がセットで搬入された可能性が



高い。中国産磁器の生産窯について詳しく言及しないが、素地や呉須などから漳州窯産である可能性が考えられる。肥前産の大皿には焼継がみられ、当時希少品であった大皿を修理し、使用していたことが伺える。ほかにも、15世紀末葉から16世紀にかけての天目碗や肩衝茶入、茶壺などの茶道具がみられる。これら奢侈品・希少品が出土することから、本遺跡の人々の生活水準は、中・近世を通じていわゆる庶民のものよりも高かったことが想定される。

その他特筆する近世遺物として、信仰のあり方を想起させる仏飯器、化粧具である紅皿、漁労に用いられた陶錘、喫煙と関連がある煙管が出土している。今回食膳具として扱ったものの中には徳利や湯飲み碗などがみられることから、茶の湯の大衆化などの影響を受け、飲酒・喫茶の風習が存在していたことが伺える。集落の生業や生活者の階層を特定できる遺物は出土しなかったが、これら出土遺物から、近世以降多様な習俗が本遺跡の生活者の中に浸透していたのであろう。

今回の調査では、上述のように縄文時代から中・近世にかけての集落の様相とその変遷及びそこで生活していた人々の生活様式の一部を明らかにすることができた。一方で、墓域を含む近世における集落の全体像など明らかにできなかった点も多い。今後の良好な資料の増加によって、当該地域における各時代の様相がより具体的に復元できると考える。

(縄文時代～古代・木製品 葛城、中・近世遺構 中村、陶磁器 澤田)

(引用・参考文献)

- 青森県教育委員会 1974『青森県の民家 Ⅰ 概要・南部』青森県民家緊急調査報告書
- 青森県教育委員会 1984『浜通遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第80集
- 青森県教育委員会 1985『大石平遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第90集
- 青森県教育委員会 1986『大石平遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第97集
- 青森県教育委員会 1987『大石平遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第103集
- 青森県教育委員会 1999『櫛引遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第263集
- 青森県教育委員会 2003『岩渡小谷(3)・(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第352集
- 青森県教育委員会 2004『岩渡小谷(4)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第371集
- 青森県教育委員会 2005『通目木遺跡・ふくべ(3)遺跡・ふくべ(4)遺跡』
青森県埋蔵文化財調査報告書第392集
- 青森県教育委員会 2006『近野遺跡Ⅳ』青森県埋蔵文化財調査報告書第418集
- 青森県教育委員会 2008『坪毛沢(1)遺跡Ⅱ・柴山(1)遺跡Ⅱ・大坊頭遺跡・赤平(1)遺跡・
赤平(2)遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第449集
- 青森県教育委員会 2008『長久保(2)遺跡Ⅱ・中居林遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第454集
- 青森県教育委員会 2009『長久保(2)遺跡Ⅲ・糠塚小沢遺跡Ⅱ・中居林遺跡Ⅱ』
青森県埋蔵文化財調査報告書第470集
- 青森県教育委員会 2009『前川遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第475集
- 八戸市教育委員会 1998『八戸城跡Ⅰ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第76集
- 八戸市教育委員会 2002『新井田古館遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第94集
- 八戸市教育委員会 2004『田向遺跡Ⅰ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第105集
- 八戸市教育委員会 2005『是川中居遺跡4 八戸市内遺跡発掘調査報告書20』
八戸市埋蔵文化財調査報告書第107集
- 八戸市教育委員会 2007『八幡遺跡 発掘調査報告書Ⅳ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第115集
- 八戸市教育委員会 2009『田向遺跡Ⅱ』八戸市埋蔵文化財調査報告書第122集
- 弘前市教育委員会 2009『史跡津軽氏城跡 堀越城跡発掘調査報告書X』
- 平賀町教育委員会 1999『大光寺新城跡遺跡』平賀町埋蔵文化財報告書第24集
- 奈良国立文化財研究所 1985『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 史料第27集
- 石田茂作監修 1984『新版仏教考古学講座 第五巻 仏具』雄山閣
- 宇部則保 2002『東北部型土師器にみる地域性』『海と考古学とロマン—市川金丸先生古稀記念献呈
論文集—』市川金丸先生古稀を祝う会
- 榎本剛治 2008『十腕内Ⅰ式土器』『総覧 縄文土器』小林達雄編 総覧縄文土器刊行会
- 大橋康二・西田宏子監修 1988『古伊万里 日本のこころ63』別冊太陽 平凡社
- 大橋康二 1989『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 小保内裕之 2003『信仰の道具』『青森県史 資料編 考古4 中世・近世』
- 小保内裕之 2004『八戸市松ヶ崎遺跡出土の縄文時代中期後半の土器について』『第2回 東北・
北海道の縄文時代中期後半の諸問題 資料集』海峡土器編年研究会

- 葛西勲 2006『続・再葬土器棺墓の研究—切断蓋付土器と子供の再葬を考える—』
再葬土器棺墓の研究刊行会
- 可見通宏 2008『縄文の施文原体と文様』『総覧 縄文土器』
小林達雄編 総覧縄文土器刊行会
- 草野和夫 1993『東北民家史研究』中央公論美術出版
- 工藤清泰 2003「中世の陶磁器と変遷」『青森県史 資料編 考古4 中世・近世』
- 工藤竹久 2005「青森県の弥生土器」『青森県史 資料編 考古3 弥生～古代』
- 櫻木晋一 2009『貨幣考古学序説』慶応義塾大学出版会
- 下中直人 2000『増補 やきもの事典』平凡社
- 鈴木克彦 2001『北日本の縄文後期土器編年の研究』雄山閣
- 関根達人 2003「近世の陶磁器とその変遷」『青森県史 資料編 考古4 中世・近世』
- 関根達人・西沢宏子 2007「十三湊遺跡の近世陶磁器」『津軽十三湊遺跡—中世前期港湾施設の調査
第157次調査ほか—』中央大学文学部日本史学研究室埋蔵文化財調査報
告書第1集
- 高島成侑・三浦忠司 1983『南部八戸の城下町 むかしのはちのへを偲んで』伊吉書院
- 高橋與右衛門 1989「掘立柱建物跡の間尺と時代性—民家の間尺と比較して—」『岩手県文化振興
事業団埋蔵文化財センター 紀要Ⅹ』
- 竹田聰洲 1994『葬史と宗史 竹田聰洲著作集第七巻』国書刊行会
- 成田滋彦 1989「入江・十腰内土器様式」『縄文土器大観 4 後期・晩期・続縄文』小学館
- 成田滋彦 2003「十腰内Ⅰ式土器とは」『第1回 東北・北海道の十腰内Ⅰ式再検討資料集』海峡
土器編年研究会
- 星雅之・茅野嘉雄 2006「十和田中掘テフラからみた円筒下層a式土器成立期の土器様相」『植生
史研究特別第2号 三内丸山遺跡の生態系史』日本植生史学会
- 藤沼邦彦・関根達人 2008「亀ヶ岡式土器（亀ヶ岡式系土器群）」『総覧 縄文土器』小林達雄編
総覧縄文土器刊行会
- 四柳嘉章 2006『漆Ⅰ』法政大学出版局
- 四柳嘉章 2006『漆Ⅱ』法政大学出版局

附穴住居群一覧

調査号	遺構番号	グリッド	確認法	平面形	開口部規模(m) 長軸×短軸×高さ	面積(m ²)	出土遺物	時期	備考
0631	3	0E-11-13	掘	楕円形	(148×45)×79	7.5	縄文土器	不詳	表生 合計 長862×幅1000cm面積3.6㎡
067	6	0E-1-19	掘	円形	282×279×83	4.5	縄文土器	不詳	
068	7	0E-M-34	IV	楕円形	300×216×49	4.5	縄文土器, 削片石器	縄文	
069	8	0E-21	IV	楕円形	283×(190)×52	(3.0)	縄文土器	縄文	
070	9	0E-1-23	掘	不詳	259×(177)×60	6.43	縄文土器, 削片石器, 礎石器, 土製品	縄文	SK11<
0713	10	0E-27-28	IV	不詳	(387×(502)×29)	(19.5)	縄文土器, 削片石器	縄文	
0714	11	0E-6-26	掘	楕円形	(283)×296×49	(5.2)	縄文土器, 礎石器	縄文	
0734	12	0E-35	掘	方形?	(303)×(130)×53	(3.0)	縄文土器, 土製品	古代	
0735+36	13	0E-26+27	掘	方形	466×438×75	(19.5)	縄文土器, 土製品, 削片石器, 礎石器	縄文	
0738	14	0E-26+27	V	方形?	(199)×(175)×37	(3.2)	縄文土器, 土製品	古代	
0763	15	0E-32+33	VI	方形?	不詳	不詳	縄文土器	不詳	SK13に復元
0764	16	0E-33	掘	方形?	不詳	不詳	縄文土器	不詳	
0768	17	0E-24+25	IV	方形?	(206×(212)×33)	(3.1)	土製品, 土製品	古代	

上表一覽 中継発掘数148基の内、整理時に現代のものと同断したもの及び土厚ではないと判断したものは欠番とした。

調査号	遺構番号	グリッド	確認法	平面形	開口部規模(m) 長軸×短軸×高さ	面積	出土遺物	時期	備考
0669	27	0E-23	V	楕円形	89×70×14			不詳	
0675	28	0E-29	IV	円形	86×75×44		縄文土器	縄文	
0699	30	0E-1+8	IV	円形	65×59×19		縄文土器	不詳	
0699	31	0E-17	掘	不整形	(91)×(66)×24	SK12<	土製品	不詳	
0699	32	0E-17	掘	方形	(91)×(59)×30	SK13>	縄文土器	不詳	
0699	33	0E+H-14	掘	円形	108×101×35			不詳	
0699	35	0E-20+21	掘	円形	71×63×16			不詳	
0699	36	0E-21	掘	円形	68×60×13			不詳	
0699	37	0E-21	掘	円形	102×101×29			不詳	
0699	38	0E-22	掘	円形	64×60×15			不詳	
0699	39	0E-22	掘	楕円形	63×52×17			不詳	
0699	40	0E-22	掘	円形	77×74×15			不詳	
0699	41	0E-14	IV	円形	69×64×31			不詳	
0699	42	0E-14+15	IV	楕円形	107×73×31			不詳	
0699	43	0E-15	IV	方形	28×75×32			不詳	
0699	44	0E-15	IV	方形	71×63×31			不詳	
0699	45	0E-15	IV	不整形	70×53×28			不詳	
0699	46	0E-15+16	掘	円形	66×65×24			不詳	
0699	47	0E-15	掘	楕円形	97×79×34			不詳	
0699	50	0E-20	掘	楕円形	79×65×12			不詳	
0670	51A	0E+N-21	掘	円形	(90)×(93)×26	SK16<		不詳	
0670	51B	0E+N-21	掘	方形?	(95)×(87)×26	SK17>		不詳	
0671	53	0E-14	掘	円形	84×82×16			不詳	
0671	54	0E-14	IV	楕円形	116×62×24			縄文	
0671	55	0E-15	IV	円形	87×83×64			縄文	地層中
0670	56	0E-15	IV	方形	69×64×40			不詳	
0670	57	0E-15	IV	円形	86×43×26			不詳	
0670	58	0E-15	IV	方形	60×56×23			不詳	
0671	59	0E-1+15	IV	円形	113×103×37			不詳	
0671	60	0E-15	IV	円形	101×90×49		縄文土器	縄文	
0670	61	0E-17	掘	楕円形	96×72×17			不詳	
0670	62	0E-16	IV	円形	57×53×25			不詳	
0671	63	0E-15	掘	円形	94×93×50			縄文	
0671	64	0E-16	IV	円形	103×89×11			縄文	
0671	68	0E-15	IV	楕円形	115×95×39			縄文	
0671	69	0E-15	IV	円形	119×104×55			縄文	
0670	71	0E-21	掘	円形	54×52×15			不詳	
0671	72	0E-15	掘	円形	109×102×34			縄文	
0670	76	0E-21	掘	方形	59×44×23	SK77<		不詳	
0670	77	0E-21	掘	円形	(79×(71)×16)	SK76>		不詳	
0670	78	0E-22	掘	不詳	(72×(26)×14)	SK79>		不詳	
0670	79	0E-22	掘	円形	90×68×17	SK78>		不詳	
0671	81	0E-16	IV	円形	153×134×105			縄文	遺跡に小ピット
0674	84	0E-15	IV	円形	111×105×47			縄文	
0670	85	0E-13	掘	不整形	57×45×29			不詳	
0670	87	0E-16	IV	円形	82×70×26			不詳	
0670	88	0E-18	掘	円形	43×41×28			不詳	
0670	89	0E-16	掘	方形	(113)×(100)×23	SK90>		不詳	
0670	90	0E-16	掘	楕円形	(161)×(90)×24	SK89<		不詳	
0674	91	0E+T-27	V	方形	121×113×40		縄文土器	不詳	
0670	94	0E-23	掘	円形	29×76×12			不詳	
0674	96	0E-28	IV	円形	86×85×61			縄文土器	
0670	99	0E-24	掘	円形	72×65×16			縄文土器	
0670	101	0E+N-23	掘	円形	71×70×17			不詳	
0674	103	0E-22	掘	方形	112×89×74		縄文土器	縄文	
0670	106	0E-23	掘	円形	74×61×13			不詳	
0671	107	0E-24	掘	方形	86×89×28			縄文	
0671	109	0E-24	掘	円形	73×69×29		縄文土器	不詳	
0671	110	0E-24	掘	長方形	91×65×14			不詳	
0674	111	0E-25	掘	円形	(40)×50×20	SK12>		縄文	
0674	112	0E-25	掘	長方形	75×62×10	SK11<		縄文	
0674	113	0E-0-28	IV	円形	101×73×66			不詳	
0674	114	0E-24	V	円形	92×96×54			縄文	遺跡に小ピット
0671	115	0E-33	IV	楕円形	(97)×(80)×68	SK19>		不詳	
0674	116	0E-27	IV	不整形	126×91×49		削片石器	縄文	
0671	117	0E-26	V	方形	108×91×13			不詳	
0671	118	0E-29	X	円形	(91)×(67)×20			不詳	
0671	120	0E+K-30	X	長方形	133×103×66			不詳	

中居林道跡Ⅱ

図番号	遺構番号	グリッド	確認面	平面形	開口部規模(m) 長軸×短軸×高さ	遺残	出土遺物	時期	備考
図71	121	CP-30	IX	円形	88×77×14			不明	
図71	123	CT-29	VI	円形	89×79×24			不明	
図71	124	BS-B-33	VI	円形	130×114×25			不明	直面に小ピット
図71	125	CS-30	VI	円形	90×79×35			不明	
図71	126	CS-29	VI	不整形	81×71×84			不明	
図71	127	CS-F31+32	VI	円形	69×62×46			不明	
図71	128	CS-31	VI	方形	137×121×41			不明	
図72	130	CS-31	VI	円形	185×176×41			不明	
図76	131	BQ-35	IV	円形	135×130×122		縄文土器、削片石器、礫石器	縄文	
図76	132	BQ-28	IV	楕円形	109×77×41			不明	
図77	133	BQ-E-25	IV	円形	123×114×89			縄文	直面に小ピット
図77	135	CP-33	IX	方形	67×62×46			不明	
図77	136	CP-30+31	IX	長方形	180×143×25		縄文土器	不明	
図77	137	CP-30	IX	方形	36×30×46			不明	
図77	138	CP-30	IX	楕円形	118×97×42		縄文土器、陶磁器、土師器	近世 19c 中	
図77	140	CS-30	X I	不整形	113×100×20	3841<		不明	
図77	141	CS-30	X I	不整形	66×38×47	3849>		不明	
図77	143	CS-32	X I	円形	71×66×53			不明	
図77	145	BQ-F-23+24	Ⅱ	円形	1153×1100×113		古銭、博覧	不明	近世遺の可能性有
図77	146	CS-34	X I	円形	150×142×37			不明	
図77	147	CP-33-34	X I	円形	806×653×78		石製品、礫石器	不明	
図77	148	CT-33	VI	円形	79×78×36			不明	
図77	152	CS-32	X I	円形	95×87×31		土製品	不明	
図77	155	CS-32	X I	円形	91×88×22			不明	
図77	160	CP-33	X I	円形	60×58×61		陶磁器	近世 19c	
図77	164	BQ-25+26	IV	円形	77×36×16		縄文土器	不明	
図77	165	BQ-26	IV	楕円形	159×127×62			縄文	
図77	167	CT-36+37	VI	円形	1130×1077×41			不明	
図77	170	CS-28+29	X	方形	1128×1143×22	3847<		近世	
図77	171	CS-28+29	X	長方形	1720×1080×23	3849>	陶磁器	近世 18c	
図77	172	CT-28	X	方形	136×86×20			不明	

遺構土器一覧

図番号	遺構番号	グリッド	確認面	平面形	開口部規模(m) 長軸×短軸×高さ	遺残	出土遺物	時期	備考
図77	1	BF-35+36	IV	溝状	300×23×60	386>	縄文土器	縄文	

遺跡一覧

図番号	遺構番号	グリッド	確認面	平面形	開口部規模(m) 長軸×短軸×高さ	遺残	出土遺物	時期	備考
図74	1	BJ-30~BJ-30	VI	直線状	1540×108×79	武2	縄文土器	不明	
図74	2	AW-12~AW-13	Ⅱ	直線状	1583×73×35			不明	
図74	3	BT-22~BT-23	Ⅲ	直線状	1472×41×76		縄文土器、礫石器	不明	
図74	4	BJ-34~BJ-35	Ⅲ	直線状	1730×136×16		縄文土器、土師器	不明	
図74	5	BF-35~BF-37	IV	直線状	1712×95×98	391<	縄文土器、削片石器	不明	
図75	6	BF-26~BF-29	IV	直線状	11449×127×97		縄文土器、礫石器	不明	
図75	7	BS-35~BS-36	IV	直線状	1610×72×29			不明	
図75	8	BS-35~BS-36	Ⅲ	直線状	789×172×112	3910<	縄文土器、土師器、礫石器	不明	
図75	9	BQ-32~BQ-33	VI	直線状	6921×84×36		縄文土器	不明	
図76	10	BS-32~BS-33	V	直線状	728×64×13	3926>	縄文土器、礫石器	不明	
図76	11	BF-32~BF-33	V	直線状	1412×60×15			不明	
図76	12	BF-32~BF-33	V	直線状	867×43×96			不明	
図76	13	CC-27~CC-28	X	直線状	1963×89×35			不明	
図76	14	CS-25~CC-27	X	直線状	11281×54×43		縄文土器	不明	
図76	15	CS-28~CC-27	IX	直線状	1489×85×69		縄文土器、土師器	不明	
図49~53	16	CT-36~CK-27	IX	直線状	18741×489×143		縄文土器、土師器、石製品、木製品、礫石器	近世	
図76	17	CK-29~CL-29	X	直線状	1590×45×11			不明	
図76	18	CP-28~CL-28	X	直線状	112841×152×95			不明	
図77	19	CP-28~CL-34	X	直線状	1226×51×45			不明	
図77	20	CP-28~CL-34	X	直線状	394×100×16			不明	
図77	21	CP-27	Ⅱ	不明	1157×117×75		縄文土器	不明	

付録一

空堀輪出(1)Ⅱの内外、現代のものと同様したものは、穴は穴を止めた。

図番号	遺構番号	グリッド	確認面	平面形	開口部規模(m) 長軸×短軸×高さ	遺残	出土遺物	時期	備考
-	1	CB-32	IX	円形	96×9×不明		縄文土器、陶磁器	不明(近世?)	
-	4	CD-30	IX	円形	100×180×不明		縄文土器、陶磁器	不明(近世?)	
図77	11	CD-27	V	円形	84×92×不明		縄文土器	不明(近世?)	

出土遺構一覧

図番号	遺構番号	グリッド	確認面	平面形	開口部規模(m) 長軸×短軸×高さ	遺残	出土遺物	時期	備考
図77	17	BL-20	Ⅱ	不整形円形	69×37×13			不明	

出土不明遺構一覧

図番号	遺構番号	グリッド	確認面	平面形	開口部規模(m) 長軸×短軸×高さ	遺残	出土遺物	時期	備考
図47	5	CL-32	VI	長方形	561×143×36		陶磁器	近世 19c	

図一

図番号	遺構番号	グリッド	確認面	平面形	開口部規模(m) 長軸×短軸×高さ	遺残	出土遺物	時期	備考
図49~52	武1	CB-A1~26~30	IX	直線状	17480×770×114	SD15 16・18>	縄文土器、石器、土師器、鉄製品、木製品、古銭、博覧、陶磁器	縄文	
図54	武2	BL-L1~29~30	VI	直線状	12210×470×224	SD1	縄文土器、石器、赤土土器、土師器、木製品	縄文	近世?

構文土設備標準

図番号	土上位置	層位	設備	残存部位	特徴		型式・時期	備考
					外面	内面		
図7-1	S16	3層 階床上	深鉢	口縁部 →底面	単面R横河	ナデ 輪縁直	後期後葉～後期	口径30.0cm、器高34.7cm、底径9.4cm、 口縁部に輪付孔2個、外縁接合、P1 ～31・34～36・40～43・45～56・58 ～64
図7-2	S16	階床上	深鉢	口縁部	復面R横河	ナデ	後期	
図7-3	S17	床面直上・1・1階 階上	深鉢	口縁部	単面R横河、曹内構文	ナデ	最古式～大木10式並行	輪付孔1個、P2
図7-2	S17	階床上	深鉢	口縁部	単面直方型(無彫刻)、口唇部面取り	ナデ	後期初期	
図7-3	S17	階床上	深鉢	口縁部	ミガキ	ミガキ	後期	口縁部底厚
図7-4	S17	階床上	鉢	口縁部	無彫(縦河・横河)、口縁部に段差	ナデ	後期初期	
図7-5	S17	階床上	鉢	口縁部	無彫、口唇部面取り、単面Rナ	ナデ	後期初期	
図7-6	S17	床面直上	深鉢	口縁部	単面R横河、口唇部面取り	ナデ	後期	外面に埋付着、P19
図7-7	S17	階床上	深鉢	口縁部	無彫横河	ナデ	後期	P3
図7-8	S17	階床上	深鉢	無彫	単面R横河	ナデ	後期	P17
図7-9	S17	階床上・床面直上	深鉢	無彫	単面R横河・縦河	ナデ	中期後葉～末葉	外面に埋付着、海路管射機兼器入、P 10・15
図7-10	S17	階床上	深鉢	無彫横河	ナデ	中期後葉～後期初期		
図7-11	S17	床面直上	深鉢	無彫	単面R横河、曹内相注(無彫刻)	ナデ	内面1層木式	P18
図7-12	S17	床面直上	鉢	無彫	単面R(多葉) 洗滌文	ナデ	後期木式	外面に埋付着、P25
図7-13	S17	1階・2階 階上	深鉢	無彫	単面R横河	ナデ	後期初期	外面に埋付着、金盃型中量器入
図7-14	S17	階床上	鉢	底面	単面R横河	ナデ	後期	底径7.9cm
図7-1	S18	階床上・ 1・1階	兼	無彫	ミガキ、洗滌文、穿孔1個	ミガキ	後期初期	無彫最大径17.3cm
図7-11	S19	床面・火床 面直上・階床上・ 目・1階	深鉢	完形	単面R横河(一部結節)	ナデ	後期初期～中葉	口径21.6cm、器高26.4cm、底径8.7cm、 外面彫刻に上り垂葉、P163～167・ 169・170・172～175・183・185
図7-12	S19	3層・床下・ 階床上下層・目層	深鉢	口縁部 →側面	段状口縁、洗滌文、ナデ、単面R横河	ナデ 輪縁直	後期初期	口径25.4cm、海路管射機入、内外面 に埋付着、縦河に上り外面彫刻・垂 葉、外縁接合、P68・69・71・72・ 81・136・137・154
図7-13	S19	階床上・ 目・1階	深鉢・鉢	口縁部	段状口縁、洗滌文(前突列)、内面に横状 突起付付く横状突起、ミガキ	ナデ	後期初期	海路管射機入、P34
図7-14	S19	階床上	深鉢	口縁部	洗滌文、口唇部面取り、ナデ	ナデ	後期初期	P17
図7-15	S19	階床上下層	深鉢	口縁部	段状口縁、洗滌文、洗滌器、ミガキ	ミガキ	十層内1式	P27
図7-16	S19	SK1 6層・階床 上・SK2 階床上	深鉢	口縁部	単面R横河	ナデ	中期後葉～後期初期	口径29.4cm、口縁部直下に輪付孔 1個、外縁接合、海路管射機兼器入
図7-17	S19	SK1 階床上	深鉢	口縁部	単面R・無彫(異葉) 横河、射り返し 口縁	ナデ	中期後葉～後期初期	海路管射機入
図7-18	S19	階床上下層・階床 上・床面・SK1 2・3層 階床上	深鉢	無彫	連結溝管文、洗滌文、無彫横河	ナデ	後期初期	P97・66・118・123～125・128・ 129・131～133・142～147・149
図7-19	S19	床面直上	深鉢	無彫	曹内構文、単面R横河	ナデ	中期後葉～後期初期	
図7-10	S19	床面	深鉢ナ	無彫	洗滌文、ナデ	ナデ	中期後葉～後期初期	海路管射機兼器入、P33
図7-11	S19	3層・階床上	深鉢	無彫	洗滌文に上り樹木文様	ナデ	後期初期	P99・107
図7-12	S19	SK1 3層	深鉢	無彫	洗滌文、ナデ	ナデ	後期初期	P93
図7-1	S19	3・6層・階床 上・階床上下層・ 目・1階	深鉢	無彫	(一部結節)	ナデ	中期後葉～後期	縦河に上り無彫外面彫刻、内外面 に埋付着、外縁接合、P9・10・17・19・ 21・26・38・39・44・46・86・87・ 90・108・109・180
図7-2	S19	3層・階床上下層	深鉢	無彫	単面R横河	ナデ	中期後葉～後期	外縁接合、P104・74・108～110
図7-3	S19	3層・階床上下層・ 床面・SK1 階床上	深鉢	無彫	単面R横河	ナデ	中期後葉～後期	底径10.4cm、内面に埋付着、外縁接 合、P78・130・161・171
図7-4	S19	3層・階床上下層 SK1 階床上	深鉢ナ	無彫	洗滌文、ナデ	ナデ	最古式～大木10式並行	P64・135
図7-5	S19	3層	深鉢	無彫	単面R横河(多葉)	ナデ	中期後葉～後期	海路管射機兼器入、内面に埋付着、外縁接 合、P118
図7-1	S110	床面直上	口縁部	無彫文、洗滌文、ナデ	ナデ	最古式～大木10式並行		
図7-2	S110	確認面	深鉢・鉢	口縁部	曹内構文、単面R横河、口唇部面取り	ミガキ	後期初期	海路管射機入
図7-3	S110	床面直上	深鉢	口縁部	単面R横河	ナデ	中期後葉～後期	海路管射機兼器入、P16
図7-4	S110	確認面	深鉢	口縁部	口縁部洗滌文、洗滌文、単面R横河	ナデ	最古式～大木10式並行	ミガキ多量器入
図7-5	S110	確認面	深鉢	口縁部	段状口縁、洗滌文、単面R横河・縦河	ナデ	後期初期	口径28.3cm、内面彫刻
図7-6	S110	確認面	深鉢	口縁部	洗滌文、射り直し突起、口唇部面取り	ナデ	後期初期	海路管射機多量器入
図7-7	S110	確認面	深鉢	口縁部	単面R横河(結節)	ナデ	中期後葉～後期中葉	外縁接合
図7-8	S110	確認面	深鉢	口縁部	単面R横河	ナデ	中期後葉～後期中葉	
図7-9	S110	確認面	深鉢	口縁部	単面R横河	ナデ	中期後葉～後期中葉	
図7-10	S110	確認面	深鉢	口縁部	曹内構文、洗滌文、洗滌器、単面R横河・ 横河、ナデ	ナデ	後期初期	
図7-11	S110	確認面	深鉢	口縁部	単面R横河	ナデ	中期後葉～後期中葉	P9・10
図7-12	S110	確認面	深鉢	口縁部	単面R(多葉) 横河	ナデ	中期後葉～後期中葉	内外面に埋付着
図7-13	S110	確認面	鉢	無彫	人組洗滌文、ミガキ	ミガキ	十層内1式	外面彫刻、海路管射機兼器入
図7-14	S110	確認面	深鉢	無彫	曹内構文、単面R横河・横河、ナデ	ナデ	後期初期	
図7-15	S110	1層・確認面	深鉢・鉢	無彫	洗滌文、ナデ	ナデ	中期後葉～後期初期	
図7-16	S110	1層・確認面・床 面	深鉢	口縁部	単面R(多葉) 横河	ナデ	中期後葉～後期	底径18.1cm、内外面に埋付着、海路 管射機兼器入、P1～6・26～29

中層林道調査

図号	出土位置	層位	器種	残存部位	特徴		型式・時期	備考	
					外周	内面			
図13-18	S109	確認面・底面・堆積土	深鉢	底面	卑部&底面		ナブ	中期～後期	直径6.2cm, 外面微熱により赤変, 内面漆喰付着, P21
図14-1	S111	底面&・印体	深鉢	口縁部～底面	突起, 卑部&底面(一部結晶?)		ナブ	後期中葉～後期	口径23.9cm, 内外面に漆喰着, 微熱により赤変
図14-2	S111	1層	深鉢	口縁部	卑部&底面		ナブ	中期後葉～後期	外面に漆喰着, 海面會對面器人
図18-1	SK28	堆積土	深鉢	卑部	卑部&底面		ナブ	中期後葉～後期	内面に漆喰着
図18-2	SK69	堆積土	深鉢	卑部	卑部&底面		ナブ	中期後葉～後期	
図18-3	SK91	堆積土	深鉢	卑部	卑部&底面		ナブ	中期後葉～後期	内面に漆喰着, 赤結晶
図18-5	SK96	堆積土	深鉢	口縁部	卑部&底面, 輪縁部		ナブ	中期後葉～後期	
図18-6	SK96	堆積土	深鉢・鉢	卑部	浅鉢, ナブ		ナブ	後期初期	
図18-7	SK96	堆積土	深鉢	卑部	卑部&底面(結晶)		ナブ	中期後葉～後期	
図18-9	SK131	2層・堆積土	深鉢	口縁部	口唇部面取り, 口縁部に無文書, 下層で浅鉢(寸法5.5×底文4単位, 卑部&底面)		ナブ	最古式～大木10式並行	口径21.3cm, 内外面に漆喰着, 微熱により赤変
図18-10	SK131	確認面	鉢	口縁部	沈流, ミガキ		ミガキ	後期初期	
図18-11	SK131	堆積土	深鉢・鉢	口縁部	折り返し口縁, 無彫&横周		ナブ	中期後葉～後期	赤結晶
図18-12	SK131	確認面	鉢	卑部	沈流文, ナブ		ナブ	十層内1式	外面赤変
図18-13	SK131	堆積土	深鉢	口縁部	沈流文, ミガキ		ナブ	十層内1式	内面漆喰着
図18-14	SK131	確認面・1・目層	深鉢	口縁部	卑部&底面(結晶)		ナブ	中期後葉～後期初期	口径17.8cm, 器高24.5cm, 底径8.4cm, 外面微熱により赤変, 内外面に漆喰着, 海面會對面器人
図18-15	SK131	2層・堆積土・確認面	深鉢	口縁部～底面	卑部&底面		ナブ	中期後葉～後期初期	口径28.7cm, 器高49.9cm, 底径16.9cm, 外面口縁部付着微熱により赤変・赤結晶, 内外面に漆喰着
図18-16	SK131	堆積土	深鉢・鉢	底面	卑部&底面		ナブ	後期小	外面に漆喰着
図18-19	S11	堆積土	深鉢	底面	沈流, 微熱着, 卑部&底面		ナブ	後期小	外面に漆喰着
図23-1	遺構外	RP-21・22, R1・目層	深鉢	口縁部	卑部&底面, 浅鉢, 結束第1種(卑部&底面)		ナブ	内層上層4式	外面に漆喰着, 口縁部に黒結晶3個
図23-2	遺構外	RP-24, RP-19, R1・目層	深鉢	口縁部	底文突起(卑部&底面), 卑部&底面, 浅鉢, 結束第1種(無彫)		ナブ	内層下層4式	
図23-3	遺構外	RP-30 目層	深鉢	口縁部	浅鉢(無彫&横周), 底文突起(卑部&底面)		ナブ	内層上層1式	海面會對面器人
図23-4	遺構外	RP-22・23 目層・カクラン	深鉢	卑部	浅鉢, 卑部&底面		ナブ	内層上層4式	
図23-5	SP109	堆積土	深鉢	卑部	底文文, 遺跡陶文, 卑部&底面		ナブ	最古式～大木10式並行	内外面赤変
図23-6	遺構外	RP-13 目層・粗面	深鉢	卑部	浅鉢(粗面), 卑部&底面		ナブ	後期初期	内外面赤変
図23-7	遺構外	R1-29 目層	深鉢	口縁部	口唇部面取り, 浅鉢文, ナブ		ナブ	後期初期	
図23-8	遺構外	RP-27 目層	深鉢	卑部	浅鉢文, ナブ		ナブ	後期初期	
図23-9	遺構外	RP-29 カクラン	深鉢	口縁部	底文口縁, 浅鉢(卑部&底面), ミガキ突起		ナブ	後期初期	
図23-10	遺構外	RP-34 堆積土上層	深鉢?	卑部	卑部&底面, ミガキ突起, 沈流文		ナブ	後期初期	
図23-11	遺構外	R1-35 目層	深鉢・鉢	口縁部	底文口縁, 浅鉢(粗面), ミガキ突起		ナブ	後期初期	海面會對面器人
図23-12	遺構外	RP-31 目層	深鉢	卑部	浅鉢, 卑部&底面, 底文竹管文		ナブ	後期初期	赤結晶
図23-13	遺構外	R1-10・12, R1-12 目・粗面	深鉢	口縁部～底面	底文口縁, 折巻口縁, 口唇部面取り, 赤消陶文, 卑部&底面(口縁部・横周・底面)		ナブ	後期初期	口径20.3cm
図23-14	遺構外	RP-18 目層	深鉢・鉢	卑部	赤消陶文?, 無彫&横周		ナブ	後期初期	内面に漆喰着, 赤結晶
図23-15	遺構外	RP-33 目層	深鉢	卑部	赤消陶文, 卑部&底面, 微熱着		ナブ	後期初期	外面漆喰付着, 赤結晶
図23-16	遺構外	CP-29 カクラン	深鉢	口縁部	底文口縁, 浅鉢文, 赤消陶文, 無彫&横周・横周		ナブ	後期初期	
図23-17	遺構外	R1-23 目層	深鉢	口縁部	底文口縁, 粗面突起, 沈流文, 卑部&底面		ナブ	後期初期	
図23-18	遺構外	RQ-35 目層	深鉢	口縁部	口唇部面取り・沈流, 粗面突起, 沈流文		ナブ	後期初期	
図23-19	遺構外	RP-34 目層	深鉢	口縁部	底文口縁, 折巻, 粗面突起, 沈流文, 無彫&横周		ナブ	後期初期	海面會對面器人
図23-20	遺構外	RP-26 目層	鉢?	口縁部	口唇部面取り, 折り返し口縁, 赤消陶文, 卑部&底面		ナブ→ミガキ	後期	内面に漆喰着, 海面會對面器人
図24-1	遺構外	RP-24 目層	深鉢	卑部	浅鉢, 赤消陶文, 卑部&底面		ナブ	後期初期	内面に漆喰着, 赤結晶
図24-2	遺構外	RP-26, RP-26・27, RP-26・27 目層	深鉢	口縁部～底面	底文口縁, 口縁部隆起, 沈流文, ナブ		ナブ	十層内1式	口径20.1cm, 器高28.4cm, 底径18.8cm, 外面漆喰付着, 微熱により赤変・赤結晶
図24-3	遺構外	RP-35 目層	深鉢	口縁部	底文口縁, 沈流文		ナブ	十層内1式	内外面漆喰着, 赤結晶
図24-4	遺構外	RP-34 カクラン	鉢	口縁部	底文口縁, 微熱着, 沈流文		ナブ	十層内1式	口径7.5cm, 器高6.8cm, 底径3.8cm
図24-5	遺構外	RP-9 目層・粗面	鉢	口縁部～底面	無彫文, ナブ		ナブ	十層内1式	口径13.7cm
図24-6	遺構外	RP-24 目層	深鉢・鉢	口縁部	口唇部面取り, 沈流文, ナブ		ナブ	十層内1式	
図24-7	S112	3層	深鉢・鉢	口縁部	口唇部面取り, 沈流文, ナブ		ナブ	十層内1式	
図24-8	遺構外	CP-31 1・目層	深鉢	口縁部	口唇部面取り, 沈流文, ナブ		ナブ	十層内1式	内外面に赤変, 赤結晶多い
図24-9	遺構外	R1-21, R1-21, RP-21・22・23 目層	深鉢	卑部	沈流文, ナブ		ナブ	十層内1式	海面會對面器人
図24-10	遺構外	CP-29 カクラン	鉢	卑部	沈流文, ナブ, 微熱着		ナブ	十層内1式	海面會對面器人, 赤結晶
図24-11	遺構外	RP-33, RP-35 目層	深鉢	口縁部	口唇部面取り, 沈流文, ナブ		ナブ	十層内1式	口径16.0cm, 器高5.9cm, 底径3.2cm, 海面會對面器人, 外縁結晶
図24-12	遺構外	RQ-35 目層	浅鉢	口縁部	沈流文, ミガキ		ミガキ	十層内1式	海面會對面器人, 赤結晶
図24-13	遺構外	RP-29 目層	鉢?	卑部	沈流文, ミガキ		ミガキ	十層内1式	海面會對面器人
図24-14	遺構外	RP-33, RP-35 目層	浅鉢	口縁部	赤消陶文, 卑部&底面, ミガキ		ミガキ	十層内1式	
図24-15	遺構外	RP-27 目層	浅鉢	口縁部	赤消陶文, 無彫&横周, ミガキ		ミガキ	十層内1式	海面會對面器人
図24-16	遺構外	RP-31 目層	鉢	口縁部～底面	ナブ		ナブ	後期	口径16.0cm, 器高5.9cm, 底径3.2cm, ミニチュア土器小

図番号	出土位置	層位	器種	発出部位	特徴		型式・時期	備考
					外面	内面		
0224-17	遺構外	RJ-16 日層	鉢	口縁部へ底面	指頭は直	指頭は直	後期	口径8.9cm, 高さ7.3cm, 底径4.6cm, 平径なし
0225-1	遺構外	R1-21, R1-21B, R1-22・23 I・II 層	壺	胴部	沈線文, ミガキ	ケズリナデ	十層内1式	
0225-2	遺構外	R0-21・22 日層	壺?	胴部	沈線文, ナデ	ナデ	十層内1式	鉢の可能性もあり
0225-3	遺構外	カタラン	深鉢	胴部	滑らかな面取り, 単線L線回	ナデ	後期中業～後葉	
0225-4	遺構外	R0-15 日層	壺	口縁部	縁部, 底穴切筋	ケズリ	十層内1式	
0225-5	遺構外	深鉢	壺	口縁部	ナデ, 輪縁部	ナデ	後期	口径11.3cm, ミニチュア土器か
0225-6	遺構外	R0-18 日層	壺	胴部	沈線文, ミガキ切筋	ケズリ	十層内1式	切筋部
0225-7	遺構外	R0-28 カタラン	壺?	胴部	沈線文, ミガキ	ケズリ	十層内1式	外縁結合
0225-8	遺構外	R1-35 日層	深鉢	口縁部	口唇部面取り, 滑らかな面取り, 口縁部無文, 平行沈線文, 単線L線回(多葉)	ナデ	十層内1式	内外面に付着付
0225-9	遺構外	R1-22 日層	深鉢	口縁部	大型突起(内面込み), 縁部, 単線L線回	ナデ	十層内1式	外面熱熱により赤変, 海溝部付着量多量
0225-10	遺構外	R1-19 日層	鉢	口縁部	口唇部面取り・沈線, 滑らかな面取り, 沈線文, 底穴切筋, ミガキ	ミガキ	後期中業～後葉	
0225-11	遺構外	R0-14, R0-13 I・II 日層	壺	胴部	ケズリナデ	ケズリ	後期	胴部最大径7.0cm
0225-12	S09	堆積土	鉢	口縁部	口唇部面取り, 沈線文, 単線L線回	ナデ	後期中業	
0225-13	遺構外	R0-12 日層	鉢	口縁部	口唇部小全面取り, 沈線, ナデ	ナデ	後期中業	海溝部付着量多量
0225-14	S12	堆積土	鉢	口縁部	単線L線回, 沈線文	ナデ	後期初期	口
0225-15	S2109	堆積土	鉢	胴部	沈線文	ナデ	十層内1式	
0225-16	遺構外	R0-20 日層	鉢・浅鉢	口縁部	山吹突起, 三叉文	三叉文ナデ	大穴C2式～A式	
0225-17	遺構外	R1-35 日層	付付丸鉢・浅鉢	台座	下部に沈線, ミガキ	ミガキ	後期中業～後葉	長頸部の可能性あり
0225-18	遺構外	R0-13 日層	壺	胴部	下字文, 単線L線回	ナデ	大穴A式	
0225-19	遺構外	R0-32・34 日層・II 日層	深鉢	口縁部へ胴部	口唇部小全面取り, 単線L線回	ナデ	中期後葉～末葉	
0225-20	S08	R0-35 堆積土	深鉢	口縁部へ胴部	結束部2種? (無彫) 線回	ナデ	中期後葉～末葉	口径12.0cm, 外面熱熱, 外縁結合, 海溝部付着量多量
0225-21	遺構外	R0-20 日層	深鉢	口縁部	単線L線回	ナデ	中期後葉～後期初期	内外面付着付, 滑らかな面取り, 外縁結合
0225-22	遺構外	R0-27 カタラン	深鉢	口縁部	単線L線回, 結束部2種(単線L・L線)	ナデ	中期後葉～後期	外面に付着付, 外縁結合
0225-23	遺構外	R0-26 II・III 日層	深鉢	口縁部	斜り返し, 口縁, 口唇部面取り, 単線L線回	ナデ	中期後葉～後期	海溝部付着量多量
0226-1	遺構外	RJ-13 II・III 日層	深鉢	口縁部	単線L線回	ナデ	後期初期～中業	口径19.7cm, 高さ9.6cm, 底径3.9cm, 外面熱熱により赤変・滑らかな面取り, 外縁結合
0226-2	遺構外	R0-35, R0-34 日層	深鉢	口縁部へ底面	単線L (口縁部・横回, 胴部) 線回	ナデ	後期初期～中業	口径25.3cm, 高さ33.9cm, 底径10.1cm, 内外面付着付, 外縁結合
0226-3	遺構外	R0-28 カタラン	深鉢	口縁部へ胴部	口唇部小全面取り, 単線L線回(風葉)	ナデ	中期後葉～後期	海溝部付着量多量, 外面付着付
0226-4	遺構外	R0-34・36 日層	深鉢	口縁部へ胴部	単線L線回	ナデ	後期	補修孔1個, 内外面付着付
0226-5	遺構外	R0-12 日層	深鉢	口縁部へ胴部	単線L (多葉・結部) 線回	ナデ	前期前葉	縦線部, 短文によってS字状を呈する, 白変式か
0226-6	遺構外	R0-13, R0-13 日層	深鉢	口縁部	単線L線回, 口縁部ナデ	ナデ	後期中業～後葉	口径19.7cm
0226-7	遺構外	R0-24 日層	深鉢	口縁部	無彫L線回	ナデ	後期	海溝部付着量多量
0226-8	遺構外	R1-13 日層	深鉢	口縁部	単線L線回, 単線L線回(結部)	ナデ	内筒下層c式	縦線部, 短文によってS字状を呈する
0226-9	遺構外	R0-18 日層	深鉢	口縁部	単線L線回(結部)	ナデ	内筒下層c式	
0226-10	遺構外	R0-18 日層	鉢	口縁部	斜り返し, 口縁, 口唇部面取り, 単線L線回(多葉) 線回	ナデ	後期初期	
0226-11	遺構外	R0-26, R0-26・27, R0-26・27 日層	深鉢	口縁部	斜り返し, 口縁, 口唇部面取り, 単線L線回	ナデ	後期初期	海溝部付着量多量
0226-12	遺構外	R1-18 日層	深鉢	口縁部	口縁部込み, 単線L線回	ナデ	後期	
0226-13	遺構外	カタラン	深鉢	胴部	斜り返し, 口縁, 単線L線回	ナデ	中期～後期	滑らかな面取り
0227-1	遺構外	R0-25 日層・カタラン	深鉢	胴部	単線L (多葉) + 単線Lの付加条	ナデ	中期～後期	底径12.3cm, 内外面に付着付, 外縁結合
0227-2	遺構外	R0-16 II・III 日層	深鉢	胴部	格子状沈線文	ナデ	十層内1式	外縁結合
0227-3	遺構外	R0-13 日層	深鉢	胴部	知結第1A型(無彫), 単線L線回	ナデ	前期	縦線部
0227-4	S266	堆積土	深鉢	胴部	単線L線回	ナデ	後期	海溝部付着量多量
0227-5	S08	縄部	深鉢	胴部	知結第1型(無彫)	ナデ	後期か	
0227-6	遺構外	R0-29 I 日層	深鉢	胴部	単線L線回	ナデ	中期～後期	海溝部付着量多量, 補修孔1個
0227-7	S08	堆積土	深鉢	胴部	知結第1型(無彫)	ナデ	後期か	
0227-8	遺構外	R1-35 日層	深鉢	底面	単線L線回	ナデ	後期か	底径7.6cm, 内外面付着付, 外面熱熱により赤変
0227-9	遺構外	R1-35 日層	深鉢	底面	単線L線回, 底面にケズリ痕	ナデ・底面ケズリ痕	中期～後期か	底径10.2cm, 内外面熱熱により赤変
0227-10	遺構外	R0-18 日層	深鉢・鉢	底面	単線L (多葉) 横回, 底面に縦目痕	ナデ	後期	底径5.8cm, 外縁結合
0227-11	S24	堆積土	深鉢・鉢	底面	知結第1型(無彫)	ナデ	前期	底径17.0cm, 縦線部
0227-12	遺構外	R0-35 日層	深鉢・鉢	底面	単線L線回	ナデ・輪縁部	後期	底径5.6cm, 外面熱熱により赤変
0228-1	S21	CE-29 堆積土	深鉢	口縁部	縁部, 無彫線回	ナデ	内筒上層c式	縦線部

中居林道跡Ⅱ

調査号	出土位置	層位	器種	推定部位	特徴		型式・時期	備考
					外面	内面		
5655-2	PC1	底面直上	深鉢	口縁部	縁部、口唇部(単眼)縁口、口縁部無彫。(多量?) 削正	ナデ	内筒上壁のc	磨滅強い、被焼? P122
5655-3	PC1	底面直上	深鉢	口縁部	口唇部(単眼)縁口、口縁部無彫。(多量?) 削正	ナデ	内筒上壁のa	5655-2同-1c、P475
5655-4	PC1	底面直上	深鉢	口縁部	縁部、削正	ナデ	内筒上壁のc	磨滅・高筒骨針器人、P285
5655-5	PC1	C1-27 堆積土	深鉢	口縁部	縁部(無彫)縁口、削正	ナデ	内筒上壁のc	焼痕器人
5655-6	PC1	CH-28 堆積土上層	深鉢	口縁部	単眼縁口、縁口文、縁部磨	ナデ	太木10c並行	
5655-7	PC1	CG-30 底面	深鉢	口縁部	ミガキ?	ミガキ	最上式〜太木10c並行	P28
5655-8	PC1	C1-28 確認面	鉢	口縁部	口唇部に角目付、口縁部に浅い沈線5条、単眼縁口	ナデ	後期初型	高筒骨針器人
5655-9	PC1	C1-28 確認面	鉢	口縁部	浅状口縁、口唇部に角目付、口縁部に浅い沈線、単眼縁口	ナデ	後期初型	
5655-10	PC1	CG-29 堆積土	深鉢	口縁部	浅状口縁、縁部(研削?)、沈線文、単眼縁口	ナデ	後期初型	内面に備付者
5655-11	PC1	CG-29 底面	深鉢	口縁部	横溝部、高筒文、単眼縁口	ナデ	太木10c並行	高筒骨針器人、P22
5655-12	PC1	CG-29 底面	深鉢	胴部	横溝部、横口形文、単眼縁口	ナデ	後期初型	高筒骨針器人、P543
5655-13	PC1	確認	深鉢	口縁部	浅状口縁、縁部の縁部(研削?)、単眼縁口	ナデ	後期初型	P454
5655-14	PC1	確認	深鉢	胴部	溝部(単眼縁口)・ミガキ突起	ナデ	後期初型	P466
5655-15	PC1	CG-30 確認面	鉢?	口縁部	単眼縁口多量、磨消溝文	ミガキ	後期初型	高筒骨針器人
5655-16	PC1	CG-47 堆積土	深鉢	胴部	単眼縁口、横口、磨消溝文	ナデ	後期初型	高筒骨針器人
5655-17	PC1	CG-47 堆積土	深鉢	胴部	単眼縁口、横口、磨消溝文	ナデ	後期初型	高筒骨針器人、図56-18同-1c
5655-18	PC1	CG-29 堆積土	深鉢	胴部	単眼縁口、磨消溝文	ナデ	後期初型	外層結合、高筒骨針器人、磨滅強い
5655-19	PC1	CG-47 堆積土	深鉢	胴部	単眼縁口、磨消溝文	ナデ	後期初型	高筒骨針器人
5655-20	PC1	CG-27 堆積土	深鉢	口縁部	単眼縁口、磨消溝文	ナデ	後期初型	器人多量器人、磨滅強い
5655-21	PC1	CG-29 堆積土	深鉢	胴部	単眼縁口、横口、磨消溝文	ナデ	後期初型	
5655-22	PC1	C1-27 堆積土	深鉢	胴部	単眼縁口、横口、磨消溝文	ナデ	後期初型	高筒骨針器人、外層結合
5655-23	PC1	底面直上	深鉢	胴部	単眼縁口、沈線文	ナデ	後期初型	P357
5655-24	PC1	CG-29 堆積土	深鉢	胴部	単眼縁口、沈線文	ナデ	後期初型	
5655-25	PC1	CG-29 堆積土	深鉢	胴部	単眼縁口多量、口縁部に沈線、磨消溝文	ナデ	後期初型〜前葉	内面に帯状に備付者、磨滅している
5655-26	PC1	CG-29 堆積土	深鉢	口縁部	浅状口縁、縁部、沈線文、単眼縁口	ナデ	後期初型	
5655-27	PC1	CG-29 堆積土	深鉢	口縁部	浅状口縁、縁部、沈線文、単眼縁口	ナデ	後期初型〜前葉	
5655-28	PC1	CJ-28 堆積土上層	深鉢	口縁部	浅状口縁、縁部、沈線文、単眼縁口	ナデ	後期初型〜前葉	磨滅強い
5655-29	PC1	CG-29 確認面	深鉢	口縁部	浅状口縁、縁部、沈線文、単眼縁口	ナデ	後期初型	
5655-30	PC1	CG-29 確認面	深鉢?	口縁部	縁部、沈線文	ナデ	後期初型	磨滅強い
5655-31	PC1	CG-28 堆積土上層	深鉢	口縁部	単眼縁口、沈線文	ナデ	後期初型	磨滅強い
5655-32	PC1	CG-47 堆積土	深鉢	口縁部	単眼縁口、横口、磨消溝文	ナデ	後期初型	器人多量器人、外面一部剥落
5655-33	PC1	CJ-27 堆積土上層	深鉢	口縁部	単眼縁口、横口、磨消溝文	ナデ	後期初型	
5655-34	PC1	底面直上	深鉢・鉢	口縁部	口唇部突起、単眼縁口、沈線文	ナデ?	後期	金盃器人、磨滅強い、P327
5655-35	PC1	CG-30 底面直上	深鉢	口縁部	沈線文、単眼縁口	ナデ	後期初型	高筒骨針器人、P23
5655-36	PC1	CG-29 底面直上	鉢	口縁部	縁部(単眼縁口)	ミガキ	外面に赤点、P337	
5655-37	PC1	CG-29 堆積土	鉢	口縁部	縁部、溝部に角目、磨消溝文、単眼縁口	ナデ	後期初型〜1層内1式	
5655-38	PC1	CG-31 堆積土	深鉢	胴部	横溝部、沈線文、単眼縁口・横口	ナデ	後期初型	
5655-39	PC1	CG-29 堆積土	深鉢	胴部	沈線文、単眼縁口	ナデ	後期初型	磨滅
5655-40	PC1	底面直上	深鉢	胴部	溝部、横口部	ナデ?	中層葉〜前葉	磨滅強い、P278
5655-41	PC1	CG-29 堆積土	深鉢	胴部	単眼縁口、沈線文	ナデ	後期初型	
5655-42	PC1	CG-29 堆積土	深鉢	胴部	すり直し口縁、単眼縁口?	ナデ	後期初型	磨滅強い
5655-43	PC1	底面直上	深鉢	胴部	単眼縁口5条(単眼縁)	ナデ	後期初型	P472
5655-44	PC1	底面直上	深鉢	口縁部	すり直し口縁、無彫(横口・縦口)	ナデ	後期初型	高筒骨針器人
5655-45	PC1	CJ-27 堆積土上層	深鉢	口縁部	すり直し口縁、無彫(横口・縦口)	ナデ	後期初型	
5655-46	PC1	CG-30 底面直上	深鉢・鉢	口縁部	口唇部に単眼縁口、胴部に単眼縁口・横口	ナデ	後期初型	P128
5655-47	PC1	CJ-27 堆積土上層	深鉢	口縁部	すり直し口縁、単眼縁口	ナデ	後期初型	
5655-48	PC1	CJ-27 堆積土上層	深鉢	口縁部	すり直し口縁、単眼縁口(横口・縦口)	ナデ	後期初型	
5655-49	PC1	C1-28 確認面	深鉢	口縁部	口唇部に単眼縁口、胴部に単眼縁口	ナデ	後期初型	高筒骨針器器人、P125
5655-50	PC1	CG-30 底面直上	深鉢	口縁部	口縁部に単眼縁口、胴部に単眼縁口	ナデ	後期初型	内面に備付者、外面後部により一部赤点
5655-51	PC1	CG-29 堆積土	深鉢	口縁部	口縁部に単眼縁口(多量)削正、胴部に単眼縁口5条(単眼縁)	ナデ	後期初型	高筒骨針器器人
5655-52	PC1	CG-29 堆積土	鉢・浅鉢	口縁部	沈線文	ミガキ	1層内1式	
5655-53	PC1	底面直上	深鉢・鉢	口縁部	口唇部突起、沈線文、ミガキ	ミガキ	1層内1式	高筒骨針器器人、P364
5655-54	PC1	CG-29 堆積土	鉢・浅鉢	胴部	沈線文、ミガキ	ミガキ	1層内1式	内外面に赤点
5655-55	PC1	CG-29 堆積土	深鉢	口縁部	口唇部突起、沈線文、ミガキ	ナデ	1層内1式	高筒骨針器器人
5655-56	PC1	CG-29 堆積土	鉢	口縁部	口唇部突起、沈線文、ミガキ	ミガキ	1層内1式	内外面に赤点
5655-57	PC1	CG-29 堆積土	浅鉢	口縁部	沈線文、ミガキ	ミガキ	1層内1式	高筒骨針器器人
5655-58	PC1	CG-29 堆積土	鉢・浅鉢	口縁部	沈線文、ミガキ	ミガキ	1層内1式	高筒骨針器器人
5655-59	PC1	CG-29 堆積土	深鉢	胴部	沈線文、ナデ	ナデ	1層内1式	磨滅
5655-60	PC1	CG-29 堆積土	壺	胴部	沈線文、ミガキ	ナデ?	1層内1式	
5655-61	PC1	CG-30 確認面・堆積土	深鉢	口縁部	横溝部、沈線文	ナデ	後期初型	口縁(22.7cm)の高筒骨針器器人、磨滅
5655-62	PC1	CG-29 堆積土	鉢	胴部	横溝部、沈線文、ナデ	ナデ?	1層内1式	外層結合、磨滅
5655-63	PC1	CG-29 堆積土	鉢	口縁部	口唇部突起、沈線文、単眼縁口	ミガキ	後期前葉	高筒骨針器器人
5655-64	PC1	底面直上	壺	胴部	横溝部、横状突起?、沈線文	ナデ	後期初型	高筒骨針器器人、外面に赤点、外層結合、P560
5655-65	PC1	CG-29 堆積土	壺	胴部	ヒコ切断面、ナデ	ケズリ	後期初型〜1層内1式	切断面、高筒骨針器人、図56-28・29同-1c
5655-66	PC1	CG-29 堆積土	壺	胴部	ヒコ切断面、ナデ	ケズリ	後期初型〜1層内1式	切断面、高筒骨針器人、図56-27・29同-1c

図番号	出土位置	層位	器種	残存部位	特徴		型式・時期	備考
					外面	内面		
図56-29	PC1	CG-29 堆積土	壺	胴部	ヒゴ切斷痕,切斷面状況,ナツ	ナツ	後期初型～ 中期Ⅰ式	切斷痕,陶器資料混入,図56-28・27同 一少
図56-30	PC1	OK・C1-27 堆積土 上層	壺	口縁部 →胴部	口縁部に段差,ナツ	ナツ	後期初型 中期Ⅰ式	口径5.9cm,胴部最大径8.8cm
図57-1	PC1	底面	図56	口縁部	単形口縁部	ナツ	中期後葉	陶器資料散見部,外縁接合,P481
図57-2	PC1	OK・C1-27 堆積土	図56	口縁部	単形口縁部	ナツ	中期後葉	陶器資料散見部,外縁接合
図57-3	PC1	底面	図56	口縁部	口唇部直取り,無彫刻	ナツ	中期後葉～後期	胴部最大径1.1776
図57-4	PC1	CF-29 堆積土	図56	口縁部	単形第1型(無彫刻)	ナツ	後期初型	陶器資料散見部
図57-5	PC1	底面	図56	口縁部	単形第1型(無彫刻)	ナツ	中期後葉～後期	P450
図57-6	PC1	底面直上	図56	口縁部	単形第1型(無彫刻)	ナツ	中期後葉～後期	P385
図57-7	PC1	CG-30 堆積土	図56	口縁部	単形口縁部	ナツ	後期初型	
図57-8	PC1	CG-30 底面	図56	口縁部	単形口縁部,ケズリ直取り	ナツ	後期初型	内面
図57-9	PC1	CG-30 堆積土	図56	口縁部	単形口縁部	ナツ	後期初型	内面に僅け付着
図57-10	PC1	底面直上	図56	口縁部	単形第1型(無彫刻)	ナツ	中期後葉～後期	P282
図57-11	PC1	底面直上	図56	口縁部	単形口縁部,ナツ	ナツ	中期後葉～後期	陶器資料散見部,P274
図57-12	PC1	CF-29 堆積土	図56	口縁部 →胴部	単形口縁部	ナツ	中期後葉～後期初型	部破,外面一部剥落
図57-13	PC1	CG-28・29 堆積土	図56	口縁部 →胴部	単形口縁部	ナツ	中期後葉～後期初型	部破
図57-14	PC1	CF-29 堆積土	図56・57	口縁部 →胴部	ナツ	ナツ	中期後葉～後期	陶器資料散見部,外面磨滅,P199・200
図57-15	PC1	CG-29 堆積土	図56	口縁部	単形第1型(無彫刻)	ナツ	中期後葉～後期	陶器資料散見部
図57-16	PC1	CG-29 堆積土	図56	口縁部	単形第1型(無彫刻)	ナツ	中期後葉～後期	陶器資料散見部,磨滅
図57-17	PC1	CG-29 堆積土	図56	口縁部	口唇部直取り,単形口縁部	ナツ	後期初型～中葉	
図57-18	PC1	CG-30 底面	図56	口縁部	ナツ	ナツ	中期後葉～後期	P45
図57-19	PC1	底面直上	図56	口縁部	単形口縁部	ナツ	中期後葉～後期	外縁接合,P262
図57-20	PC1	CF-28 堆積土上層	図56	口縁部	裾状突起,単形口縁部	ナツ	後期	部破,裏割
図57-21	PC1	底面	図56	口縁部	ナツ	ナツ	中期後葉～中葉	陶器資料多量部入,P265
図57-22	PC1	CG-27 堆積土上層	図56	口縁部	ケズリ直取り,口唇部直取り,単形口縁部	ナツ	後期初型～中葉	図57-23同～少
図57-23	PC1	CG-27 堆積土上層	図56	口縁部	ケズリ直取り,口唇部直取り,単形口縁部	ナツ	後期初型～前葉	図57-22同～少
図57-24	PC1	CG-27 堆積土上層	図56	口縁部	沈着土,単形口縁部	ナツ	後期中葉～後葉	
図57-25	PC1	CF-29 堆積土	図56	口縁部	無彫刻	ナツ	後期初型	陶器資料散見部
図57-26	PC1	CF-29 底面	図56	口縁部	単形第1型(無彫刻)	ナツ	後期初型	P176
図57-27	PC1	底面	図56	口縁部	単形口縁部	ナツ	後期	直径4.3cm,P159
図57-28	PC1	CG-30 底面,陶器上層	図56	底面	単形口縁部,底部削代痕	ナツ	中期～後期	直径5.6cm,外縁接合,表面P131,磨滅 上層P284
図57-29	PC1	CF-29 堆積土	図56	底面	ケズリ,ナツ	ナツ	後期	直径5.7cm
図57-30	PC1	CF-29 堆積土	図57	底面	ナツ	ナツ	中期～後期	直径6.0cm,底部ヒゴ直取り
図57-31	PC1	CF-30 確認層	図56	底面	無彫刻	ナツ	中期	直径19.0cm
図57-32	PC1	CF-29 堆積土	図56	底面	単形口縁部	ナツ	中期～後期	直径11.6cm,外縁接合,底部ヒゴ直取り
図60-2	PC1	表層 堆積土	図56	口縁部	皮状口縁,縁部,沈着土,単形口縁部	ナツ	後期初型	口縁部直取り
図60-3	PC1	表層 堆積土	図56	口縁部	皮状口縁,縁部,沈着土,単形口縁部	ナツ	4.5cm×9	
図60-4	PC1	表層 瓶-31 罐層	図56	口縁部	皮状口縁,沈着土,沈着土,朝文,単形口縁部	ナツ	後期初型	
図60-4	PC1	表層 堆積土	図56	口縁部	口唇部直取り,縁部	ナツ	後期	陶器資料散見部
図60-5	PC1	図56-30 堆積土上層	図56	口縁部	縁部,朝文	ナツ	後期初型	
図60-6	PC1	図56-30 堆積土上層	図56	口縁部	朝文,磨消跡,単形口縁部	ナツ	大4.10式並行	陶器資料散見部,垂下文
図60-7	PC1	瓶-31 罐層	図56	口縁部	口唇部直取り,沈着土,単形口縁部+横 取	ナツ	大4.10式並行	陶器資料散見部
図60-8	PC1	瓶-31 罐層	図56	口縁部	縁部,朝文,磨消跡,単形口縁部	ナツ	後期初型	内面に僅け付着
図60-9	PC1	瓶-29 堆積土	図56	口縁部	口唇部直取り,口縁部無文部,沈着土,単形 口縁部	ナツ	前式～ 大4.10式並行	陶器資料散見部
図60-10	PC1	図56-30 堆積土下層	図56	口縁部	縁部,リウ状突起	ナツ	後期初型	外縁接合
図60-11	PC1	図56-30 堆積土下層	図56	口縁部	縁部,朝文	ナツ	後期初型	
図60-12	PC1	表層 堆積土	図56	口縁部	口唇部直取り,単形口縁部	ナツ	後期初型	外縁接合
図60-13	PC1	瓶-31 罐層	図56	口縁部	口唇部直取り,沈着土,単形口縁部	ナツ	後期初型	陶器資料散見部
図60-14	PC1	瓶-31 罐層+縁部 上層	図56	口縁部 →胴部	無地文,裾状沈着土	ナツ	後期初型	
図60-15	PC1	瓶-29 堆積土	図56	口縁部 →胴部	単形口縁部(結束)	ナツ	後期初型	口径26.5cm,外縁接合,陶器資料散見部
図60-16	PC1	瓶-31 罐層	図56	口縁部	口唇部直取り,沈着土,ナツ	ナツ	10層内式	陶器資料散見部
図60-17	PC1	堆積土	図56	断面	縁部,沈着土,単形口縁部	ナツ	後期初型	
図60-18	PC1	表層 堆積土	図56	断面	縁部,沈着土,単形口縁部+横取	ナツ	後期初型	
図60-19	PC1	瓶-31 堆積土	図56	口縁部	皮状口縁,縁部(単形口縁部+横取) 、沈着土	ナツ	後期初型	
図60-20	PC1	表層 堆積土	図56・57	断面・縁部	口唇部直取り,沈着土,ナツ	ナツ	10層内式	陶器資料散見部
図60-21	PC1	瓶-31 堆積土	図56	断面	縁部,沈着土,単形口縁部	ナツ	後期初型	
図60-22	PC1	瓶-31 罐層	図56	断面	単形第5型(単形初)	ナツ	後期初型	外縁接合
図60-23	PC1	瓶-31 罐層	図56	口縁部	無彫刻	ナツ	後期初型	
図60-24	PC1	瓶-31 罐層	図56	口縁部	口唇部直取り,単形口縁部	ナツ	後期初型	
図60-25	PC1	瓶-31 罐層	図56	断面	朝文,ナツ	ナツ	10層内式	内面に僅け付着
図60-26	PC1	瓶-31 罐層	図56	口縁部	単形口縁部+横取	ナツ	後期初型	
図60-27	PC1	瓶-31・32 堆積土	図56	口縁部 →胴部	口唇部直取り,単形口縁部+横取	ナツ	後期初型	外縁接合
図60-28	PC1	瓶-31 罐層	図56	口縁部	口唇部直取り,単形口縁部(多量)	ナツ	後期初型	口縁部直取り
図60-29	PC1	瓶-31 罐層上層	図56	口縁部	無彫刻	ナツ	中期後葉～後期	
図60-30	PC1	瓶-31 罐層	図56	口縁部 →胴部	単形第1型(無彫刻)	輪縁部	中期後葉～後期初型	外縁接合

中居林道諸墓

図番号	出土位置	層位	器種	残存部位	特徴		型式・時期	備考
					外面	内面		
図65-5	武2	III-31 堆積土	深鉢	口縁部	華雲山磁器	ナブ	後期初頭	外縁接合
図65-6	武2	III-26 堆積土	深鉢	口縁部	華雲山磁器	ナブ	中期後葉～後期初頭	外縁接合
図65-7	武2	III-31 雑土層	深鉢	口縁部	華雲山磁器・模刻	ナブ	中期後葉～後期初頭	海綿質針多量混入、外縁接合
図65-8	武2	III-31 堆積土	深鉢	底部	華雲山(多量)磁器、底部に調代灰、クズリ	ナブ	中期後葉～後期	底径(10.2)cm、海綿質針微量混入

瓦片石部観察表

図番号	出土位置	グランド	層位	器種	石材	計測値(mm)			重量(g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
図8-15	S17	-	堆積土	石瓶	片貫瓦葺	24.6	19.3	3.8	1.3	S2
図12-6	S16内SK1	-	堆積土	石瓶	片貫瓦葺	18.3	9.9	2.9	0.3	
図12-7	S19	-	堆積土	石瓶	片貫瓦葺	27.5	13.4	6.6	2.5	
図12-8	S19	-	確認面	石瓶	片貫瓦葺	24.5	13.5	5.4	0.9	
図12-19	S10内T14	-	堆積土	石瓶	片貫瓦葺	19.0	10.7	4.6	0.5	
図13-20	S10	-	確認面	石瓶	片貫瓦葺	28.5	17.7	10.9	4.2	
図18-8	SK116	-	堆積土	石瓶	片貫瓦葺	30.9	12.1	6.2	1.6	
図18-17	SK131	-	堆積土	石瓶	片貫瓦葺	27.0	9.6	3.1	0.8	71744付着
図18-18	SK131	-	確認面	石瓶	片貫瓦葺	29.0	10.2	3.9	0.8	
図28-1	遺構外	RP-17	II層	石瓶	片貫瓦葺	20.4	13.5	2.6	0.3	
図28-2	遺構外	RP-11	II層	石瓶	片貫瓦葺	38.2	10.4	3.8	1.2	
図28-3	遺構外	RP-24	II層	石瓶	片貫瓦葺	28.3	18.1	5.7	2.4	
図28-4	遺構外	RP-16	II層	石瓶	片貫瓦葺	29.6	16.4	6.4	2.4	
図28-5	S16	-	堆積土	石瓶	片貫瓦葺	22.1	17.2	4.6	1.5	
図28-6	遺構外	RP-14	II層	石瓶	片貫瓦葺	24.4	14.6	6.1	1.7	
図28-7	遺構外	RP-14	II層	石瓶	片貫瓦葺	22.4	15.3	4.3	1.1	
図28-8	遺構外	RP-15	II層	石瓶	片貫瓦葺	25.5	15.0	5.8	1.6	
図28-9	遺構外	RP-12	II層	石瓶	片貫瓦葺	28.3	10.2	3.8	1.1	
図28-10	遺構外	RP-12	II層	石瓶	片貫瓦葺	21.0	9.3	4.2	0.5	
図28-11	遺構外	RP-24	II層	石瓶	片貫瓦葺	29.1	13.9	4.6	1.4	
図28-12	遺構外	RP-24	II層	石瓶	片貫瓦葺	33.0	14.0	4.0	1.5	
図28-13	遺構外	RP-13	II層	石瓶	片貫瓦葺	23.6	13.0	6.5	1.1	
図28-14	遺構外	RP-14	II層	石瓶	片貫瓦葺	25.9	12.4	5.8	1.3	
図28-15	遺構外	RP-22	II層	石瓶	片貫瓦葺	34.1	15.6	4.9	2.0	
図28-16	遺構外	RP-34	II層	石瓶	片貫瓦葺	33.0	14.7	4.2	1.2	71744付着
図28-17	遺構外	RP-13	II層	石瓶	片貫瓦葺	22.0	8.6	3.4	0.4	
図28-18	遺構外	RP-32	II層	石瓶	片貫瓦葺	22.8	13.4	4.0	2.4	
図28-19	遺構外	CA-24	カクラン	石瓶	片貫瓦葺	28.9	13.5	3.3	0.7	
図28-20	遺構外	RP-13	II層	石瓶	片貫瓦葺	23.0	14.1	8.1	3.0	
図28-21	遺構外	RP-13	II層	石瓶	片貫瓦葺	20.9	10.7	3.2	0.5	
図28-22	SP1476	-	堆積土	石瓶	片貫瓦葺	14.2	15.7	5.3	0.6	
図28-23	S13	-	堆積土上層	石瓶	片貫瓦葺	167.3	14.1	6.0	3.9	
図28-24	遺構外	RP-13	II層	石瓶	片貫瓦葺	23.7	10.3	4.5	0.7	
図28-25	遺構外	RP-26	I層	石瓶	片貫瓦葺	118.0	14.4	7.9	1.5	
図28-26	遺構外	RP-24	カクラン	石瓶	片貫瓦葺	63.8	29.7	12.0	11.6	
図28-27	遺構外	RP-29	II層	石瓶	片貫瓦葺	76.2	25.6	11.1	14.8	
図28-28	遺構外	RP-19	II層	石瓶	片貫瓦葺	57.3	60.0	13.8	32.8	71744付着
図28-29	遺構外	-	表瓦	石瓶	片貫瓦葺	59.4	42.3	10.1	14.6	
図28-30	遺構外	RP-24	IV層	石瓶	片貫瓦葺	67.6	36.8	14.7	39.8	
図28-31	S18	-	堆積土	石瓶	片貫瓦葺	28.0	28.0	8.0	10.6	大石平型石瓶
図28-32	遺構外	-	カクラン	不明	片貫瓦葺	259.0	18.9	7.2	3.1	石瓶の可能性有
図28-33	遺構外	RP-08	II層	不明	片貫瓦葺	235.2	9.0	4.6	1.3	石瓶の可能性有
図28-34	遺構外	RP-20	II層	不明	片貫瓦葺	148.0	13.0	6.1	4.9	石瓶の可能性有
図28-35	遺構外	RP-35	II層	不明	片貫瓦葺	191.0	34.0	14.0	27.7	石瓶の可能性有
図37-33	武1	-	雑土層	石瓶	片貫瓦葺	43.4	18.7	5.3	3.5	S1
図37-34	武1	-	底面上部	石瓶	片貫瓦葺	46.0	12.7	5.8	2.8	S3
図37-35	武1	CP-29	確認面	石瓶	片貫瓦葺	29.6	27.3	9.6	8.5	
図37-36	武1	-	雑土層	不明	片貫瓦葺	40.0	26.0	10.0	10.1	S3
図37-37	武2	RP-31	堆積土上層	不明	片貫瓦葺	65.0	37.0	14.0	23.4	

瓦文様石部観察表

図番号	出土位置	グランド	層位	器種	石材	計測値(mm)			重量(g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
図12-9	S19	-	3層	磨石	砂岩	14.5	6.3	3.1	391.0	S15
図14-3	S111	-	1層	磨製石斧	粗粒玄武岩	114.0	5.0	2.9	337.9	
図18-4	SK31	-	堆積土	磨製石斧	磨製石斧	22.0	23.0	10.0	9.7	
図29-1	遺構外	RP-24, BK-24	II層	磨製石斧	花崗閃緑岩	66.0	4.6	2.1	117.8	
図29-2	遺構外	RP-31	II層	磨製石斧	片貫瓦葺	112.0	4.5	2.7	226.0	
図29-3	遺構外	RP-35	II層	磨製石斧	粗粒玄武岩	112.7	4.4	3.4	226.8	
図29-4	遺構外	RP-35	カクラン	磨製石斧	安山岩	66.0	5.2	2.6	144.3	
図29-5	遺構外	-	カクラン	磨製石斧	砂岩	8.7	4.1	3.2	165.3	
図29-6	遺構外	RP-16	II層	磨製石斧	粗粒玄武岩	66.0	4.2	3.0	126.6	
図29-7	遺構外	RP-18	II層	磨製石斧	花崗閃緑岩	4.7	15.0	2.5	95.9	
図29-8	遺構外	RP-17	II層	磨製石斧	ホルンフェルス	3.9	13.1	12.1	34.2	
図29-9	遺構外	表瓦	II層	磨製石斧	緑色磨製石斧	15.3	4.5	1.9	61.9	
図29-10	遺構外	RP-12	I層	磨石	砂岩	7.4	6.7	4.9	231.8	
図29-11	遺構外	RP-33	II層	磨石	粗粒玄武岩	12.5	6.6	5.7	827.1	
図29-12	遺構外	RP-33	II層	磨石	安山岩	8.0	7.0	2.6	217.4	
図29-13	遺構外	-	表瓦	磨石	砂岩	11.1	8.7	5.2	712.1	確認
図29-14	遺構外	RP-29	I層	磨石	砂岩	8.4	5.0	2.6	173.7	
図30-1	遺構外	RP-13	I層	磨石	砂岩	113.0	5.4	2.9	236.4	

図番号	出土位置	グリッド	層位	跡種	石材	計測値(cm)			重量(g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
図30-2	遺構外	BB-14	目録	竪石	安山岩	14.2	8.0	5.3	665.3	
図30-3	遺構外	—	表段	磨石	安山岩	14.0	7.0	5.5	800.0	
図30-4	遺構外	BB-33	扉部	磨石	砂岩	12.3	7.0	4.9	472.5	
図30-5	遺構外	BB-12	1層	磨石	砂岩	9.7	6.6	5.1	340.2	
図30-6	遺構外	BB-10	目録	磨石	安山岩	8.4	5.2	4.2	231.2	
図30-7	遺構外	—	表段	磨石	安山岩	10.7	7.6	4.5	258.7	
図30-8	遺構外	CB-30	カケラン	磨石	安山岩	10.2	6.1	4.6	410.7	
図30-9	遺構外	BB-22	扉部	石瓦	安山岩	110.2	8.3	5.7	650.7	
図30-10	SB16	CB-26	底面直上	石瓦	磁灰岩	49.3	8.0	11.4	768.1	
図30-21	SB16	CB-27	底面直上	竪石	玄武岩	10.9	7.6	4.5	561.0	
図30-11	PC2	BB-31	扉部	竪石	粗粒玄武岩	11.0	9.9	4.7	896.2	
図30-12	PC2	BB-32	扉部	磨石	砂岩	8.3	6.7	3.8	352.1	

縄文土製品数表

図番号	出土位置	グリッド	層位	跡種	石材	計測値(cm)			重量(g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
図27-18	SB19	—	溝槽下層	縄文土製品	—	5.4	11.2	19.0	31	無彫。行部の可能性有
図27-13	遺構外	BB-33	目録	縄文土製品	(2.9)	(3.2)	(3.0)	10.7	—	
図30-3	PC2	CB-28	扉部	縄文土製品	5.1	4.2	3.8	12.7	—	外表面に付着
図30-4	PC2	CB-L-27	扉部	縄文土製品	5.1	4.7	1.2	29.1	—	
図30-13	PC2	BB-31	扉部	縄文土製品	—	—	—	30.7	沈積。単層目	

縄文石製品数表

図番号	出土位置	グリッド	層位	跡種	石材	計測値(cm)			重量(g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
図30-5	SB16	CB-27	扉部	縄文石製品	貫首	5.7	5.6	1.0	39.2	
図30-6	SB16	CB-27	扉部	縄文石製品	粘板岩	5.3	5.1	1.1	32.9	
図30-7	SB16	CB-27	扉部	縄文石製品	粘板岩	4.8	4.5	1.3	30.2	
図30-8	PC2	CB-29	扉部	縄文石製品	粘板岩	4.2	4.1	3.0	7.5	

弥生土製品数表

図番号	出土位置	層位	跡種	石材	保存部位	特徴		型式・時期	備考
						外面	内面		
図32-1	S3内 T+1	床面直上・扉部上	甕	瓦形	単層組(多条)縦溝文、ミガキ	ナデ、ミガキ	前期後葉～中期前葉	P10 口径13.5cm、底径6.0cm、高さ14.5cm、内外面に付着	
図32-2	S13	床面直上・地床・目録	甕	口縁部	山吹突起、縦溝、ミガキ	ナデ、ミガキ	前期後葉～中期前葉	内外面に赤錆、内外面に付着	
図32-3	S13	扉部上	甕	口縁部	山吹突起、縦溝、ミガキ	ナデ、ミガキ	前期後葉～中期前葉	内外面に付着、磨減跡あり	
図32-4	S13	扉部上・床面直上	甕	口縁部	単層組、縦溝、ミガキ	ナデ、ミガキ	前期後葉～中期前葉	内、外面に付着	
図32-5	S13	1層	甕	口縁部	縦溝、ナデ、ミガキ	ナデ	前期後葉～中期前葉	上下面に付着	
図32-6	S13	扉部	甕	胴部	単層組縦溝文、平行浅溝文	ナデ	前期後葉～中期前葉	上下文、内外面に付着	
図32-7	S13	床面直上	甕	胴部	研究用。沈積。単層組縦溝文	ケズリ・ナデ	前期後葉～中期前葉	P11・14・15、外面に赤錆、内面に付着	
図32-8	S13	扉部上	甕	口縁部	口唇部取付中。変形文字文、ミガキ	ミガキ	前期後葉～中期前葉	外面に付着	
図32-9	S13	1層	甕	口縁部	ナデ、輪縁部	ナデ、輪縁部	前期後葉～中期前葉	口径6.0cm、高さ1.0cm	
図32-10	遺構外	BB-11 目録	甕	口縁部	口縁部に単層組縦溝文、縦溝、ナデ	沈積、ナデ	前期後葉～中期前葉	内縁部合、図33-27同	
図32-11	遺構外	BB-15 目録	甕	口縁部	口縁部に単層組縦溝文、縦溝、ナデ	沈積、ナデ	前期後葉～中期前葉	内縁部合、図33-14同	
図32-12	遺構外	BB-11 扉部	甕	胴部	単層組縦溝文、口縁部ミガキ	ナデ、輪縁部	前期後葉～中期前葉	内縁部合、外表面に付着	
図32-13	遺構外	AT-13 1・目録	甕	口縁部	単層組縦溝文、口縁部ミガキ、沈積	ナデ、輪縁部	前期後葉～中期前葉	内縁部合、内外面に付着、口径:12.0cm	
図32-14	遺構外	BB-13 目録	甕	口縁部	口唇部取付中。単層組縦溝文、口縁部ミガキ	ミガキ	前期後葉～中期前葉	内外面に付着	
図32-15	遺構外	BB-14 目録	甕	胴部	単層組(多条)縦溝文、沈積	ナデ	前期後葉～中期前葉	内縁部合、図33-27同	
図32-16	遺構外	BB-14 目録	甕	胴部	単層組(多条)縦溝文、沈積	ナデ	前期後葉～中期前葉	内縁部合、図33-46同	
図32-17	遺構外	BB-15 目録	甕	胴部	単層組縦溝文、沈積	ナデ	前期後葉～中期前葉	内外面に付着	
図32-18	遺構外	BB-11 目録	甕	胴部	単層組縦溝文、沈積	ナデ	前期後葉～中期前葉	外面に付着	
図32-19	遺構外	BB-12 目録	甕	胴部	単層組縦溝文、沈積	ナデ	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-20	遺構外	BB-12 目録	甕	胴部	単層組縦溝文、沈積	ナデ	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-21	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-22	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-23	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-24	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-25	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-26	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-27	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-28	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-29	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-30	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-31	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-32	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-33	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-34	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-35	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-36	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-37	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-38	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-39	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-40	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-41	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-42	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-43	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-44	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-45	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-46	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-47	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-48	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-49	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-50	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-51	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-52	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-53	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-54	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-55	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-56	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-57	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-58	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-59	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-60	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-61	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-62	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-63	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-64	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-65	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-66	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-67	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-68	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-69	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-70	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-71	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-72	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-73	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-74	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-75	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-76	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-77	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-78	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-79	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-80	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-81	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-82	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-83	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-84	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-85	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-86	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後葉～中期前葉	内面に付着	
図32-87	遺構外	BB-12 目録	甕	口縁部	口唇部	口唇部	前期後		

中居林道跡Ⅱ

土部詳細表

国番号	出土位置	グリッド	層位	器種	部位	計測値(cm)			測 量			備考	
						口径	底径	器高	外面	内面	底面		
図27-1	S113	-	床面	埴	口～底部	16.4	4.4	6.5	13°	13°	13°	P99・118・122・124・126・127	
図27-2	S113	-	埴の上層	埴	口部	13	6.5	15.2	13°	13°	13°	P115-121	
図27-3	S113	-	床面→埴	埴	口～底部	6.2	3.7	10.1	13°	13°	13°	P86-119-120-125-130	
図27-4	S113	-	床面	埴	底部	-	5.6	(3.2)	13°	13°	13°	P100・104	
図27-5	S113	-	床面→埴	埴	底部	-	7.8	(5.8)	13°	13°	13°	P106-117・128	
図27-6	S113	-	床面	埴	小帯土部	底部	-	3.9	(3.3)	13°	13°	P108	
図28-1	S117	-	床面	埴	底部	-	-	15.9	13°	13°	13°	P1	
図29-1	遺構外	-	-	埴	底部	-	-	(5.1)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-2	遺構外	跡 23・ 24 跡-24	竪管	埴	底部	-	-	(2.4)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-3	S19	-	竪管	埴	底部	-	66.8	(5.8)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-9	武1	CJ-27	埴の上層	埴	口部	20.8	8	5.6	13°	13°	13°	13°	13°
図30-10	武1	CJ-27	埴の上層	埴	口部	20.9	3.5	5.5	13°	13°	13°	13°	13°
図30-11	武1	CJ-27	埴の上層	埴	口部	11.9	4	7.6	13°	13°	13°	13°	13°
図30-12	武1	CP-30	埴	埴	口部	10.7	-	(5.1)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-13	武1	CJ-27	埴の上層	埴	口部	-	-	(5.1)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-14	武1	CJ-27	埴の上層	埴	口部	-	-	(7.2)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-15	武1	CP-30	埴	埴	口部	-	2.2	(5.7)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-16	武1	CK-1・27	埴	埴	底部	-	3.9	(6.0)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-17	武1	CI-28	埴の上層	埴	底部	-	4.1	(5.0)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-15	武2	HJ-30	埴	埴	口～底部	17.4	-	(20.4)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-16	武2	HJ-30	埴の上層	埴	口部	9.3	-	(10.8)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-17	武2	HK-30	埴の上層	埴	口部	-	-	(7.0)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-18	武2	HJ-30	埴の上層	埴	底部	-	3.9	(4.5)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-19	武2	HK-21	埴の上層	埴	付	付	-	(2.0)	13°	13°	13°	13°	13°
図30-20	武2	HS-31	埴	埴	付	付	-	(4.0)	13°	13°	13°	13°	13°

古代・中・近世焼石器類表

国番号	遺構名	グリッド	層位	器種	石材	計測値(cm)			重量(g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
図37-7	S113	-	床面	埴	砂岩	(19.8)	5.4	4.8	725.9	
図39-6	-	HC-28	カクラン	焼石	砂岩	(9.7)	5.5	2.2	188.1	
図39-14	武2	HJ-31	埴の上層	焼石	砂岩	(11.9)	7.9	3.4	434.2	
図39-1	S116/11	-	埴	焼石	頁岩	(5.8)	3	3	139.5	
図39-2	S1120	-	埴	焼石	凝灰岩	(6.8)	6.0	4.4	132.1	

鉄製品類表

国番号	遺構名	グリッド	層位	器種	計測値(cm)			重量(g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
図38-18	武1	OC-29	鐵製土面	刀子	(13.8)	1.2	0.2	11.4	
図38-19	武1	OC-29	鐵製土面	不明	(10.2)	0.9	0.8	19.1	

木製品類表

国番号	出土位置	グリッド	層位	器種	材質	計測値(cm)			備考
						長さ	幅	厚さ	
図29-1	3号木組	-	底面	穿部	タリ	72.6	31.0	19.0	榿木同定No66
図29-1	3号木組	-	底面	穿部	タリ	73.0	42.0	20.5	年代測定088No55 榿木同定No11・45
図22-1	3号木組(HA3)	-	底面	杭	タリ	55.0	6.9	5.9	榿木同定No37
図22-2	3号木組(HA1)	-	底面	杭	タリ	56.6	9.7	7.1	年代測定088No101 榿木同定No40
図22-3	3号木組(HA2)	-	底面	杭	タリ	43.3	9.9	7.0	榿木同定No35 22-3と同
図22-4	3号木組(HA4)	-	底面	杭	タリ	21.6	6.8	3.0	榿木同定No38
図22-5	3号木組(HA2)	-	底面	杭	タリ	21.8	6.8	5.4	榿木同定No36 22-3と同
図22-6	3号木組	-	底面	木材料	タリ	173.9	18.7	8.4	榿木同定No39
図22-7	3号木組	-	底面	木材料	タリ	132.4	13.8	13.8	確認している 榿木同定No10
図29-1	SD16	CG-28	埴の上層	板	ブナ属	-	-	-	111.7 底5.7 高5.5cm 外面・底面、内面・底面 榿木同定No4
図29-2	SD16	CG-28	埴の上層	板	ブナ属	-	-	-	113.2 底7.2 高7.0cm 外面・底面、内面・底面 榿木同定No5
図29-3	SD16	CG-28	埴の上層	板	ブナ属	-	-	-	112.7 底5.7 高5.9cm 外面・底面、内面・底面 榿木同定No4
図29-4	SD16	-	埴の上層	板	ブナ属	-	-	-	11-1 底6.0 高(6.2)cm 外面・底面、内面・底面 榿木同定No13
図29-5	SD16	CG-27	底面直上	板	ブナ属	-	-	-	11-2 底6.0 高(6.7)cm 外面・底面、内面・底面 榿木同定No9
図29-6	武1	CP-28	埴の上層	板	ブナ属	-	-	-	11-3 底4.9 高(4.5)cm 外面・底面、内面・底面 榿木同定No6 蓋の可能性有
図29-7	SD16	CG-28	埴の上層	板	ブナ属	-	-	-	11-4 底5.3 高(3.6)cm 外面・底面、内面・底面 榿木同定No11 蓋の可能性有
図29-8	武1	CP-28	埴の上層	板	ブナ属	-	-	-	11-5 底5.3 高(4.7)cm 外面・底面、内面・底面 榿木同定No6 蓋の可能性有
図29-9	SD16	CG-28	埴の上層	底版	アスナロ属	10.2	10.0	1.0	榿木同定No42
図29-10	SD16	CG-28	埴の上層	底版	アスナロ属	10.0	10.2	1.0	榿木同定No42
図29-11	SD16	CG-28	埴の上層	底版	アスナロ属	14.4	20.1	0.9	榿木同定No22
図29-12	武1	CP-28	埴の上層	底版	アスナロ属	36.8	3.8	0.5	榿木同定No43
図29-13	2号木組	-	底面直上	曲物	アスナロ属	26.9	7.7	1.4	榿木同定No4
図29-14	武1	CP-28	埴の上層	曲物	アスナロ属	11.1	3.0	0.4	榿木同定No29
図29-15	武1	CP-28	埴の上層	曲物	アスナロ属	11.1	3.0	0.4	榿木同定No29
図30-1	SD16	-	埴の上層	下駄	タリ	15.4	6.6	4.9	榿木同定No8
図30-2	武1	CG-27	埴の上層	下駄	タリ	16.9	7.3	4.4	榿木同定No20
図30-3	SD16	CG-27	埴の上層	下駄	タリ	16.0	8.2	2.9	榿木同定No21
図30-4	SD16	-	埴の上層	下駄	タリ	15.2	8.5	4.2	榿木同定No9
図30-5	武1	CP-29	埴の上層	下駄	タリ	9.0	14.7	2.0	榿木同定No15
図30-6	武1	CP-29	埴の上層	下駄	タリ	9.1	12.8	2.0	榿木同定No15
図30-7	武1	CP-28	埴の上層	把手	アスナロ属	21.9	9.9	1.7	榿木同定No28
図30-8	2号木組	CP-29	底面	板	-	(9.8)	9.0	13.8	
図30-9	SD16	CG-28	埴の上層	板	イヌノホ	4.4	(4.3)	0.8	榿木同定No2
図30-10	2号木組	-	底面直上	板	アスナロ属	24.6	0.6	0.6	榿木同定No44
図30-11	武1	CP-28	埴の上層	刀子	コナラ	24.4	3.1	0.7	榿木同定No27
図30-1	武1	CP-28	埴の上層	木箱	ミズカ	(62.0)	28.1	15.1	榿木同定No26

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	材質	計測値(mm)			備考
						長さ	幅	厚さ	
図01-2	穴1	CP-28	堆積土	不明	アサノカ泥	31.2	3.5	0.7	動物? 継縄同定No25
図01-3	穴1	CP-28	堆積土	不明	マツ風	20.0	4.0	2.9	磁材? 継縄同定No24
図01-4	穴1	CP-28	堆積土	不明	マツ風	(18.7)	5.3	3.4	継縄同定No18
図01-5	穴2	-	堆積土上層	不明	-	49.9	9.0	1.6	
図01-6	SD16	-	底面	粒	マツ風	(43.1)	4.8	4.8	年代測定99NN-2 継縄同定No32
図01-7	1号木組	-	底面直上	粒	マツ風	(44.6)	4.7	3.2	年代測定99NN-6 継縄同定No42
図01-8	SD16	CP-28	堆積土	不明	マツ風	(12.0)	4.5	3.3	磁材? 継縄同定No23
図01-9	SD16	-	底面	不明	-	6.6	5.2	1.3	本釘?残存

古代土製品簡表

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	計測値(mm)		重量(g)	備考
					長さ	幅		
図03-2	SK17	-	床面直上	粘板土	4.7	4.8	3.9	75.1 割
図03-4	SK152	-	堆積土	粘板土	5.4	5.5	2.8	76.3

古代石製品簡表

図番号	出土位置	グリッド	層位	器種	石材	計測値(mm)			重量(g)	備考
						長さ	幅	厚さ		
図03-5	SK147	-	堆積土	有孔石製品	頁岩	7.6	6.8	1.9	125.6	
図03-7	遺構外	IK-19	田圃	石製品	-	2.9	1.2	1.7	6.0	頭部に穿孔

土瓦簡表

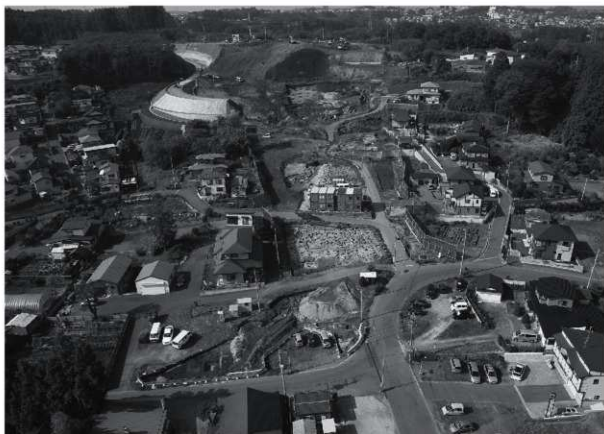
図番号	出土位置	層位	種類	生産地・初納年代	計測値(mm)		重量(g)	枚数	備考	
					長さ	幅				
図04-2	SK145	底面	夏水透費(前)	日本	1868年	26	2.7	1	古瓦2	
図04-3	SK145	底面	夏水透費(前)	日本	1868年	24	2.7	1	古瓦3	
図04-4	SK145	底面直上	不明	不明	不明	24	4.5	2	古瓦1 二枚重ね	
図04-12	S35	堆積土	夏水透費(前)	日本	1868年	25	2.8	1		
図04-13	S35	堆積土	夏水透費(前)	日本	1868年	25	3.3	1		
図04-14	S35	堆積土	夏水透費(前)	日本	1868年	24	1.9	1	小字 背瓦	
図04-15	S35	堆積土	夏水透費(前)	日本	1868年	25	2.6	1		
図04-21	SD16	CP-29	底面直上	法武透費	明	1808年	22	1.6	1	
図04-2	穴1	CP-29	埋込面	法武透費	明	1808年	20	0.8	1	
図04-3	SD16	底面	水梁透費	明	1808年	22	1.8	1	古瓦2	
図04-4	SD16	底面	水梁透費	明	1808年	23	1.5	1	古瓦1	
図04-5	SD16	CP-28	底面直上	水梁透費	明	1808年	24	1.9	1	埋込瓦? 1
図04-6	SD16	CP-27	底面	水梁透費	明	1808年	22	1.1	1	
図04-7	SD16	底面	水梁透費	明	1808年	22	0.6	1	古瓦3	
図04-8	SD16	CP-27	底面	水梁透費	明?	1808年?	21	0.7	1	
図04-9	SD16	底面	水梁透費	明	1808年	21	0.6	1	古瓦1	
図04-10	2号木組	底面直上	水梁透費	明	1808年	25	2.2	1	古瓦2	
図04-11	穴1	CP-29	堆積土	水梁透費	明	1808年	23	1.3	1	古瓦1
図04-12	穴1	CP-29	堆積土	水梁透費	明	1808年	22	1.3	1	
図04-13	穴1	CP-29	カケラ	水梁透費	明	1808年	24	1.3	1	
図04-14	2号木組	底面直上	夏水透費(古)	日本	1836年	24	1.9	1	古瓦1	
図04-15	穴1	CP-29	堆積土	夏水透費(古)	日本	1836年	23	2.5	1	
図04-16	穴1	堆積土	夏水透費(古)	日本	1836年	25	3.3	1	古瓦2	
図04-17	穴1	CP-29	堆積土	夏水透費(古)	日本	1836年	25	2.6	1	
図04-18	穴1	CP-30	カケラ	夏水透費(前)	日本	1868年	25	2.9	1	継子 破断瓦?
図04-19	穴1	CP-29	カケラ	夏水透費(前)	日本	1868年	26	3.2	1	背瓦
図04-3	遺構外	IK-24~27, CP-29	I層	火梁透費	宋	1023年	23	2.5	1	
図04-4	遺構外	カケラ	水梁透費	明	1808年	25	2.2	1		
図04-5	遺構外	IK-23	目録	夏水透費(古)	日本	1836年	25	3.2	1	
図04-6	遺構外	IK-19, 19	I層	夏水透費(前?)	日本	1868年?	23	3.2	1	
図04-7	遺構外	IK-33	I層	夏水透費(前)	日本	1868年	29	3.7	1	四文瓦
図04-8	S36	堆積土	夏水透費(前)	日本	1868年	27	3.3	1	継子 破断瓦?	
図04-9	SP1805	堆積土	夏水透費(前)	日本	1868年	25	2.0	1		
図04-10	遺構外	IK-28	I層	夏水透費(前)	日本	1868年	24	2.2	1	継子
図04-11	遺構外	IK-23	目録	夏水透費(前)	日本	1868年	25	1.7	1	
図04-12	遺構外	IK-23	目録	夏水透費	朝鮮	1878年	30	1.6	1	背土上(背?トニ?)
図04-13	遺構外	IK-19, 19	I層	不明	不明	22	2.1	1	破瓦	
図04-14	SP1384	堆積土	不明	不明	近世?	24	5.2	1		
図04-15	遺構外	カケラ	不明	不明	近世?	30	3.8	1	破瓦	
図04-16	遺構外	カケラ	不明	不明	近世?	27	4.3	2		

埋骨簡表

図番号	出土位置	層位	部位	計測値(mm)		年代	備考	
				長さ	重量(g)			
図04-5	SK145	底面直上	火皿・埋骨	(75)	8.8	18c	一級埋骨残存, キセル	
図04-6	SK145	堆積土	埋骨	(55)	4.4	不明		
図04-20	穴1	底面	火皿・埋骨	74	8.2	18c	残存良好, Fe1	
図04-21	穴1	CP-30	底面直上	火皿・埋骨	(40)	4.8	17c	
図04-22	穴1	CP-28	堆積土	埋いり	40	2.5	不明	埋れている
図04-17	遺構外	CP-29	カケラ	火皿・埋骨	46	5.0	18c	
図04-18	遺構外	IK-28	カケラ	火皿	(31)	4.5	19c	
図04-19	遺構外	IK-32	カケラ	火皿	53	7.9	19c	
図04-20	遺構外	IK-29	カケラ	埋いり	40	4.7	18c	

中居林道跡Ⅱ

海組別観覧表	図番号	出土位置	層位	器種	生産地	年代	種類	成形・技法	備考
	図48-1	SK138	堆積土	土瓶	大塚柏馬	19c中	陶器		
	図48-8	SK160	堆積土	中輪	肥前産	19c	磁器	染付	
	図48-9	SK171		金次第皿	肥前産	18c後	磁器	染付	
	図48-10	SK171	3層 堆積土	小瓶	大塚柏馬	18c	磁器		くらわんこ組 遺物見取か
	図48-11	SK1	堆積土	小瓶	小久保	18c	磁器		
	図48-12	SK4	堆積土	土瓶蓋	大塚柏馬?	19c	陶器		
	図48-17	SK5	堆積土	大瓶	瀬戸	19c	磁器	染付	
	図62-23	SK16 Ⅱ	CG-27 13c-28 堆積土 確認層	小皿	中国	17c前	磁器	染付	沼津産産?
	図62-24	SK16	CI-27 高直上層 堆積土	小皿	中国	17c前	磁器	染付	沼津産産?
	図62-25	Ⅱ	CG-28 堆積土上層	筒鉢	瀬戸美濃	16c後	陶器		海船中 大塚野原
	図62-26	Ⅱ	CG-29 確認層	大平皿	瀬戸	17c後～18c	陶器		
	図62-27	Ⅱ	CG-29 確認層	中皿	肥前	18c	磁器	口紅 染付	高台内村文久 4小瓶、「天明年製」並
	図62-28	Ⅱ	CG-29 確認層	天目碗	瀬戸美濃	15c末～16c前	陶器		大塚1期 焼物
	図62-29	SK16	底土	中輪	肥前	17c中	磁器	染付	PS
	図62-30	Ⅱ	CG-29 確認層	大瓶	肥前	17c後～18c前	陶器	有脚手	
	図62-31	Ⅱ	CG-29 確認層	中輪	肥前	17c末～18c前	磁器	染付	
	図62-32	Ⅱ	CG-28 堆積土	大瓶	肥前	17c後～18c前	陶器	出流口	
	図62-33	Ⅱ	CG-28 堆積土	中輪	肥前	18c	磁器	染付	
	図62-34	Ⅱ	CI-27 堆積土上層	中輪	肥前	18c後	磁器	青磁 口紅	
	図62-35	SK16	CG-28 堆積土	大鉢	瀬戸美濃	17c	陶器	青磁	
	図63-1	SK16	CG-27 堆積土	漆鉢	越前	16c	陶器		
	図63-2	SK16	CG-28 堆積土	漆鉢	肥前	17c前	陶器		
	図63-3	Ⅱ	CG-30 堆積土	漆鉢	堺	18c後	陶器		
	図63-4	SK16	CG-28 堆積土	壺	信楽	16c～17c前?	陶器		茶室
	図63-5	SK16	CI-27 堆積土	壺	信楽	16c～17c前?	陶器		茶室
	図63-6	Ⅱ	CG-29 確認層	壺	肥前	17c後～18c	陶器		
	図63-7	SK16 + Ⅱ	CG-28 + CG-30 堆積土 + 確認土下層	次入・香炉	肥前	17c	陶器		
	図63-8	Ⅱ	CG-28 確認層	瓶入	瀬戸美濃	16c後	陶器		新築正入
	図63-21	遺構外	CG-26 Ⅱ層	皿?	中国	16c	磁器	青磁	焼物見取?
	図64-22	遺構外	図-13 1層	皿	肥前	16c末～17c初	陶器	絵巻筒	
	図64-23	SP122	堆積土	小皿	肥前	16c末～17c初	陶器		
	図64-24	SP1315	堆積土	小皿	瀬戸美濃	16c	陶器		
	図64-25	SP134	堆積土	小皿	瀬戸美濃	17c前	陶器	志野織部	惣茶1期
	図64-26	遺構外	図-16 1層	中皿	肥前	16c後	磁器	染付 見込彫の目輪取付	
	図64-27	遺構外	図-30 1層	中皿	肥前	17c末～18c初	磁器	染付	
	図64-28	遺構外	図-33 1層	中皿	肥前	19c	磁器	染付	巻物置き板 焼物
	図64-29	遺構外	図-36 1層	中皿	肥前	19c	磁器	染付	高台内村文久
	図67-1	遺構外	CG-27 1層	中皿	中国	17c前	磁器	染付	
	図67-2	SP128	堆積土	中輪	中国	17c前	磁器	染付	
	図67-3	遺構外	CG-29 カタラン	天目碗	瀬戸美濃	16c後	陶器		
	図67-4	SP1421	堆積土	中輪	肥前	17c後～18c	陶器		大塚野原
	図67-5	SP101	堆積土	中輪	瀬戸	19c中	磁器	染付	曾根風陶器
	図67-6	SP1482	堆積土	湯飲み碗	大塚柏馬	19c前	陶器		
	図67-7	遺構外	図-30 1層	飯蓋	肥前	19c	磁器	染付	
	図67-8	遺構外	図-30 1層	鉢	肥前	18c後	磁器	青磁染付	
	図67-9	遺構外	表探	鉢	肥前	18c後	磁器	増味鉢	焼物
	図67-10	遺構外	図-16 Ⅱ層	漆鉢	瀬戸美濃	18c後～19c	陶器		
	図67-11	SP251	堆積土	漆鉢	肥前	17c前	陶器		
	図67-12	遺構外	図-33 Ⅱ層	仏飯器	肥前	18c	磁器	青磁	
	図67-13	遺構外	図-30 1層	仏飯器	肥前	18c	磁器	染付	
	図67-14	遺構外	CG-32 カタラン	仏飯器	肥前	18c	磁器	染付	
	図67-15	SP1316	堆積土	不明	不明	19c?	陶器		
	図67-16	遺構外	図-24 Ⅱ層	紅皿	肥前産	19c	磁器		
	図67-17	遺構外	CG-30 1層	紅皿	肥前産	19c	磁器		
	図67-18	遺構外	表探	紅皿	肥前産	19c	磁器		
	図67-19	遺構外	カタラン	紅皿	肥前産	19c	磁器		
	図67-20	遺構外	カタラン	紅皿	肥前産	19c	磁器		
	図67-21	遺構外	図-25 Ⅱ層	陶器	不明	近世～近代?	陶器		遺品 227,24
	図67-22	遺構外	図-16 Ⅱ層	不明	不明	不明	磁器?		遺品 131,5,6 磁器製焼物? 玩具?
	Ⅱ	SK16	Ⅱ	炭盆	皿?	中国	18c	磁器	青磁
	Ⅱ	SK16	CG-28 確認層	小皿	中国	17c前	磁器	染付 電文	
	Ⅱ	SK16	CI-27 高直上層 CG-27 1層	中輪	肥前	18c	磁器	染付 電文	
	Ⅱ	Ⅱ	CG-29 確認層	小皿	中国	17c前	磁器	染付 電文	
	Ⅱ	Ⅱ	CG-30 1層	中輪	中国	17c前	磁器	染付	沼津産産? 漆焼 陶7回一か
	Ⅱ	Ⅱ	CG-30 1層	中輪	不明	18c	磁器	染付	
	Ⅱ	Ⅱ	CG-29 確認層	小皿	中国	17c前	磁器	染付 電文	沼津産産? 陶4回一か
	Ⅱ	Ⅱ	CG-29 堆積土	壺	肥前	17c後～18c	陶器		
	Ⅱ	Ⅱ	CG-29 堆積土	中輪	肥前	18c	磁器	染付 コンニャク印刷 「曲輪」並	
	Ⅱ	Ⅱ	CG-29 確認層	中輪	肥前	18c	磁器	染付 輪文	
	Ⅱ	Ⅱ	CG-31 堆積土	漆鉢	瀬戸美濃	16c	陶器		
	Ⅱ	Ⅱ	CG-30 1層	小皿	瀬戸美濃	16c	陶器		PS
	Ⅱ	Ⅱ	CG-29 堆積土上層	壺・香	肥前	17c後	陶器		
	Ⅱ	Ⅱ	CG-29 確認層	大鉢	瀬戸美濃	17c	陶器	内面鉄絵	笠原鉢
	Ⅱ	Ⅱ	CG-29 堆積土	小皿	瀬戸	19c中	磁器	染付 鉄文	
	Ⅱ	Ⅱ	図-24 1層	大皿	肥前	18c	磁器	染付 草花文	焼物
	Ⅱ	Ⅱ	図-30 1層	中輪	肥前	18c後	磁器	染付 矢羽印文	
	Ⅱ	Ⅱ	図-17 1層	中輪	肥前	18c	磁器	コンニャク印刷	
	Ⅱ	Ⅱ	図-17 + 18 1層	湯飲み碗	肥前	18c後	磁器	染付 電文	
	Ⅱ	Ⅱ	図-11 Ⅱ層	大鉢	瀬戸美濃	17c	陶器	内面銅絵成し磨付	
	Ⅱ	Ⅱ	図-16 1層	小皿	瀬戸	19c中	磁器	染付	焼物



調査区全景 (E→)



C・D区全景 (真上から。写真上が南)

写真1 空撮(1)



B区 沢1・ピット群（真上から。写真上が南）



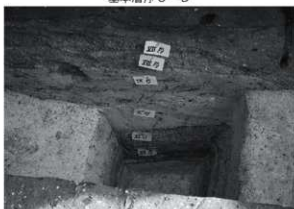
C区 ピット群（真上から。写真上が南）



基本層序C-D



基本層序A-B



基本層序A-B下層拡大

写真2 空撮(2)・基本層序



作業風景①



作業風景②



作業風景③



作業風景④



作業風景⑤



作業風景⑥



作業風景⑦



作業風景⑧

写真3 作業風景



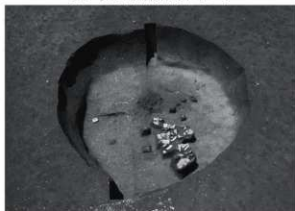
第6号竪穴住居跡完掘 (E→)



第6号竪穴住居跡土層 (E→)



第6号竪穴住居跡土層 (S→)



第6号竪穴住居跡遺物出土状況 (E→)



第6号竪穴住居跡土坑1土層 (N→)



第7号竪穴住居跡完掘 (E→)



第7号竪穴住居跡土層 (E→)



第7号竪穴住居跡土層 (S→)



第7号竪穴住居跡ピット1土層 (N→)

写真4 縄文時代の竪穴住居跡(1)



第8号竪穴住居跡完掘 (S→)



第8号竪穴住居跡土層 (S→)



第8号竪穴住居跡土層 (E→)



第9号竪穴住居跡完掘 (S→)



第9号竪穴住居跡土坑1土層 (S→)



第9号竪穴住居跡土坑2土層 (E→)



第9号竪穴住居跡遺物出土状況 (S→)



第9号竪穴住居跡炉遺物出土状況 (S→)

写真5 縄文時代の竪穴住居跡(2)



第 10 号竖穴住居跡完掘 (S→)



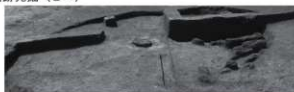
第 10 号竖穴住居跡土層 (S→)



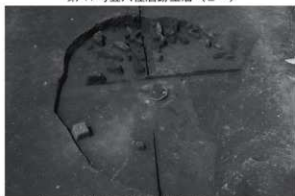
第 11 号竖穴住居跡完掘 (E→)



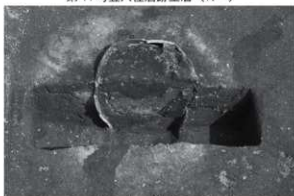
第 11 号竖穴住居跡土層 (E→)



第 11 号竖穴住居跡土層 (N→)



第 11 号竖穴住居跡炭化物出土状況 (E→)



第 11 号竖穴住居跡土器埋設炉土層 (S→)

写真 6 縄文時代の竖穴住居跡 (3)



第28号土坑土層 (N→)



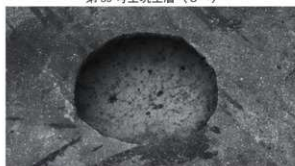
第28号土坑完掘 (N→)



第59号土坑土層 (S→)



第59号土坑完掘 (S→)



第60号土坑完掘 (E→)



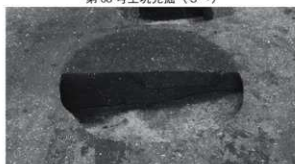
第63号土坑完掘 (S→)



第68号土坑完掘 (S→)



第69号土坑完掘 (E→)



第72号土坑土層 (S→)



第72号土坑完掘 (S→)

写真7 縄文時代の土坑 (1)



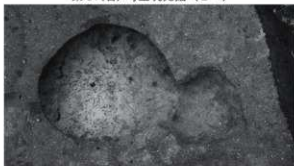
第 81(右)号土坑土層 (E→)



第 81(右)号土坑完掘 (E→)



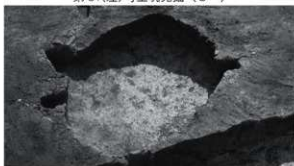
第 84(左)号土坑土層 (S→)



第 84(左)号土坑完掘 (S→)



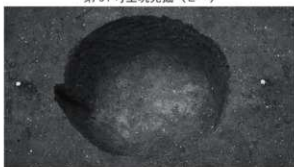
第 91号土坑土層 (E→)



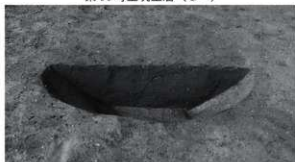
第 91号土坑完掘 (E→)



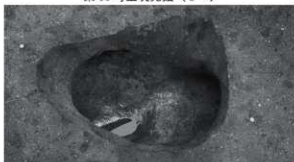
第 96号土坑土層 (S→)



第 96号土坑完掘 (S→)



第 103号土坑土層 (S→)



第 103号土坑完掘 (S→)

写真 8 縄文時代の土坑 (2)